



寺田寅彦全集 文學篇

第六卷

編輯者

安倍能成
小宮豐隆
松根東洋城
矢島祐利



大正八年秋
晴日

富壽画

短

章

CHENG YU TUNG
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5

目次

短章	その一	一
短章	その二	一八九
断片		二八七
歳時記新註		三四一
話の種		三五九
その他		四九三

短

章

そ
の
一

無 題 (一)

日常生活の世界と詩歌の世界の境界は、唯一枚の硝子板で仕切られて居る。

此の硝子は、初めから曇つて居ることもある。

生活の世界の塵に汚れて曇つて居ることもある。

二つの世界の間の通路としては、通例、唯小さな狭い穴が一つ明いて居るだけである。

併し、始終兩つの世界に出入して居ると、此の穴は段々大きくなる。

併し又、此の穴は、暫く出入しないで居ると、自然に段々狭くなつて来る。

或人は、初めから此の穴の存在を知らないか、又知つて居ても別にそれを捜さうともしない。

それは、硝子が曇つて居て、反對の側が見えない爲か、或は……餘りに忙しい爲に。

穴を見付けても通れない人もある。

それは、餘り身體が肥り過ぎて居る爲に……。

併し、そんな人でも、病氣をしたり、貧乏したりして瘦せた爲に、通り抜けられるやうになることはある。

稀に、極めて稀に、天の焰を取つて來て此の境界の硝子板をすつかり熔かしてしまふ人がある。

(大正九年五月、澁柿)

無 題 (二)

宇宙の祕密が知りたくなつた、と思ふと、いつの間にか自分の手は一塊の土くれをつかんで居た。さうして、兩つの眼がじいつと其れを見詰めて居た。

すると、土くれの分子の中から星雲が生れ、其の中から星と太陽とが生れ、アミ―バと三葉蟲とアダムとイヴとが生れ、それから此の自分が生れて來るのをまざくくと見た。

……さうして自分は科學者になつた。

しばらくすると、今度は、なんだか急に唄ひ度なくなつて來た。

と思ふと、知らぬ間に自分の咽喉から、ひとりでに大きな聲が出て來た。

其の聲が自分の耳にはいつたと思ふと、すぐに、自然に次の聲が出て來た。

聲が聲を呼び、句が句を誘うた。

さうして、行く雲は軒端に止まり、山と水とは音をひそめた。
……さうして自分は詩人になつた。(大正九年八月、澁柿)

無 題 (三)

根津權現の境内の或旗亭で大學生が數人會して居た。

夜が更けて、あたりが靜になつた頃に、何處かで梟の鳴くのが聞こえた。

「梟が鳴くね」

と一人が云つた。

するともう一人が

「なに、あれあ梟ぢやない、すつぽんだらう」

と云つた。

彼の顔の何處にも戯れの影は見えなかつた。

しばらく顔を見合はせて居た仲間の一人が

「だつて、君、すつぽんが鳴くのかい」

と聞くと

「でも何だか鳴きさうな顔をして居るぢやないか」

と答へた。

皆が聲を放つて笑つたが、其男だけは笑はなかつた。

彼はさう信じて居るのであつた。

其席に居合はせた學生の一人から、此話を聞かされた時には、自分も大に笑つたのではあつたが、あとで又よくよく考へて見ると、どうも其時には矢張すつぽんが鳴いたのだらうと思はれる。

……過去と未來を通じて、すつぽんが梟のやうに鳴くことはないといふ事が科學的に立證されたとしても、少くも、其日の其晩の根津權現境内では、たしかにすつぽんが鳴いたのである。

(大正九年九月、澁柿)

無 題 (四)

靈山の岩の中に閉込められて、無数の寶石が光り輝いて居た。

試に其中の唯一つを掘出して此世の空氣に曝らすと、忽ちに色も光も消え褪せた一片の土塊に變つてしまつた。

同時に、靈山の岩の中に秘められた凡ての寶石も、その悉くが皆唯の土塊に變つてしまつた。

私の頭の中には、數限りもない美しい繪が秘藏されて居た。

私は試に繪筆を取つて、其中の一つを畫布の上に寫して見た。

……氣の付いた時はもう間に合はなかつた。

……同時に頭の中の凡ての美しい繪もみんな無残に塗り汚されてしまつた。

さうして私は唯のつまらない一畫工になつてしまつた。(大正九年十月、澁柿)

無 題 (五)

ロンドンの動物園へ印度から一匹の傘蛇コブラが届いた。
蛇には壁蝨だにが一面に取付いて居た。

健全な蛇には此蟲が餘り付かないものである。
此んなことが先頃の週刊タイムスに出て居た。

「此の事實には色々のモラルがある」
とAが云つた。

「更に多くの詩がある」

とBが答へた。(大正九年十月、澁柿)

無 題 (六)

夜更けの汽車で、一人の紳士が夕刊を見て居た。

其の夕刊の紙面に、犬の欠伸をして居る寫眞が、懸賞寫眞の第一等として掲げてあつた。其の紳士は微笑しながら其の寫眞を眺めて居たが、やがて、一つ大きな欠伸をした。

丁度向ひ合せに乗つて居た男も矢張同じ新聞を見て居たが、犬の寫眞のある頁へ來ると、口のまはりに微笑が浮んで、さうして、……一つ大きな欠伸をした。

やがて、二人は顔を見合せて、互に思はぬ微笑を交換した。

さうして、殆んど同時に二人が大きく長くのびやかな欠伸をした。

あらゆる「同情」の中の至純なものである。(大正九年十一月、濫怖)

無
題
(七)

脚を切断してしまつた人が、時々、なくなつて居る足の先の痒みや痛みを感じることもあるさうである。

總入齒をした人が、どうかすると、その齒がづきくうづくやうに感じることもあるさうである。

かういふ話を聞きながら、私はふと、出家遁世の人の心を想ひ見た。生命のある限り、世を捨てるといふことは、とても出来さうに思はれない。

(大正九年十一月、澁柿)

無 題 (八)

一庭の植込の中などで、しやがんで草をむしつて居ると、不思議な性的の衝動を感じることがある」

と一人が云ふ。

「さう云へば、私は獨りで荒磯の岩陰などに居て、潮の香を嗅いで居る時に、やはりさういふ氣のすることがあるやうだ」
ともう一人が云つた。

此の對話を聞いた時に、私は何だか非常に恐ろしい事實に逢著したやうな氣がした。

自然界と人間との間の關係には、未だ吾々の夢にも知らないやうなものが、いくらでもあるのではないか。(大正九年十二月、澁柿)

無 題 (九)

氣象學者が cirrus と名づける雲がある。

白い羽毛のやうなのや、刷毛で引いたやうなのがある。

通例卷雲と譯されて居る。

私の子供はそんなことは無視してしまつて、勝手にスウ〜雲と命名してしまつた。

(大正九年十二月、澁柿)

無 題 (十)

親類のTが八つになる男の子を連れて年始に來た。

古い昔の教導團出身の彼は、中學校の體操教師で、男の子ばかり九人養つて居る。

宅へ行つて見ると、疊も建具も、實に手の付け處のない程に破れ損じて居るのである。

挨拶がすんで、屠蘇が出て、しばらく話して居る内に、其の子はつか／＼と縁側へ立つて行つた、と思ふといきなり其處の柱へ抱き付いて、見る間に頂上迄攀ぢ上つてしまつた。

Tが慌てゝ叱ると、する／＼と滑り落ちて、Tの横の座蒲團の上にきちんと坐つて、袴の膝を合せた上へ、大分ひゞの切れた兩手を正しくついて、さうして知らん顔をして居るのであつた。

頻に言ひ譯をするTを氣の毒とは思ひながらも、私は愉快的な、心からの笑聲が咽喉からせり上げて來るのを防ぎかねた。

貧しくても賑かな家庭で、八人の兄弟の間に自由にほがらかに活潑に育つて来た此の子の身の上を、此れとは反對に實に静かで淋しかつた自分の幼時の生活に思ひ比べて、少し羨しいやうな氣もするのであつた。(大正十年一月、澁柿)

無 題 (十一)

人殺しをした人々の魂が、毎年きまつた或月の或日の夜中から墓の中から呼び出される。

さうして、銘々の昔の犯罪の現場を見舞はせられる。

行きがけには、誰も彼も

「正当だ。おれのしたことは正当だ」

とつぶやきながら出掛けて行く。

……併し、歸りには、みんな

「悪かつた。悪かつた」

とつぶやきながら、銘々の墓場へ歸つて行くさうである。

私は、……人殺しだけはしなさいことにきめようと思ふ。(大正十年二月、澁柿)

無 題 (十二)

彼は或日齒醫者へ行つて、奥齒を一本抜いて貰つた。

舌の先で觸はつて見ると、其處に出來た空虚な空間が、自分の口腔全體に對して異常に大きく、不合理にだゞつ廣いものゝやうに思はれた。

……それが、ひどく彼に人間の肉體の果敢なさ、頼りなさを感じさせた。

又或時、かたちんばの下駄をはいて僅に三町ばかり歩いた。すると、自分の腰から下が、どうも自分のものでないやうな、何とも云はれない情ない心持になつてしまつた。

それから、……

そんな事から彼は、おしまひには、とう／＼坊主になつてしまつた。(大正十年二月、澁柿)

無 題 (十三)

生來の盲人は眼の用を知らない。

始めから眼がないのだから。

眼明きは眼の用を知らない。

生れた時から眼をもつて居るのだから。(大正十年三月、澁柿)

無
題
(十四)

アルバート・ケンプといふ男が、百十時間ぶつ通しにピアノを弾き續けて、それで世界のレコードを取つたといふ記事が新聞に出て居た。

驚くべき非音楽的な耳もあるものだと思ふ。(大正十年三月、溢柿)

無
題
(十五)

眼は、いつでも思つた時にすぐ閉ぢることが出来るやうに出来て居る。
併し、耳の方は、自分では自分を閉ぢることが出来ないやうに出来て居る。
何故だらう。(大正十年三月、澁柿)

無 題 (十六)

虱を這はせると北へ向く、といふことが云ひ傳へられて居る。

未だ實驗したことはない。

若し、多くの場合に此れが事實であるとすれば、それは此動物の背光性 *negative phototropism* によつて説明されるであらう。

多くの人間の住所では一般に南側が明るく、北側が暗いからである。

此説明が假りに正しいとしても、此事實の不思議さは少しも減りはしない。

不思議さが少しばかり根元へ喰ひ込むだけである。

凡ての科學的説明といふものに就いても同じことが云はれるとすれば、……

未來の宗教や藝術は矢張り科學の神殿の中に安置されなければならぬやうな氣がする。

(大正十年四月、澁柿)

無
題 (十七)

鳥や魚のやうに、自分の眼が頭の兩側について居て、右の眼で見る景色と、左の眼で見る景色と別々に丸でちがつて居たら、此世界がどんなに見えるか、さうして吾々の世界觀人生觀がどうなるか。……

いくら骨を折つて考へて見ても、此ればかりは想像がつかない。

鳥や魚になつてしまはなければ此れは分らない。(大正十年四月、澁柿)

無 題 (十八)

大正九年の七月に、カイゼル・ウィルヘルムの第六王子ヨアヒムが自殺をした。

ピストルの弾が右肺を貫き、心臓をかすつて居た。

一度自覺を回復したが、とう／＼助からなかつた。

妃との離婚問題もあつたが、その前から精神に異状があつたさうである。

王子の採つた自殺の方法が科學的に甚だ幼稚なものだと思はれた。

なんだか獨逸らしくないといふ氣がした。

併し、……心臓を狙ふかはりに、腦を撃つか、或は適切な藥品を選んだ場合を想像して見ると、王子に對する吾々の感情には大分の違ひがある。

やつぱり心臓を選ばなければならなかつたであらう。(大正十年五月、澁柿)

無 題 (十九)

「ダンテはいつ迄も大詩人として尊敬されるだらう。……誰も讀む人がないから」と、意地の悪いヴォルテアが云つた。

ゴッホやゴーガンも何時迄も崇拜されるだらう。……

誰にも彼等の繪がわかる筈はないからである。(大正十年五月、澁柿)

無 題 (二十)

「あらゆる結婚の儀式の中で、最も神聖で、最もサブライムなものは、未開民族の間に今日でも未だ行はれてゐる掠奪結婚のそれである。……」

近年迄、此の風習が日本の片隅に残つて居たが、惜しいことに、もう何處にも影を止めなくなつたらしい。

さうして、近頃都會で行はれるやうな、最も不純で、最も墮落した色々の様式が出来上つた。一かう云つてP君が野蠻主義を謳歌するのである。(大正十年六月、澁柿)

無 題 (二十一)

足尾の坑夫のおかみさん達が、古河男爵夫人に面會を求める爲に上京した。

「男爵の奥様でも私達でもやつぱり同じ女だ」といつたやうな意味のことを揚言したさうである。

僕は此新聞を読んだ時に、そのお神さん達の顔があり／＼見えるやうな氣がした。

さうして腹が立つた。……

いくらデモクラシーが世界に瀰漫しても、ルビーと煉瓦の缺けらとが一つになるか、と、どなり度くなつた。……

ヴィナスのアリストクラシーは永遠のものである。

かう云つてQ君が一人で腹を立て、居る。(大正十年六月、澁柿)

無 題 (二十二)

油畫をかいて見る。

正直に實物の通りの各部分の色を、其等の各部分に相當する「各部分」に塗つたのでは、出来上つた結果の「全體」はさつぱり實物らしくない。

全體が實物らしく見えるやうに描くには、「部分」を實物とはちがふやうに描かなければいけないといふことになる。

印象派の起つたわけが、やつと少し分つて來たやうな氣がする。

思つたことを如實に云ひ現はす爲には、思つた通りを云はないことが必要だといふ場合もあるかも知れない。(大正十年七月、澁柿)

無 題 (二十三)

寝入り際の夢現の境に、眼の前に長い梯子のやうなものが現はれる。

梯子の下に自分が居て、此れから登らうとして見上げて居るのか、それとも、梯子の上に居て、此れから降りようとして居るのか、どう考へても分らない。(大正十年七月、澁柿)

無 題 (二十四)

嵐の夜が明けかゝつた。

雨戸を細目にあけて外を覗いて見ると、塀は倒れ、軒端の瓦は剝がれ、あらゆる木も草も悉く自然の姿を亂されて居た。

大きな銀杏の梢が、巨人の手を振るやうに靡き、吹きちぎられた葉が礫のやうにけし飛んで居た。

見て居るうちに、奇妙な笑が腹の底から込み上げて來た。

さうして聲をあげてげら／＼笑つた。

其瞬間に私は、天と地とが大聲をあげて、私と一緒に笑つたやうな氣がした。

(大正十年八月、濫柿)

無 題 (二十五)

猫が居眠りをするといふことを、つい近頃發見した。

其様子が人間の居眠りのさまに實によく似て居る。

人間はいくら年を取つても、矢張り時々は何かしら發見をする機會はあるものと見える。

此れだけは心強いことである。(大正十年八月、澁柿)

無 題 (二十六)

「三から五ひくといくつになる」と聞いて見ると、小學一年生は「零になる」と答へる。
中學生が傍で笑つて居る。

$\infty - \infty = 1$ といふ「規約」の上に組立てられた數學が即ち代數學である。

併し $\infty - \infty = 0$ といふ約束から出發した數學も可能かも知れない。

併しそれは代數ではない。

物事は約束から始まる。

俳句の約束を無視した短詩形はいくらでも可能である。

のみならず、それは立派な詩でもあり得る。

併し、それは、もう決して俳句ではない。(大正十年九月、澁柿)

無
題 (二十七)

東京邊では、七月頃から、もうそろそろ秋の「實質」が顔を出し始める。

併し、それが爲に、却つて、いよ／＼秋の「季節」が到来した時の、秋らしい感じは弱められるやうな氣もする。

たまには、前觸れなしの秋が來たら面白いかも知れない。(大正十年九月、澁柿)

無 題 (二十八)

一に一を加へて二になる。

此れは算術である。

併し、ベクトルの數學では、 1 に 1 を加へる場合に、其の和として、 0 から 2 迄の間の任意な値を得ることが出来る。

美術展覽會の審査には審査員の採點數を加算して採否を決めたりする。

あれは算術の外に數學はないと思つて居る人達のことゝしか思はれない。

(大正十年十月、澁柿)

無 題 (二十九)

新しい帽子を買つて嬉しがつて居る人があるかと思ふと、又一方では、古い汚れた帽子を被つて嬉しがつて居る人がある。(大正十年十月、澁柿)

無 題 (三十)

昔、倫敦塔でライオンを飼つて居た。

十四世紀頃の記録によると、ライオンの一日の食料其他の費用が六ペンスであつた。

さうして囚人一人前の費用はといふと、其の六分の一の一ペニーであつたさうである。

今の上野動物園のライオンと、深川の細民との比較がどうなつて居るか知り度いものである。

(大正十年十月、澁柿)

無 題 (三十一)

コスモスといふ草は、一度植ゑると、それから後數年間、毎年ひとりで生えて來る。今年も三四本出た。

延びくゞて、私の脊丈け程に延びたが、一向に未だ花が出さうにも見えない。

今朝行つて見ると、枝の尖端に蟻が二三疋づゝ付いて居て、何かしら仕事をしてゐる。よく見ると、なんだか、苔らしいものが少し見えるやうである。

コスモスの高さは蟻の身長の数百倍である。

人間に對する數千尺に當るわけである。

どうして蟻が此の高いく／＼莖の頂上に苔の出來たことを嗅ぎ付けるかゞ不思議である。

無

題

(三十二)

白い萩がいゝといふ人と、赤い萩がいゝといふ人とが、熱心に永い時間議論をして居た。これは、實際私が、そばで聞いて居たから、確な事實である。(大正十年十一月、澁柿)

無 題 (三十三)

田端の停車場から出て、線路を横ぎる陸橋の方へと下りて行く坂道がある。

其處の道傍に、小さな風呂敷を一枚しいて、其上に墓口を五つ六つ並べ、その傍にしゃがんで、何かしきりにしゃべつてゐる男があつた。

往來人は折柄稀で、たまに通るかゝる人も、誰一人、此の商人を見向いて見ようとはしなかつた。

それでも、此男は、恰も自分の前に少くも五六人の顧客を控へてども居るやうな意氣込みでしゃべつて居た。

北西の風は道路の砂塵を此の簡単な「店」の上にまともに吹き付けてゐた。

此男の心持を想像しようとして見たが出来なかつた。

併し、めつたに人の評價してくれない、或は見てもくれない文章をかいたり繪をかいたりする
のも、考へて見れば、矢張り此の道路商人の獨り言と同じやうなものである。

〔大正十年十二月、澁柿〕

無 題 (三十四)

宿屋や料理屋などの廣告に、其の庭園や泉石の風景をペンキ繪で描いた建札のやうなものが、よく田舎の道端などに立てゝある。

例へば、其の池などが、一寸した湖水位はありさうに描かれて居るが、實際はほんの金魚池位のものであつたりする。

あゝいふ繪を描く繪かきは、併し、或意味でえらいと思ふ。

天然を超越して、しかも又兎に角新らしい現實を創造するのだから。(大正十年十二月、澁柿)

無 題 (三十五)

暮の押し詰つた銀座の街を、子供を連れてぶら／＼歩いて居た。

新年用の盆栽を並べた露店が、何軒となくつゞいて居る。

只細工のやうな福壽草よりも、せゝこましい枝振りをした鉢の梅よりも、私は、薬で束ねた藪柑子の輝く色彩をまたなく美しいものと思つた。

饅頭をふかして賣つてゐる露店がある。

蒸籠から出したばかりの饅頭からは、暖かさうな蒸氣がゆるやかな渦を巻いて立ち昇つてゐる。

私は、其の饅頭をつまんで、兩の掌でぎゅつと握りしめて見たかつた。

そして子供等と一緒にそれを味はつて見たいと思つた。

饅頭の前に動いた私の心の惰性は、つい其隣りの紙風船屋へ私を導いて、そこで私に大きな風

船玉を二つ買はせた。

饅頭を食ふ事と、紙風船を弄ぶ事との道徳的價値の差違如何と云つたやうな事を考へながら、又子供の手をひいて暮の銀座の街をぶら／＼とあてもなく歩いて行つた。

(大正十一年二月、澁柿)

無 題 (三十六)

祖父が亡くなつた時に、その唯一人の女の子として取り残された私の母は、僅に十二歳であつた。

家を繼ぐへき養子として、當時十八歳の父が迎へられる事になつたが、江戸詰の藩公の許可を得る爲に往復二ヶ月を要した。

それから五十日の喪に服した後、更に江戸迄申請して、いよいよ家督相續がきまるまでに又二ヶ月かゝつた。

一月廿七日に祖父が死んで、七月四日に家督が落着いたのださうである。

喪中は座敷に簾を垂れて白日を遮り、高聲に話しする事も、木綿車を廻はすことさへも警められた。

凡てが落着した時に、庭は荒野のやうに草が茂つて居て、始末に困つたさうである。

(大正十一年四月、澁柿)

無 題 (三十七)

安政時代の土佐の高知での話である。

刃傷事件に坐して、親族立會の上で詰腹を切らされた十九歳の少年の祖母になる人が、愁傷の餘りに失心しようとした。

居合せた人が、あはて、其場にあつた鐵瓶の湯をその老媪の口に注ぎ込んだ。

老媪は、其鐵瓶の底を撫で廻した掌で、自分の顔を矢鱈と撫で廻した爲に、顔中一面に眞黒い斑點が出来た。

居合せた人々は、さういふ極端な悲惨な事情の下にも、矢張それを見て笑つたさうである。

(大正十一年四月、澁柿)

無 題 (三十八)

子猫が勢に乗じて高い樹のそらに上つたが、下りることが出来なくなつて困つてゐる。

親猫が樹の根元へ坐つて梢を見上げては鳴いて居る。

人がそばへ行くと、親猫は人の顔を見ては訴へるやうに鳴く。

恰も助けを求めものゝやうである。

かういふ状態が二十分もつゞいたかと思ふ。

其間に親猫は一二度途中迄登つて行つたが、どうすることも出来なくて、おめくくと又下りて來るのであつた。

子猫はとうく降り始めたが、脚を迂らせて、山吹の茂みの中へ墜ち込んだ。それを抱き上げて連れて來ると、親猫はいそくと後からついて來る。

さうして、縁側に下ろされた子猫をいきなり嘗め始める。

子猫は、すぐに乳房にしゃぶり付いて、音高くのどを鳴らしはじめる。

親猫もクルー／＼と恩愛にむせぶやうに咽喉を鳴らしながら、いつまでも／＼根氣よく嘗め廻はし、嘗めころがすのである。

單に此れだけの猫の振舞を見てゐても、猫のすることは凡て純粹な本能的衝動によるもので、人間のすることはみんな靈性のはたらきだといふ説は到底信じられなくなる。

(大正十一年六月、澁柿)

無 題 (三十九)

平和會議の結果として、獨逸では、發動機を使った飛行機の使用製作を制限された。

すると、獨逸人はすぐに、發動機なしで、勿論水素なども使はず、唯風の弛張と上昇氣流を利用するだけで上空を翔けり歩く研究を始めた。

最近のレコードとしては約二十分も、樂々と空中を翔けり廻つた男がある。

飛んだ距離は二里近くであつた。

詩人をいぢめると詩が生れるやうに、科學者をいぢめると、色々な發明や發見が生れるのである。(大正十一年八月、澁柿)

無 題 (四十)

シヤトルの勸工場でいろ／＼の土産物を買つた序に、草花の種を少しばかり求めた。

そのときに、其處の賣子が

「此れはあなたに上げませう。私此花がすきですから」

と云つて、おまけに添へてくれたのが、珍らしくもない鳳仙花の種であつた。

歸つて來て播いた此等の色々の種の中の多くのものは、てんで發芽もしなかつたし、又生えたのも大抵ろくな花は付けず、一年切りで影も形もなく消えてしまつた。

併し、彼の賣子がおまけにくれた鳳仙花だけは、實に見事に生長して、さうして鳳仙花とは思はれない程に大きく美しく花を着けた。

さうして其花の種は、今でもなほ、年々に裏庭の夏から秋へかけての眺めを賑はすことになつ

て居る。

此の一些事の中にも、靈魂不滅の問題が隠れてゐるのではないかといふ氣がする。

(大正十一年十一月、澁柿)

無

題

(四十一)

切符を貰つたので、久し振りに上野音楽學校の演奏會を聞きに行つた。

彼處の聴衆席に坐つて音楽を聞いて居ると、いつでも學生時代の夢を思ひ出すと同時に又夏目先生を想ひ出すのである。

オーケストラの太鼓を打つ人は、どうも見たところ餘り勤めばえのする派手な役割とは思はれない。

何事にも光榮の冠を望む若い人にやらせるには、少し氣の毒なやうな役である。

併し、あれは實際は矢張非常に大事な役目であるに相違ない。

さう思ふと太鼓の人に對する或る好感を抱かせられる。

ロシニのスタバト・マーテルを聞きながら、こんなことも考へた。

本當の基督教はもう疾うの昔に亡びてしまつて、唯幽かな餘響のやうなものが、僅に、かういふ音楽の中に生き残つて居るのではないか。(大正十二年一月、澁柿)

無 題 (四十二)

大學の構内を歩いて居た。

病院の方から、子供をおぶつた男が出て來た。

近づいたとき見ると、男の顔には、何といふ皮膚病だか、葡萄位の大きさの疣が一面に簇生して居て、見るもおぞましく、身の毛が悚つやうな心地がした。

背中の子供は、やつと三つか四つの可愛い女の兒であつたが、世にもうらゝかな顔をして、此の恐ろしい男の背にすがつて居た。

さうして、「お父ちゃん」と呼び掛けては、何かしら片言で話して居る。

その懐かしさうな聲を聞いたときに、私は、急に何物か胸の中で溶けて流れるやうな心持がした。(大正十二年三月、澁柿)

無 題 (四十三)

數年前の早春に、神田の花屋で、ヒアシンスの球根を一つと、チューリップのを五つ六つと買つて来て、中庭の小さな花壇に植ゑ付けた。

いづれも見事な花が咲いた。

殊にチューリップは勢よく生長して、色さまざまの大きな花を着けた。

ヒアシンスは、其傍に寧ろ淋しく獨り咲いて居た。

其後別に手入れもせず、冬が来ても掘り上げるだけの世話もせず、打棄てゝあるが、それでも春が来ると、忘れずに芽を出して、まだ雑草も生え出ぬ黒い土の上に鮮かな綠色の焰を燃え立たせる。

始めに勢の好かつたチューリップは、年々に萎縮してしまつて、今年はもうほんの申譯のやう

な葉を出して居る。

苔のあるのもすくないらしい。

此れに反して、始めに唯一本であつたヒアシンスは、次第に數を増し、それがみんな元氣よく生ひ立つて、サフアヤで造つたやうな花を鈴なりに咲かせて居る。

さうして小さな花壇を我物のやうに占領して居る。

此の二つの花の盛衰は吾々に色々な事を考へさせる。(大正十二年五月、澁柿)

無 題 (四十四)

鰻をとる方法がいろいろある。

筥を用ゐるのは、人間の方から云つて最も受動的な方法である。

鰻の方で押しかけて來なければものにならない。

次には、蚯蚓の數珠を束ねたので誘惑する方法がある。

其次には、鰻の居る穴の中へ釣針をさしこんで、鰻の鼻先に見せびらかす方法がある。

此等は餘程主動的であるが、それでも鰻の方で氣がなければ成立しない。

次には、鰻の穴を捜して泥の中へ手を突込んでつかまへる。

此れは純粹に主動的な方法である。

最後に鰻搔きといふ方法がある。

此場合の成行を支配するものは「偶然」である。(大正十二年六月、澁柿)

無 題 (四十五)

無地の鶯茶色のネクタイを捜して歩いたが中々見付からない。

東京といふ處も存外不便な處である。

此頃石油ランプを探し歩いてゐる。

神田や銀座は勿論、板橋界限も探したが、座敷用のランプは見付からない。

東京といふ處は存外不便な處である。

東京市民がみんな石油ランプを要求するやうな時期が、いつかは又めぐつて來さうに思はれて仕方がない。(大正十二年七月、澁柿)

「柿の種」への追記 大正十二年七月一日發行の「澁柿」に此れが掲載されてから、丁度二ヶ月後に關東大震災が起つて、東京中の電燈が役に立たなくなつた。此れも不思議な廻りあはせであつた。

無 題 (四十六)

本石町の金物店へはいつた。

「開き戸のパタン／＼煽るのを止める、こんな風な金具はありませんか。」

覺束ない手真似をしながら聞いた。

主婦はにや／＼笑ひながら、「へい、御座います。……煽り留とでも申しませうか。」

出して來たボール箱には、なるほど、アオリドメと片假名でちやんと書いてあつた。

うまい名をつけたものだと感じた。

物の名といふものは矢張ありがたいものである。

おつりに貫つた、穴のある白銅貨の二つが、どういふ譯だか、穴に絲を通して結び合せてあつた。

三越で買物をした時に、此の結び合せた白銅を出したら、相手の小店員がにや／＼笑ひながら受取つた。

此の二つの白銅の結び合せにも何か適當な名前が付けられさうなものだと思つたが、矢張中々うまい名前は見つからない。(大正十二年八月、澁柿)

無 題 (四十七)

道端の崖の青芒の中に一本の檜の木が立つてゐる。

其幹に蟲が澤山群がつてゐる。

紫色の紋のある美しい蝶が五六羽、蜂が二種類、金龜子のやうな甲蟲が一種、其外に、大きな山蟻や羽蟻もゐる。

よく見ると、木の幹には、いくつとなく、小指の頭ぐらゐの穴があいて、其の穴の周囲の樹皮がまくれ上がり膨れ上がつて、丁度、人間の手足に出來た瘍のやうな恰好になつてゐる。

蟲類はそれ等の穴のまはりに群がつてゐるのである。

人間の眼には、おぞましく氣味の悪い此の樹幹の吹出物に人間の知らない強い誘惑の魅力があつて、此等の數多くの昆蟲をひきよせるものと見える。

私は、此の蟲の世界のバツカスの饗宴を見て居るうちに、何かしら名状し難い、恐ろしいやうな物凄いやうな心持に襲はれたのであつた。(大正十二年九月、澁柿)

無 題 (四十八)

震災の火事の焼跡の煙がまだ消えやらぬ頃、黒焦になつた樹の幹に鉛丹色の微のやうなものが生え始めて、それが驚くべき速度で繁殖した。

樹といふ樹に生え擴がつて行つた。

さうして、その丹色が、焰にあぶられた電車の架空線の電柱の赤錆の色や、焼跡一面に散らばつた煉瓦や、焼けた瓦の赤い色と映え合つて居た。

道端に捨てられた握飯にまでも、一面に此の赤微が繁殖して居た。

さうして、此れが、あらゆる生命を焼き盡されたと思はれる焦土の上に、早くも盛返へして來る新しい生命の胚芽の先驅者であつた。

三四日たつと、焼けた芝生はもう青くなり、しゆろ竹や蘇鐵が芽を吹き、銀杏も細い若葉を吹

き出した。

藤や櫻は返り花をつけて、九月の末に春が歸つて來た。

焦土の中に萌え出づる緑は嬉しかった。

崩れ落ちた工場の廢墟に咲き出た、名も知らぬ雜草の花を見た時には思はず涙が出た。

(大正十二年十一月、澁柿)

無 題 (四十九)

震災後の十月十五日に酒匂川の假橋を渡つた。

川の岸邊にも川床にも、數限りもない流木が散らばり、引つかゝつて居た。

それが、大きな樹も小さな灌木も、みんな綺麗に樹皮を剥がれて裸になつて、小枝のもぎ取られた跡は房楊枝のやうに、又さゝらのやうにそゞけ立つて居た。

それが又、半ば泥に埋もれて、脱れ出ようと藻掻いてゐるやうなのや、お互にからみ合ひ、もつれ合つて、最期の苦悶の姿を其儘に止めて居るやうなのもある。

又、辛うじて橋杭にしがみついて、濁流に押流されまいと戦つて居るやうなのもある。

上流の谿谷の山崩れの爲に、生きながら埋められた夥しい樹木が、豪雨の爲に洗ひ流され、押流されて、此處迄來るうちに、とう／＼此んな骸骨のやうなものになつてしまつたのであらう。

被服廠の慘狀を見ることを免れた私は、思はぬ處で此の恐ろしい「死骸の積」を見なければならなかつたのである。（大正十二年十二月、澁柿）

無 題 (五十)

或る日。

汽車の一番最後の客車に乗つて、後端の戸口から線路を見渡した時に、夕日が丁度線路の末の方に沈んでしまつて、僅かな雲に夕映が残つて居たので、鐵軌がそれに映じて金色の蛇のやうに輝き、もう暗くなりかけた地面に、くつきり二條の並行線を劃して居た。

汽車の進むにつれて、折々線路のカーヴにかゝる。

カーヴとカーヴとの間は眞直な直線である。

それが、多くは踏切の處から突然曲がり始める。

殆んど一樣な曲率で曲がつて行つては、又突然直線に移る。

成程、かうするのが工事の上からは最も便利であらうと思つて見て居た。

併し、少くも其時の私には、此の、曲線と直線との繼ぎはぎの鐵路が、何となく不自然で、ぎごちなく、又不安な感じを與へるのであつた。

さうして、鐵道に沿うた、昔のまゝの街道の、如何にも自然な、美しく優雅な曲線を、又なくなつかしいものゝやうに思つて眺めるのであつた。(大正十三年一月、澁柿)

無 題 (五十一)

震災後、久し振りで銀座を歩いて見た。

いつの間にかバラックが軒を並べて、歳暮の店飾りをして居る。

東側の人道には、以前のやうにいろ／＼の露店が並び、西側には矢張、新年用の盆栽を並べた
葭簀張も出て居る。

歩きながら、店々に並べられた商品だけに注目して見て居ると、地震前と同じ銀座のやうな氣
もする。

往來の人を見てもさうである。

して見ると、銀座といふものゝ「内容」は、つまり唯商品と往來の人とだけであつて、外には
何もなかつたといふことになる。

それとも地震前の銀座が、やはり一種のバラック街に過ぎなかつたといふことになるのかも
れない。(大正十三年二月、澁柿)

無 題 (五十二)

ルノアルの繪の好きな男が居た。

其男が或る女に戀をした。

其女は、他人の眼からは、どうにも美人とは思はれないやうな女であつたが、何處かしら、ルノアルの描く或るタイプタイプの女に似たところはあつたのださうである。

俳句をやらない人には、到底解することの出来ない自然界や人間界の美しさがあるであらうと思ふが、此のことゝ、此のルノアルの女の話とは少し關係があるやうに思はれる。

(大正十三年三月、澁柿)

無
題 (五十三)

夢の世界の可能性は、現實の世界の可能性の延長である。

どれ程に有り得べからざる事と思はれるやうな夢中の事象でも、よくよく考へて見ると、それは唯至極平凡な可能性をほんの少しばかり變形しただけのものである。

して見ると、事によると、夢の中で可能なあらゆる事が、人間百萬年の未來には、みんな現實の可能性の中にはいつて來るかも知れない。

若しさうだとすると、その百萬年後の人達の見る夢はどんなものであるか。

それは現在の吾々の想像を超越したものであるに相違ない。(大正十三年四月、澁柿)

無 題 (五十四)

日本は地震國だと云つて悲觀する人もある。

併し、所謂地震國でない國にも、稀には中々の大地震の起ることはある。

さうして、日本ではとても見られないやうな大仕掛けの大地震が起ることもある。

一九〇六年の桑港地震の時に生じた斷層線の長さは四百五十軒に達した。

一九二〇年の支那甘肅省の地震には十萬人の死者を生じた。

考へて見ると、日本のやうな國では、少しづつ、なしくづしに小仕掛けの地震を連發してゐるが、現在迄のところでは安全のやうに思はれて居る他の國では、存外三千年に一度か、五千年に一度か、想像も出来ないやうな大地震が一度に襲つて來て、一國が全滅するやうな事が起りはしないか。

此れを過去の實例に徴する爲には、人間の歴史は餘りに短かい。

其の三千年目か、五千年目は明日にも來るかも知れない。

其時には、其國の人々は、地震國日本を羨むかも知れない。(大正十三年五月、澁柿)

無 題 (五十五)

晩春の曇り日に、永代橋を東へ渡つた。

橋の袂に、電車の監督と思はれる服装の、四十恰好の男が立つて居た。

右の手には、其處らから拾つて來たらしい細長い板片を持つて、それを左右に打ちふりながら、橋の方から來る電車に合圖のやうな事をして居た。

左の手を見ると、一疋の生きた蟹の甲良の兩脇を指先でつまんで居る。

其の手の先を一尺程も身體から離して、さも大事さうにつまんで居る。

さうして、何となくにこやかに嬉しさうな顔をして居るのであつた。

此男の家には、六つか七つ位の男の子が居さうな氣がした。

其家は此處からそんなに遠くない處にありさうな氣がした。(大正十三年六月、澁柿)

無題 (五十六)

三四年前に、近處の花屋で、小さな鐵線かづらを買つて來て、隣家との境の石垣の根に植ゑて置いた。

其のまはりに年々生ひ茂る款冬などに負かされるのか、一向に大きくもならず、一度も花をつけたことは無かつた。

去年の秋の大地震に石垣が崩れ落ちて、そのあたりの草木は無残に壓し潰された。

併し、不思議につぶされないので助かつた鐵線かづらに今度初めて花が咲いた。

それもたつた二輪だけ、款冬の葉陰に隠れて咲いて居るのを見付けた。

地べたに這つてゐる蔓を起こして、篠竹を三本石垣に立て掛けたのにそれをからませてやつたら、それから幾日も経たない内に、面白いやうに元氣よく蔓を延ばし始めた。

少し離れた處に紅うつぎが一本ある。

去年は目ざましい咲き方をして見せたのに、石垣に叩き潰されて、やつと命だけは取止めたが、花は唯の一輪も咲かなかつた。(大正十三年七月、澁柿)

無

題

(五十七)

大道で手品をやつて居る處を、其のうしろの家の二階から見下ろして居ると、あんまり品玉がよく見え過ぎて、馬鹿らしくて見て居られないさうである。

感心して見物して居る人達の方が不思議に見えるさうである。

それも其筈である。

手品といふものが、本來、背後から見下ろす人の爲に出來た藝當ではないのだから。

（大正十三年八月、澁柿）

無 題 (五十八)

一二階の欄干で、雪の降るのを見て居ると、自分のからだは、二階と一緒に、段々空中へ上がつて行くやうな氣がする」

と、今年十二になる女の子がいふ。

かういふ子供の頭の中には、屹度大人の知らない詩の世界があるだらうと思ふ。

併し又、かういふ種類の子供には、何處か病弱なところがあるのではないかといふ氣がする。

(大正十三年八月、澁柿)

無 題 (五十九)

白山下へ來ると、道傍で馬が倒れて居た。

馬方が、バケツに水を汲んで來ては、馬の頭から腹から浴びせかけて居た。

頸の廻りには大きな氷塊が二つ三つ轉がつて居た。

毎年盛夏の頃には屢々出くはす光景である。

かう迄ならない内に、かうなつてからの手當の十分の一でもしてやればよいのと思ふことである。

曙町の、とある横町を這入ると、矢張道傍に荷馬車が一臺停まつて居た。

大きな葉櫻の枝が道路の片側一杯に影を擴げて居る下に、馬は涼しさうに休息して居た。

馬にでも地獄と極樂はあるのである。(大正十三年九月、澁柿)

無 題 (六十)

向日葵の苗を、試にいろんな處に植ゑて見た。日當りのいゝ塵塚の傍に植ゑたのは、六尺以上に伸びて、見事な盆大の花を澤山に着けた。

併し、痩せ地に植ゑて、水もやらずに打捨て、おいたのは、丈が一尺にも届かず、枝が一本も出なかつた。

それでも、申譯のやうに、莖の頂上に、一錢銅貨大の花を唯一輪だけ咲かせた。

此の兩方の花を比較して見ても、到底同種類の植物の花とは思はれないのである。

植物にでも運不運はある。

それにしても、人間には、果して此れ程迄にひどくちがつた環境に、それ〴〵適應して生存を保ち得る能力があるかどうか疑はしい。(大正十三年十月、澁柿)

無 題 (六十一)

雑草をむしりながら、よくよく見て居ると、稻に似たのや、麥に似たのや、又粟に似たのや、色々の穀物に似たのがいくつも見付かる。

恐らく其等の五穀と同じ先祖から出た同族であらうと想像される。

それが、自然の環境の影響や、偶然の變移や、其後の培養の結果で、現在のやうな分化を來たしたものであらう。

此等の雑草に、十分の肥料を與へて、段々に培養して行つたら、永い年月の間には、其等の子孫の内から、或は現在の五穀に優る良いものが生れるといふ可能性がありはしないか。

人間の種族に就いても或は同じことが云はれはしないか。(大正十三年十一月、澁柿)

無

題

(六十二)

第一流の新聞或は雑誌に連載されて居た續きものが、何時の間にか出なくなる。

完結したのだから、しなかつたのだから、はつきりした記憶もなしに忘れてしまふ。

しばらく経てから、偶然の機會に、その續きが、第二流か三流の新聞雑誌に連載されて居ることを發見する。一寸、久し振りで舊知にめぐり會つたやうな氣がする。

なつかしくもあれば、又何となく淋しくもある。(大正十三年十二月、澁柿)

無 題 (六十三)

古典的物理学の自然観は凡ての現象を廣義に於ける物質と其の運動との二つの觀念によつて表現するものである。

併し、物質をはなれて運動はなく、運動を離れて物質は存在しないのである。

自分の近頃學んだ芭蕉の所謂「不易流行」の説には、自らこれに相通するものがある。

(昭和二年五月、澁柿)

無 題 (六十四)

俳諧で「虚實」といふことが屢々論ぜられる。

數學で、實數と虚數とをXとYとの軸にとつて二次元の量の世界を組み立てる。

虚數だけでも、實數だけでも、現はされるものは唯だ。線の世界である。

二つを結ぶ事によつて、始めて無限な「面」の世界が廣がる。

これは單なる言葉の上のアナロジーではあるが、連句は矢張異なる個性の各々の X 、 Y 、即ち X_1 、 X_2 、 Y_1 、 Y_2 、 X_3 、 Y_3 ……によつて組み立てられた多次元の世界であるとも云はれる。

其れは、三次元の世界に住する吾等の思惟を超越した複雑な世界である。

「獨吟」といふものゝ成效し難い所以は此れで理解されるやうに思ふ。

又「連句」の妙趣が我々の「言葉」で現はされ難い所以も此處にある。(昭和二年五月、澁柿)

無
題 (六十五)

ラヂオの放送のおかげで、始めて安來節や八木節などいふものを聞く機會を得た。
賑かな中に暗い絶望的な悲みを含んだものである。

自分は、何となく、霜夜の街頭のカンテラの灯を聯想する。

併し、何と云つても、此等の民謡は、日本の土の底から聞こえて來る吾々の祖先の聲である。
謡ふ人の姿を見ないで、擴聲器の中から響く聲だけを聞く事によつて、さういふ感じが却て切實になるやうである。

吾々は、結局矢張り、ベートーヴェンやトビュッシーを拋棄して、もう一度此の祖先の聲から
出直さなければならぬではないかといふ氣がするのである。(昭和二年七月、澁柿)

無 題 (六十六)

「聊齋志異」の中には、到處に狐の化けたと稱する女性が現はれて来る。併し、多くの場合に、其れは自ら狐であると告白するだけで、遂に狐の姿を現はさずにすむのが多い。

唯其の行爲の何處かに超自然的な點があつても、それは智恵の長けた美女に打込んで居る愚な善良な男の目を通して、さう見えたのだ、と解釋してしまへば、自ら理解される場合が甚だ多い。それにも拘らず、此書に現はれた支那民族には、立派に所謂「狐」なる超自然的なものが存在して居て、恐らく今も猶存在して居るにちがひない。

此れは或意味で羨むべき事ではなければならぬ。少くも、さうでなかつたとしたら、此書物の中の美しいものは大半消えてしまふのである。

(昭和二年九月、澁柿)

無 題 (六十七)

絲瓜をつくつて見た。

延びる盛りには一日に一尺位は延びる。

鬚のやうな蔓を出して掴まり處を捜して居る。

蔓が何かに觸れるとすぐに曲り始め、五分とたゝない内に百八十度位廻轉する。

確かに捲きついたと思ふと、あとから全體が螺旋形に縮れて、適當な弾性をもつて緊張するの
である。

一本の鬚がまた小さな絲瓜の胴中からみついた。

大砲の砲身を針金で捲くあの方法の力學を考へながら、どうなるかと思つて毎日見て居た。

何時の間にか蔓が負けてはち切れてしまつたが、蔓のからんだ痕跡だけは、何時までもちやん

と消えずに残つて居る。

棚の上にひつかゝつて、曲玉のやうに曲つたのをおろしてぶら下げてやつたら、段々延びて眞直になつて來た。

併し外のに較べるとやつぱりいつまでも少し曲つて居る。

或宵の即景

名月や絲瓜の腹の片光り

(昭和二年十一月、澁柿)

無 題 (六十八)

子猫がふざけて居るときに、子供や妻などが、そいつの口さきに指をもつて行くと、きつと噛み付く、ひつかく。自分が指を持つて行くと舌で嘗め廻す。すぐ入れちがひに他の者が指をやる
と、矢張噛み付く。

どうも、親しみの深いものには噛み付いて、親しみの薄い相手には舐めるだけにしておくらし
い。(昭和三年一月、澁柿)

三毛の墓

三毛のお墓に花が散る

こんくこゞめの花が散る

小窓に鳥影小鳥影

「小鳥の夢でも見てゐるか」

三毛のお墓に雪がふる

こんく小窓に雪がふる

炬燵蒲團の紅も

「三毛が居ないで淋しいな」

無 題 (六十九)

S. H. Wainwright といふ學者が、和歌や俳句の美を紹介した論文の中に引用されて居る俳句の英譯を、俳句の事を何も知らない日本の英學者のつもりになつて、もう一遍日本語にしかもなるべく英語に忠實に翻譯して見ると、こんな事になる。

「如何に速く動くよ、六月の雨は、寄せ集められて、最上川に」

「大波は巻きつゝ寄せる、さうして銀河は、佐渡島へ横切つて延び擴がる」

此頃、據ない必要から、リグヴェーダの中の一章句と稱するものゝ獨逸譯を、丁度こんな調子で邦語に翻譯しなければならなかつた。

さうして實は甚だ心元ない思ひをしてゐた。

今、右の俳句の英譯の再翻譯といふ一つの「實驗」をやつた結果を見て、滑稽を感じると同時

題無

に、
いくらか肩の軽くなるのを覺えた。
(昭和三年三月、澁柿)

最上川象潟以後

(はがき) 今日越後の新津を立ち、阿賀野川の溪谷を上りて會津を經、猪苗代湖畔の霜枯を壓する磐梯山の凄まじき雪の姿を仰ぎつゝ郡山へ。

それより奥羽線に乗替上野に向ふ。

先刻西那須野を過ぎて昨年の鹽原行を想出す儘に此葉書を認め候。

誠に、旅は大正昭和の今日、汽車自動車の便あればあるまゝに憂くつらく淋しく、五十一歳の懷子には、誠によい浮世の手習かと思へば又可笑しくもある。

さるにても、山川の美しさは、春や秋のは云はゞデパートメントの賣出しの陳列棚にも譬へつべく、今や晩冬の雪漸く解けて、黄紫赤褐にいぶしをかけし天然の肌の美しさは、却て王宮のゴブランに優る。

枯芝の中に花さく露の臺を見出で、何となしに物の哀れを感じ侍る。

自動車のほこり浴びても露の臺

(昭和三年四月、澁柿)

無 題 (七十)

公園劇場で「サーカス」といふ芝居を見た。

曲馬の小屋の木戸口の光景を見せる場面がある。

木戸口の横に、電気人形エレクトロマーションに扮した役者が立つて居て、人形の身振をするのが真に迫るので、観客の喝采を博して居た。

くると廻れ右をして、シルクハットを脱いで、又冠つて、左を向いて、眼玉を左右に動かしておいて、さて口をぱくくくと動かし、それから又くると右へ廻つて同じ舉動を繰り返へすのである。

生きた人間の運動と器械人形の運動との相違を、可也本質的につかんで居るのは、流石に役者である。

例へば手の運動につれて、帽子が或る位置に来て、其の重心が支點の直上に来る頃、不安定平衡の位置を通るときに、ぐら／＼と動揺したりする、さういふ細かい處の急處をちやんと心得て居る。

勿論此の役者は物理學者ではないし、自働人形の器械構造も知らないであらうが、併し彼の觀察の眼は科學者の眼でなければならぬ。

人形の運動は凡て分析的である。總合的ではない。

大抵の人間は一種のアウトマーテンである。

あらゆる尊敬すべき生眞面目な干からびた職業者はさうである。

さうでないものは、英雄と超人と、さうして浮氣な道樂者の太平の逸民とである。

俳諧の道は、吾々をアウトマーテンの境界から救ひ出す一つの、少くも一つの道でなければならぬ。(昭和三年五月、澁柿)

無 題 (七十一)

梨の葉に黄色い斑が出来て、毛のやうなものが簇生する。

自分は子供の時から、あれを見るとぞつと寒氣がして、そして自分の頬からこめかみへかけて、同じやうな毛が生えて居るやうな氣がして、思はず頬をこすらないでは居られない。

此頃庭の楓樹の幹に妙な寄生物が澤山發生した。

動物だか植物だかわからない。

葦のやうな笠の下に、眞白い絹絲のやうなものゝ幕を垂れて、小さなテントの恰好をして居る。打つちやつておけば、樹幹は段々に此の爲に腐蝕されさうである。

此れを發見した日の晩に、ふと思ひ出すと同時に、此れと同じものが、自分の腕の其處やかしこに出来て居さうな氣がして、そして其れが實際出来て居る有様を可也リアルに想像して、寝つ

かれなくて困つた。

人の悪事を聞いたり讀んだりして、それが自分のした事であるやうな幻覺を起して、恐ろしくなるのと似た作用であるかも知れない。

そして、此れは、吾々にとつて、極めて大事な必要な感應作用であるかもしれない。

(昭和三年七月、澁柿)

無 題 (七十二)

始めて兩國の川開きといふものを見た。

河岸に急造した棧敷の一隅に席を求め、まづい辨當を食ひ、氣の抜けたサイダーを呑み、さうしてガソリン臭い川風に吹かれながら、日の暮れるのを待つた。

全く何もしないで、何も考へないで、一時間餘りもボカンとして、花火のはじまるのを待つて居る阿呆の自分を見出すことが出来たのは愉快であつた。

附近ではビールと枝豆が頻に繁昌して居た。

日が暮れて、花火がはじまつた。

打上げ花火はたしかに藝術である。

併し、仕掛花火といふものは、何といふつまらないものであらう。

特に往生際の悪さ、みにくさはどうであらう。

「ざまあみる。」

江戸ツ子でない自分でもかう云ひたくなる。

一つ驚いた事を發見した。

それはマクネイル・ホイッスラーといふ西洋人が、廣重よりも、如何なる日本人よりも、よりよく隅田川の夏の夜の夢を知つて居たといふことである。(昭和三年九月、澁柿)

無 題 (七十三)

藝術は模倣であるといふプラトーンの説がすたれてから、藝術の定義が戸惑ひをした。

或學者の説によると、藝術的制作は作者の熱望するものを表現するだけでなく、それを實行することださうである。

此の説によつて、試みに俳句を取扱つて見ると、どういふことになるであらうか。

戀の句を作るのは戀をすることであり、野蕪の句を作るのは野蕪をたれる事である。

敘景の句はどういふ事になるか。

それは十七字の中に自分の欲する景色を再現するだけではいけなくて、其の景色の中へ自分が飛込んで、其の中でダンスを踊らなくては、此の定義に添はないことになる。

此れも一説である。

少くも古來の名句と、淺薄な寫生句などとの間に存する一つの重要な差別の一面を暗示するものゝやうである。

客觀のコーヒー主觀の新酒哉

(昭和三年十一月、澁柿)

無 題 (七十四)

甲が空間に一線を劃する。

乙が其れに續けて少し短い一線を畫く。

二つの線は互に或角度を保つて居るので、此れで一つの面が定まる。

次に、丙がまた乙の線の末端から、一本の長い線を引く。

此れは、乙の線と或角度をして居るので、乙丙の二線が又一つの面を定める。

併し、此の乙丙の面は、甲乙の面とは同平面ではなくて、或角度をして居る、即ち面が旋轉したのである。

次に、丁が又丙の線の續きを引く。

アンド・ソー・オン。

長、短、長短、合計三十六本の線が春夏秋冬神祇釋教戀無常を座標とする多次元空間に、一つの曲折線を描き出す。

此れが連句の幾何學的表示である。

あらゆる連句の規約や、去嫌は、結局此の曲線の形を美しくする爲に必要な幾何學的條件であると思はれる。(昭和四年一月、澁柿)

無 題 (七十五)

石器時代の末期に、銅の使用が始まつた頃には、此新しい金属材料で、色々の石器の形を、そつくり其儘に模造して居たらしい。

新しい素材に、より多く適切な形式を發見するといふことは、存外容易なことではないのである。

又、此れとは反對に、古い形式に新しい素材を取入れて、其形式の長所を、より多く發揮させることも中々むづかしいものである。

詩の内容素材と形式との關係に就いても、同様なことが云はれる。(昭和四年三月、澁柿)

無 題 (七十六)

二年ばかり西洋に居て、歸りにアメリカを通つて、大きな建築などに見馴れて、日本へ歸つた時に、先づ横濱の停車場の小さいのに驚き、汽車の小さいのに驚き、銀座通りの家屋の低く粗末なのに驚いた。

こんな筈ではなかつたといふ氣がした。

此れは誰もよくいふ事である。

ヴァイオリンをやつて居たのが、セロを初めるやうになつて、二た月三月ヴァイオリンには觸れないで、毎日セロばかりやつて居る。

そして、久し振でヴァイオリンを持つて見ると、第一その目方の輕いのに驚く。

まるで團扇でも持つやうにしか感ぜられない。

樂器が二三割も小さく縮まつたやうに思はれ、かん處を押さへる左手の指と指との間が、まるでくつついてしまふやうな氣がする。

さういふ異様な感じは、何時となく消えてしまつて、ヴァイオリンはヴァイオリン、セロはセロと各々の正當な大きさの概念が確實に認識されて來るのである。

俳句をやる人は、時には短歌や長詩も試み、歌人詩人は俳句もやつて見る必要がありはしない

か。(昭和四年五月、澁柿)

無 題 (七十七)

一日忙しく東京中を駆廻つて夜更けて歸つて来る。

寢静まつた細長い小路を通つて、右へ曲つて、我家の板塀にたどり付き、闇夜の空に朧な多角形を劃する我家の屋根を見上げる時に、ふと妙な事を考へることがある。

此の廣い日本の、此の廣い東京の、此の片隅の、きまつた位置に、自分の家といふ、ちやんときまつた住家があり、其處には、自分と特別な關係にある人々が住んで居て、そこへ、今自分は、さも當然のことらしく歸つて來るのである。

併し、此れは何といふ偶然なことであらう。

此の家、此の家族が、果して何時迄此處に在るのだらう。

或日、一日留守にして、夜晩く歸つて見ると、もう其處には自分の家と家族はなくなつて居て、

全く見知らぬ家に、見知らぬ人が、何十年も前から居るやうな様子で住んで居る、といふやうな現象は起り得ないものだらうか、起つてもちつとも不思議はないやうな氣がする。

そんな事を考へながら、門をくゞつて内へ這入ると、もう我家の存在の必然性に關する疑は消滅するのである。(昭和四年七月、澁柿)

無 題 (七十八)

あたりが静かになると妙な音が聞こえる。

非常に調子の高い、ニィ／＼蟬の聲のやうな連続的な音が一つ、それから、油蟬の聲のやうな断續する音と、もう一つ、チツ／＼と一秒に二回位づゝ繰返される鋭い音と、此の三つの音が重なり合つて絶間なく聞こえる。

頸を左右にねぢ向けても同じやうに聞こえ、耳を塞いでも同じやうに聞こえる。

此れは「耳の中の聲」である。

平生は、此の聲に對して無感覺になつて居るが、どうかして、此れが聞こえ出すと、聞くまいと思ふ程、却つて高く聞こえて来る。

此の聲は、何を私に物語つて居るのか、考へてもそれは永久に分りさうもない。

併し、此の聲は私を不幸にする。

若し、幾日も續けて此の聲を聞いて居たら、私はおしまひには氣が狂つてしまつて、自分で自分の兩耳をゑぐり取つてしまひたくなるかも知れない。

仕合せなことには、煩はしい生活の日課が、此の悲運から私を救ひ出してくれる。

同じやうなことが私の「心の中の聲」についても云はれるやうである。(昭和四年九月、澁柿)

無 題 (七十九)

大震災の二日目に、火災が此界限までも及んで来る恐れがあるといふので、兎も角も立退きの準備をしようとした。

其時に、二匹の飼猫を、誰が如何にして連れて行くかゞ問題となつた。

此頃、ウエルズの「空中戦争」を讀んだら、陸地と縁の切れたナイアガラのゴートアイランドに、唯一人生き残つた男が、敵軍の飛行機の破損したのを繕つて、それで島を遁げ出す、其時に、島に迷つて餓えて居た一匹の猫を哀れがつて一緒に連れて行く記事がある。

其後に、又同じ著者の「放たれた世界」を讀んで居ると、「原子爆弾」と稱する恐るべき利器によつて、和蘭の海を支へる堤防が破壊され、國中一面が海になる、其時、幸運にも一艘の船に乗り込んで命を助かる男が居て、それが矢張居合はせた一匹の迷ひ猫を連れて行く、といふ一くだ

りが、ほんの些細な挿話として點ぜられて居る。

此の二つの挿話から、私は猫といふものに對する此著者の感情の凡てと、同時に又、自然と人間に對する此著者の情緒の凡てを完全に知り盡すことが出来るやうな氣がした。

(昭和四年十一月、澁柿)

無 題 (八十)

上野松坂屋七階食堂の食卓に空席を捜しあて、腰を下ろした。

向側に五六歳の女の子、其右側には三十過ぎた母親、左側には六十近いお婆さんが陣取つて居る。

純下町式の三つのデネレーションを代表したやうな連中である。

老人は「幕の内」、母子はカツレツである。

母親が給仕にソースを取つてくれと命ずると、お婆さんが意外にも敏捷に腕を延して、食卓の真中にあつた嚙を取つてお神さんの皿の前へ立てた。

「ヤーイ、オバアちゃんの方がよく知つてら。」

私が刹那に感じたと全く同じ事を、子供が元氣よく云ひ放つて、ちよこなんと澄まして居る。

母親は却つて嬉しさうに

「本當、ねえ。」

そんな相槌を打つて皿の中の整理に忙がしい。

お婆さんの顔と母親の顔とがよく似て居るところから見ると、此れはお神さんが子供をつれての買物の序に、里の母親を誘つて食堂をふれまふといふ場面らしい。

「お汁粉取りませうか、お雑煮にませうか。」

「もう澤山です。」

「でも、なんか……。」

こんな對話が行はれる。

此んな平凡な光景でも、時として私の心に張りつめた堅い厚い氷の上に、一掬の温湯を注ぐやうな効果があるやうに思はれる。

それ程に一般科學者の生活といふものが、人の心を干からびさせるものなのか、それとも此れは唯自分だけの現象であるのか。

此んなことを考へながら、あの快く廣い窓のガラス越しに、うらゝかな好晴の日光を浴びた上

題無

野の森を眺めたのであつた。(昭和五年一月、澁柿)

無 題 (八十一)

「三毛」に交際を求めて來る男猫が數匹ある中に、額に白斑のある黒猫で、からだの小さいくせに恐ろしく慄悍なのが居る。

此れが、「三毛」の子で性質温良なる雄の「ボウヤ」を、女敵のやうに付けねらつて迫害し、既に二度も大怪我をさせた。

何となく斧定九郎といふ感じのする猫である。

夜の路次などで、此猫に出逢ふと一種の凄味をさへ感じさせられる。

此れと反對に、頗る好々爺な白猫がやつて來る。

大きな顔に不均整な黄斑が少しあるのが、何となく滑稽味を帯びて見える。

「ボウヤ」は、此の「オヂサン」が來ると、喜んで一緒にいてあるのである。

今年の立春の宵に、外から歸つて來る途上、宅から二三丁の或家の軒に蹲つて居る大きな白猫がある。

よく見ると、それは正しく吾が親愛なる「オデサン」である。

此方の顔を見ると、少し口を開いて、聲を出さずに鳴いて見せた。

「ヤア、……奴さん、此處らに居るんだね。」

此方でも聲を出さずにさう云つてやつた。

さうして、唯何となくをかしいやうな、面白いやうな氣持になつて、程近い我家へと急いだのであつた。

淡雪や通ひ路細き猫の戀

(昭和五年三月、澁柿)

無 題 (八十二)

櫻の靜に散る夕、うちの二人の女の子が二重唱をうたつて居る。

名高いイタリアの民謡である。遠い國にさすらひのイタリア人が、此の歌を聞くときつと涙を流すといふ。

今、我家の子供等の歌ふ此の民謡を聞いてゐると、二夕昔前のイタリアの旅を思ひ出し、さうして矢張何かしら淡い客愁のやうなものを誘はれるのである。

ナポリの港町の夜景が心に浮ぶ。

朧夜を流すギターやサンタ・ルチア

(昭和五年五月、澁柿)

無 題 (八十三)

うすら寒い日の午後の小半日を、邦樂座の二階の、人氣の少い客席に腰かけて、遠い異國の華やかな歡樂の世界の幻を見た。

さうして、つめたい空ヲ風に吹かれて、ふるへながら我家に歸つた。

食事をして風呂に入つて、肩まで湯の中に浸つて、さうして湯にしめした手拭を顔に押し當てた瞬間に、つぶつた眼の前に忽然と晝間見た活動女優の大寫しの顔が現はれた、と思ふとふつと消えた。

アメリカは人皆踊る牡丹かな

(昭和五年五月、澁柿)

無 題 (八十四)

色々な國語の初歩の讀本には、其國々特有の色と香が極めて濃厚に出て居る。

ナシヨナルリーダーを教はつた時に、幼い頭に描かれた異國の風物は、英米のそれであつた。ブハイムを手にした時には、又別の國の自然と、人と、その歴史が、新しい視野を展開した。

ロシアの讀本をのぞくと、忽にして自分がロシアの子供に生れ變り、ラテンの初歩をかじると、二千年前のローマ市民の子供になり、蠟石盤をかゝへて學校へ通ふやうになる。

大人の讀物では、決して、此れ程濃厚な國々に特有な雰圍氣は感ぜられないやうな氣がする。翻譯といふものも或程度までは可能である。

併し、初歩の讀本の與へる不思議な雰圍氣だけは、全然翻譯の出来ないものである。

(昭和五年七月、澁柿)

無 題 (八十五)

純白な卓布の上に、規則正しく並べられた銀器の色々、切子硝子の花瓶に投込まれた紅白のカ
ーネーション、皿の上のトマトの紅とサラダの緑、頭上に廻轉する扇風機の羽搏き、高い窓を飾
る涼し氣なカーテン。

其處へ、美しいウエトレスに導かれて、二人の老人がはいつて来る。

それは芭蕉翁と歌麿とである。

芭蕉は定食でいゝといふ、歌麿はア・ラ・カルテを主張する。

前者は氷水、後者はクラレットを飲む。

前者は少なく、後者は多く食ふ。

前者は嬉しさうに、あたりを眺めて多くは無言であるが、後者はよく談じ、よく論じながら、

隣の卓の西洋婦人に、鋭い観察の眼を投げる。

隣室でジャズが始まると、歌麿の顔が急に活々して来る、葡萄酒のせむもあるであらう。

芭蕉は、相變らずニコ／＼しながら、一片の角砂糖をコーヒーの中に落して、じつと見つめて居る。

小さな泡が真中へかたまつて四方へ開いて消える。

それが消えると同時に、芭蕉も、歌麿も消えてしまつて、自分は唯一人、食堂の隅に取残された自分を見出す。(昭和五年九月、澁柿)

震生湖より

(はがき) 昨日は、朝、急に思ひ立ち、秦野の南方に、關東地震の際の山崩れの爲に生じた池、
「震生湖」といふのを見物及撮影に行つた。……………

山裂けて成しける池や水すまし
穂芒や地震に裂けたる山の腹

(昭和五年十月、濫柿)

無 題 (八十六)

新宿、武藏野館で、「トルクシブ」といふソヴェト映畫を見た。

中央亞細亞の、人煙稀薄な曠野の果に、劍のやうな嶺々が、萬古の雪を戴いて連なつて居る。

其の荒漠たる虚無の中へ、唯一筋の鐵道が、恰も文明の觸手とでも云つたやうに、徐々に、しかし確實に延びて行くのである。

此映畫の中に、夥しい綿羊の群を見せたシーンがある。

あんな廣い野を歩くのにも、羊は殆ど身動きの出来ない程に密集して歩いて行くのが妙である。まるで白泡を立てた激流を見るやうである。

新宿の通へ出て見ると、折柄三越の新築開店の翌日であつたので、あの狭い人道は非常な混雑で、丁度さつき映畫で見た羊の群と同じやうである。

して見ると、人間といふ動物にも、矢張どこか綿羊と共通な性質があるものと見える。

さう考へると、自分などは、まづ狸か貉の類かと思つて、一寸淋しい心持がした。

さうして、再び彼の荒漠たる中央亞細亞の沙漠の幻影が、此の濃やかな人波の上に、蜃氣樓のやうに浮み上がつて來るのであつた。(昭和五年十一月、澁柿)

女の顔

夏目先生が洋行から歸つたときに、あちらの畫廊の有名な繪の寫眞を見せられた。

さうして、此中で二三枚好きなのを取れ、と云はれた。

其中に、ギドー・レニの「マグダレナの MARIA」があつた。

それから又サー・ジョシユア・レーノルヅの童女や天使などがあつた。

先生の好きな美女の顔のタイプ、と云つたやうなものが、臍氣に感ぜられるやうな氣がしたのである。

其のマグダレナの MARIA を貰つて、神代杉の安額縁に收めて、下宿の楣間に掲げてあつたら、美人の寫眞なんかかけて怪しからん、と云つた友人もあつた。

千駄木時代に、よくターナーの水彩など見せられた頃、ロゼチの描く腺病質の美女の繪も示さ

れた記憶がある。

あゝいふタイプも嫌ひではなかつたやうに思ふ。

それから又グリューズの「破瓶」の娘の顔も好きらしかつた。

ヴォラプチュアスだと評して居られた。

先生の「虞美人草」の中に出て来るヴォラプチュアスな顔のモデルが即ち此れであるかと思はれる。

いつか、上野の音楽會へ、先生と二人で出かけた時に、吾々のすぐ前の席に、二十三四の婦人が居た。

極めて地味な服装で、頭髮も油氣のない、何の技巧もない束髪であつた。

色も少し淺黒い位で、おまけに眼鏡をかけて居た。

しかし後から斜に見た横顔が實に美しいと思つた。

インテリジェントで、しかも優雅で温良な人柄が、全身から放散して居るやうな氣がした。

音楽會が果て、歸路に、先生に其婦人のことを話すと、先生も注意して見て居たとみえて、あれはいゝ、君あれを是非細君に貰へ、と云はれた。

勿論何處の誰だかわかる筈もないのである。

其後しばらくたつての端書に、此間の人に何處かで會つたといふ報告をよこされた。全集にある「水底の感」といふ變つた詩は其頃のものであつたやうな氣がする。

「趣味の遺傳」もなんだか此れに聯關したところがあるやうな氣がするが、此れも覺えちがひかも知れない。

それは兎に角、此の問題の婦人の顔が何處かレニのマリアにも、レーノルヅの天使や童女にも、ロゼチの細君や妹にも少しづゝ似て居たやうな氣がするのである。

しかし、一方では又、先生が好きであつたと稱せらるゝ某女史の顔は、此等とは全くタイプのちがつた純日本式の顔であつた。

又「鯉節屋のおかみさん」と云ふのも、下町式のタイプだつたさうである。

先生は或時、西洋の或作者のかいたものゝ話をして「往來で會ふ女の七十プロセントに戀するといふ奴が居るぜ」と云つて笑はれた。

併し、今日になつて考へて見ると、先生自身も矢張其の男の中に、一つのプロトタイプを認められたのではなかつたかといふ氣もするのである。（昭和六年一月、澁柿）

曙町より（一）

先夜は御馳走ありがたう。

あの時、床の間に小手鞠の花が活かつて居たが、今日或知人の細君が来て、御土産に同じ小でまりとカーネーションを貰つた。

さうして、新築地劇團の一レ・ミゼラブルの切符をすゝめられ、兎も角も預かつたものゝ、あまり氣がすゝまないの、此方は失禮して邦樂座の映畫を見に行つた。

グレタ・ガルボ主演の「接吻」といふのを見たが、編輯のうまいと思ふ處が數箇所あつた。

例へば、慘劇の始まらうとする始めだけ見せ、ドアの外へカメラと觀客を追ひ出した後に、締まつた扉だけを暫時見せる。

次には電話器だけが大寫しに出る。

それが、どうしたのかと思ふ程長く寫し出される。

これはヒロインの蹶踏の心理を表はすものであらう。

實際に扉の中で起つた筈の慘劇の結果―横はる死骸―は、後巻で證據物件を並べた陳列棚の中の現場寫眞で、ほんのちらと見せるだけである。

尤も、こんな風な簡單に説明出来るやうな細工には本當のうまみはないので、此映畫の監督のジャック・フェイダールの藝術は、寧ろ、こんな風には到底説明する事の出来ないやうな微細なところにあるやうである。

クローズアップのガルボの顔の色々の表情を交互に映出する仕方などでも可也うまい。

云はゞそこに本當の「表情の俳諧」があるやうに思ふ。

一度御覽如何哉。序ながら此のガルボといふ女は何處か小でまりの花の趣もあると思ふが此點も如何哉。

新劇「レ・ミゼラブル」は、見ないけれども、恐らくたつた一口で云へるやうなスローガンを頑強にべた／＼と打出したものかと思ふ。

少くとも、此れには恐らく何處にも「俳諧」は見出す事が出来ないだらう、と想像される。

曙町より (二)

先日は失禮。

鐵筋コンクリートの三階から、復興の東京を見下ろしての連句三昧は、變つた經驗であつた。ソクラテスが、籠にはいつて吊下りながら、天界の事を考へた話を思出した。

日が暮れた窓から、下町の照明を眺めて居たら、高架電車の灯が町の灯の間を縫うて飛ぶのが、妙な幻想を起させた。

自分が唯一人淋しい星の世界の真中にでも居るやうな氣がした。

今朝も庭の椿が一輪落ちて居た。

調べて見ると、一度俯向きに落ちたのが反轉して仰向きになつたことが花粉の痕跡からわかる。測定をして手帳に書きつけた。

此間、植物學者に會つたとき、椿の花が仰向きに落ちるわけを、誰か研究した人があるか、と聞いて見たが、多分ないだらうといふことであつた。

花が樹にくつついて居る間は植物學の問題になるが、樹をはなれた瞬間から以後の事柄は問題にならぬさうである。

學問といふものはどうも窮屈なものである。

落ちた花の花粉が落ちない花の受胎に參與する事もありはしないか。

「落ちざまに蛇を伏せたる椿哉」といふ先生の句が、實景であつたか空想であつたか、といふやうな議論に幾分參考になる結果が、その内に得られるだらうと思つて居る。

明日は金曜だから又連句を進行させよう。(昭和六年五月、澁柿)

曙町より (三)

君の、空中飛行、水中潜行の夢の話は、其中に咽せつほい程に濃艶なる雰圍氣を包有して居る。此れに對する、僕の淋しいミゼラブルな夢の一つを御紹介する。

それは「さまよへる猶太人」にもふさはしかるべき種類の夢である。

大學構内、耐震家屋の傍を通つて居ると、枯樹の枝に妙な花が咲いて居て散りかゝる。見ると、其花瓣の一つくが羽蟻のやうな蟲である。

さうして、それが人にふりかゝると、それがみんな虱になつて取付くのである。

そこへT工學士が來た。彼は今此虱のことについて學位論文を書いて居るといふのである。

そのうちにも、此虱の花はバツ／＼と飛んで來て、僕のからだに付くのである。

あとで考へて見ると、其二三日前に地震研究所で或人と此T工學士についての話をしたことが

ある。

又矢張二三日前の新聞で、見合の時に頭から虱が出たので縁談の破れた女の話を読んだことがあつた。

併し枯木の花が虱に變る、といふことが何處から來たか中々思付かれない。

それは兎に角、此夢の雰圍氣と、君の夢の雰圍氣との對照が面白いと思ふので御知らせするにとにする。(昭和六年七月、澁柿)

曙町より（四）

二日の日曜の午後、築地の左翼劇場を見に行つた。

大分暑い日であつた。

間違へて、労働者切符の賣場へ行つたら「職場しよくば」の方ですか、と聞かれたが、何のことかわからないで、ぼんやりしながら、九十錢耳をそろへて並べたら、「どうかすみませんがあちらで御求めを願ひます」と大變に親切丁寧に教へてくれた。

資本主義の帝劇や歌舞伎座の威張つた切符嬢とは大した相違で嬉しかつた。

入場してまづ眼についたのは、カーテンの下の方に「松屋」といふ縫取りの文字で、此れが少し不思議に思はれた。

観客は大抵若い人が多く、舊式な所謂小市民の家庭のお嬢さんらしい女學生も、下町風な江戸

前のおとなしい娘さん達も居るのが特に目についた。

中年の、尤もらしいおばさん達もほつ／＼見えた。

男の中には、學生も多いが、中にはどうも刑事かと思ふやうなものも居た。

みんな平気で上着を脱いで居るのは、此れも何となく愉快であつた。

所謂ナツパ服を着て、頭を光らせ、もみ上げを剃上げた、眼の鋭い若者が二人來て隣に腰かけた。

それがニチャ／＼と止みなしにチューインガムを嚙んで居る。

アメリカ式チューインガムを尊崇することゝ、ロシア式イデオロギーを嚙んで喜ぶことゝは、全く縁のないことでもないかと思はれた。

それから三四列前の腰掛に、中年のインテリ奥様とでも云はれさうなのが二人、それは又二人お揃ひでキャラメルらしいもの——嚙み方でわかる——を嚙んで居るのが、一寸面白い對照をなして居た。

イデオロギーに砂糖がはいつて居るのである。

芝居(?)「恐山鑛山」を少し見てから降参して出てしまつた。

恐ろしいものである。

今度會つた時に話ませう。

(昭和六年九月、澁柿)

曙町より（五）

僕は此頃、硝子板を、鋼鐵の球で衝撃して、割れ目をこしらへて、其の割れ方を調べて居る。甚だ馬鹿氣たことのやうであるが、やつてみると中々面白いものである。

極く軽くたゞいて、肉眼でやつと見える位の疵をつけて、其れを顯微鏡で覗いて見ると、球の當つた點のまはりに、圓形の割れ目が、硝子の表面に出來て、其處から内部へ末擴がりに、圓錐形のひびが入つて居るが、其のひび破れに、無數の線條が現はれ、實に綺麗なものである。

面白いことには、その圓錐形のひびわれを、毎日のやうに顯微鏡で覗いて見てみると、それが段々に大きなものに思はれて來て、今では、一寸した小山のやうな感じがする。

さうして其の山の高さを測つたり、斜面の尾根や谿谷を數へたりして居ると、それが益々大きなものに見えて來るのである。

實際の此の山の高さは一分の三十分の一よりも小さなものに過ぎない。

此の調べが進めば、僕は、ひどを見ただけで、直徑幾ミリの球が、いくらの速度で衝突したかを云ひあてることが出来るであらうと思ふ。

それを當てたら何の役に立つかと聞かれると少し困るが、併し、此の話が、何か君の俳諧哲學の参考になれば幸である。

今まで、まだやつと二三百枚の硝子板しか毀して居ないが、少くも二三千枚位は毀して見なければなるまいと思つてゐる。

粟一粒 秋三界を藏しけり

(昭和六年十一月、澁柿)

曙町より（六）

小宮君は葡萄一株拾つたさうだが、僕は小鳥を一羽拾つた。

此間かなり寒かつた朝、日の當つた縁側に一羽のカナリヤが来て、丸く膨れ上つて、縁の端の敷居につかまつて居た。

人を見ても逃げもせず、却つて向ふから近寄つて來た。

何處かにしまつてある筈の鳥籠を探して居るうちに、見えなくなつたと思つたら、納戸の中へ這入り込んでゐた。

籠に入れてから、早速粟を買つて來て、それを餌函に入れてやらうとして居ると、もう籠の中からそれを見つけて頻に啼き立て、早くくれとでもいふやうに見えた。

菜葉をやると、さも甘さうにツイばんでは、嘴を止り木にこすりつけた。

日向に吊してやると朗かに鳴き出したが、聲を聞いて見ると立派なローラーである。

猫の「ボウヤ」が十月に死んでから、妙に淋しくなつた家が、これで又急に賑かになつたやうな気がして、それからは、毎朝新しい茶葉をやつては、玉をころがすやうな朗かなワープリングを聞くのが楽しみであつた。

ところが、今朝家人が餌を取替へる際に、一寸の不注意で、折角の此の楽しみを再び空に遁してしまつた。

惜しいといふよりは可哀相な気がした。

夕方家へ歸つて見ると、見馴れぬ子猫が一匹居る。

死んだ「ボウヤ」にそっくりの白い猫である。

今朝、何處からか迷つて來たのが、もうすつかりなつてしまつて、落着いて居るのださうである。

それを聞いた時に、一寸不思議な気がした。

どうも以前に一度、矢張小鳥が死ぬか逃げるかした同じ日に、子猫が迷込んで來たことがあつたやうな記憶がある。それと同じ出來事が、今日再び繰返して起つたやうな気がするのである。

しかし、どうもはつきりしたことが思ひ出せない。

或はよくあるさういふ種類の錯覺かも知れない。

拾つたと思つたら無くする、無くしたと思つたらもう拾つて居る。

面白いと思へば面白く、果敢ないと云へばはかなくもある。

此の猫を膝へのせて夕刊を讀んで居たら號外が來て、後繼内閣組織の人命が政友會總裁に降つたとある。犬養さんは總理大臣を拾つたのである。

遁げたカナリヤも誰かに拾はれなければ餓ゑ死ぬか凍ゑ死ぬだらうと思ふ。

(昭和七年一月、澁柿)

曙町より（七）

毎朝通る路次に小さなせいぐ二室位の家がある。主人は三十五六位の男だが時間のきまつた勤めをもつ人とも見え、例へば畫家とか彫刻家とでも云つたやうな人であるらしい。それは表札が家不相應に洒落た篆刻で雅號らしい名を彫付けてあるからである。六七年程前からポインタ種ポインタ種の犬を飼つて居る。ほんの小さな小犬であつたのが今では堂々としてしかも可愛い良い犬である。僕の記憶では此小犬と略前後して細君らしい婦人が此家に現はれて、門口で張物をしたり、格子戸の内のカナリアに餌をやつたり、櫺子窓の下の草花に水をやつたりして居た。犬の大きくなるにつれて此細君が段々に肥滿して二三年前にはどうしても病氣としか思はれない異常の肥り方を見せて居たが、其頃からふつつり其姿が見えなくなつて、その代りに薄汚ない七十近い婆さんが門口でカナリアや草花の世話をして居た。どうも細君が大病か或は亡くなつたのではないか

と思はれたのであるが、犬のジョンだけは相變らずいつも長閑な勇ましい姿をして顔馴染の僕を通るのを見迎へ見送るのであつた。去年の夏此家からは數町を距てた或停留所で電車を待つて居た時に、向側の寄席のある路次から、ひよつくり出て來た恐ろしくふとつた女があると思つて見ると、それが紛れもないジョンの舊主婦であつた。

去年の暮近い頃からジョンの家の門口で又若い婦人が時々張物をしたりバケツをさげたりして居るのを見かけるやうになつた。今度は前よりはもつとほつそりしたインテリジェントな顔をした婦人であつた。ジョン／＼と云つて呼ばれると犬は喜んで横飛びに飛んで行つて彼女の前垂に飛び付いて居たのである。ところが、つい二三日前に通りかゝつた時に門口で張物をして居る婦人を見ると、年齢や背恰好は同じだが、顔は此間中見たのとどうしても別人のやうに思はれた。何だか少し僕には譯が分らなくなつて來た。併し我が親愛なるジョン公だけは、相變らずそんなことには無關心のやうに堂々と長閑な欠伸をして二月の春光を一杯に吸込んで居るのであつた。

人間はまつたくおせつかいである。(昭和七年三月、澁柿)

曙町より（八）

二女の女學校卒業記念寫眞帳と、三女のそれとを較べて見て居ると、甲の女學校の生徒の顔には、自づから共通な或ものがあり、乙の女學校には、又乙の女學校特有の或ものがあるやうな氣がして來る。

不思議なやうでもあり、又當然だといふ氣もする。

日本人と朝鮮人との顔の特徴にしても矢張同様にして發達したものであらう。

唯、女學校では、僅か五年の間の環境の影響で、既にこれだけの効果が現はれる。

恐ろしいものである。

レストランで晝食をして居ると、隣の食卓へお上りさんらしい七八人の一行が陣取つた。

いづれも同年輩で、同じやうな伊賀栗あたまが、これは又申合せたやうに同じ程度に禿げて居

るのである。

或學科關係の學者の集合では、可也年寄りも多いのに一人も禿頭が居ない。

又別の學會へ行くと若い人まで禿頭が多い。

これも不思議である。(昭和七年五月、澁柿)

曙町より（九）

白木屋七階食堂で、天ぷらの晝飯を食つて居た。

隣の席に、七十餘りのお婆さんが、此れは皿の中のビーフカツレツらしいものを、両手に一つづつ持つた箸の先で、しきりにつつついて居るが、中々思ふやうに千切れない。

肉が硬くて、齒のない口では嚙めないらしい。

通りがりの女給を呼んで何か云つてゐる。

さうして、箸で僕の膳の上の天ぷらを指さし、又自分の皿の上の肉を指さし、さうして皿をたたきながら何かしら不平を云つてゐるやうである。

女給は困つた顔をして、もぢくしてゐる。

僕はすつかり氣の毒になつて、よつほど自分の皿の上の一尾の海老を取つて此老人の皿の上に

獻じたいといふ力強い衝動を感じたが、さてどうもいよ／＼となると、周囲の人に氣兼ねして、つい實行の勇氣を出しかねた。

やがて老人は長い杖をついて立上つたが、腰は海老のやうに曲つて居た。

僕は其時何となく亡き祖母や母のことを思出すと同時に、食堂の廣い窓から流れ込む明るい初夏の空の光の中に、一抹の透明な感傷のたゞよふのを感じた。

食卓の島々の中をくゞつて遠ざかる老人の後姿を眺めてゐたら、「樹靜ならんとすれど風やま
す……」といふ、あの小學讀本で教はつた對句がふいと想出された。

參らせん親は在さぬ新茶哉

(昭和七年七月、澁柿)

曙町より（十）

プラタヌスの樹蔭で電車を待つて居ると、蕎麥の出前を持つた若い娘が、電柱に寄せかけてあつた自轉車を車道へ引出した。

右の手は出前の盆を高く差上げたまゝ、左の手をハンドルにかけ、左の足をペダルに掛けて、つと車を乗出すと同時に身體を宙に浮かせ、右脚を軽く上げてサドルに腰をかけようとしたが、軽い風が水色模様の浴衣の裾を吹いて、其の端が危くサドルに引つかゝりさうになつた。

眞白な脛がちらりと見えた。

女は少しも騒がないで、巧に車の釣合を取りながら、靜に右脚をもう一遍地面に下した。

さうして、二度目には、ひらりと軽く乗移ると同時に、車輪は靜に走るやうに動き出した。

さうして、電車線路を横切つて遠ざかつて行つた。

一寸歌麿の繪を現代化した光景であつた。

朱塗の出前の荷と、浴衣の水色模様は、此の木版畫を生かすであらうと思つた。

此れとは關係のないことであるが、「風流」といふ言葉の字音が *Free, frei, France* など、相通するの面白と思ふ。

實際、風流とは心の自由を意味すると思はれるからである。(昭和七年九月、澁柿)

曙町より (十一)

「墨流し」の現象を、分子物理學的の方面から、少しばかり調べて見て居たら、段々色々の面白ことがわかつて來た。

それで、墨の製法を詳しく知りたくなつて、製造元を詮議して見ると、日本の墨の製造所は、殆ど全部奈良にあることがわかつた。

一方で、鐘かねに繫つるといふ支那の故事に、何か物理的の意味はないかといふ考から、實驗をして見たいと思つて、半鐘の製造所を詮議すると、それが矢張奈良縣だといふことがわかつた。こんなことがわかつた頃に、丁度君は奈良ホテルに泊つて鹿の聲を聞いてゐたのである。

今年今月は不思議に奈良に縁のある月であつた。

奈良へ出かけなければならぬことになるかも知れない。(昭和七年十二月、澁柿)

曙町より（十二）

今日神田の三省堂へ立寄つて、ひやかして居るうちに、「性的犯罪考」といふ本が見當つたので、氣紛れの好奇心から一本を求めた。

それから、暇つぶしに、あの脊の高い書架の長城の城壁の前をぶら／＼歩いてゐるうちに、「隨筆」と札のかゝつた區劃の前に出た。

脊の低い、丸顔の、可愛い高等學校の生徒が一人、古風な薩摩絣の羽織に、同じ絣の着物を着たのが、ひよいと右手を伸ばしたと思つて、其指先の行衛を追跡すると、それが一直線に安倍君著「山中雜記」の頭の上に到達した。

おやと思つて居るうちに、手早く書架からそれを引つこ抜いてから、しばらく内容を點檢して居たが、やがて、それをそつと元の穴へ返した、と思ふと、今度は、すぐ左隣りの「藪柑子集」を抽出して、此れもしばらく頁をめくつて居たが、やがて又元の空隙へ押しこんだ。

さうして、次にはそれから少しはなれて、十四五冊位おいた左の方へと移つて行つた。

正月の休みに郷里歸省中であつたのが、親父からいくらか貰つて、稍懷を暖かくして出京したばかりらしいから、どちらか一冊位は買ふかな、と思つて見て居たが、とう／＼失敬して行過ぎてしまつた。

尤も、或はそれから又もう一遍立歸つたかどうか、其處迄は見届けないから分らない。

それはどうでもいゝが、兎に角安倍君といふものと、自分といふものとが、此の可愛い學生の謙讓なる購買力の前で、立派な商賣敵となつて對立して居た瞬間の光景に、偶然にもめぐり合せたのであつた。

それよりも、もしあの學生が「藪柑子集」を讀んだとしたら、その内容から自然に想像するであらうと思はれる若い昔の藪柑子君の面影と、今此處で、水洩をすゝりながら「性的犯罪考」などをあさつて居る年取つた現在の自分の姿との對照を考へると、甚だ滑稽でもあり、又少し淋しくもあつた。

哲學も 科學も 寒き 噓哉

（昭和八年二月、澁柿）

曙町より（十三）

デパートなどで、時たま、若い年頃の娘の装身具を見て歩くことがある。コートとか帯とか東髪用の櫛とか、さういふものを見るときに、何だか不思議な淋しさを感じることもある。自分の二人の娘は當人達の好みで洋服だけしか着ない。髪も斷髪であるから、かういふ装身具に用はないのである。

併し、それなら、若しも娘達が和服も時々は着て、さうして髪も時々は島田にでも結ぶのであったら、父なる自分は果して此等の装身具をどれだけ喜んで買つてやる事が出来るであらうか。かう考へて見ると、更に一層淋しい想がするのである。（昭和八年四月、澁柿）

曙町より (十四)

三越新館に熱帯魚の展覽會があつた。水を入れた硝子函がいくつも並んで居る。底に少しばかり砂を入れて色々藻が植ゑてある。よく見ると小さな魚が其の藻草の林間を逍遙して居る。瑪瑙で作つたやうな三分位の魚もある。碧瑠璃で刻んだやうなものもある。紫水晶でこしらへたやうなものもある。それ等の小さな魚を注意して仔細に觀察して居ると魚が取々に大きく見えて来る。同時に其の容器の硝子函の中の空間が大きくなつて来て、深い海底の光景が展開される。見て居る自分が小さくなつてしまつて潜水衣を着て水底に潜つて居るやうな氣がして来る。

天使魚といふ長い鰭をつけた美しい魚がある、此れは他の魚に比べて大きいので容器が狭過ぎで窮屈さうで氣の毒である。囚はれた天使は悲しさうにじつとして動かない。

水槽に鼻をさしつけて覗いて居る人間の顔を魚が見たらどんなに見えるであらう。さだめて恐

ろしく醜怪な化物のやうに見える事であらう。見物人の中には美人も居た。人間の美人の顔が魚の眼にはどう見えるか々問題である。(昭和八年六月、溢穂)

曙町より (十五)

僕の不機嫌な顔は君にも有名である。

三越の隣りの刃物屋の店先に紙製の人形が、いつ見ても皮砥で剃刀を砥いでゐる。いつ見ても、さも機嫌がよささうに若い血色のいゝ顔を輝かして往來の人々に公平に愛嬌を放散してゐる。朝から晩まで、夏でも冬でも、雨が降つても風が吹いても、いつでもさもく機嫌がよささうに、せつせと皮砥をかけてゐる。羨ましいやうな氣もする。併し僕は人形ではない。生きてゐるのだから仕方がない。容してくれ給へ。

此頃は毎朝床の中で近所のラヂオ體操を聞く。一二三四五六の掛聲のうちで「ゴー」だけが特別に高く、長く飛びぬけて聞こえる。此の「ゴー」の掛聲が妙に氣になる。妙に氣恥かしくて背中がくすぐつたくなるやうな聲である。「ゴツ」と短く打切つて貰ひたい。

僕も毎朝ラデオ體操がやれるやうなほがらかな氣分になれば、さうしたら、屹度いつも機嫌のいゝ顔を御目にかけることが出来るかも知れない。(昭和八年八月、溘柿)

曙町より（十六）

八月十五日に浅間山観測所の落成式があつた。その時に、開所後は入場券を賣つて公衆の觀覽を許すといふ話が出て、五錢の入場券が五百枚賣れたら切符賣の月給位は出來さうだといふやうな取沙汰をした。十九日に再び安倍君や子供を連れて見物に行つたら、なる程觀測所の玄關にちやんと切符賣の婦人が控へて居た。歸京してから研究所の食堂でその話をしたら、その切符賣の婦人こそは浅間火口に投身しようとしたのを、峯の茶屋の主人が助けて思ひ止まらせ、さうして臨時の切符係に採用したのだといふことであつた。矢張東京のカフェーかバーに居た女ださうでそれから間もなく歸京したとのことである。そんな事とは知らないから別に注意して見なかつたが、兎に角も三十恰好の女で、さう云へば何處か都會人らしい印象があつたやうには思ふが顔は思ひ出せない。

此の科學的なインスピチュートのメンバーとして、さういふロマンチックな婦人が假令數日の間でも働いて居たといふことは、淺間山といふ特異な自然現象と關聯してはじめて生じ得る特異な人事現象でなければならぬ。

入場券は半月程の間に千七百枚とか賣れたさうである。

淺間の火口に投身した人の數は今年の夏も相當にあつた。併し三原山のは新聞に出るが、淺間のは出ない。ジャーナリズムといふものを説明する場合の一つの好い引用例になると思ふ。

(昭和八年十月、澁柿)

曙町より（十七）

先達で「煙草に關する展覽會」といふのが、三越の四階に開催された。色々面白いものが陳列されてゐる中に、伊藤博文公夫人が公の愛用のシガールのバンドを澤山に集めて、それを六枚折(?)の屏風に貼込んだのがある。古切手を貼つた面と此のバンドを貼つた面とが交互になつて居る。かういふ丹念な仕事に興味をもつ夫人をもつて居たといふことが、あの伊藤公の生涯に矢張それだけの影響を及ぼしたのかも知れないと思つた。

明治節の朝、朝香宮妃殿下の薨去が報ぜられた。風が寒かつたが日は暖であつた。上野から省線で横濱へ行つて山下町の海岸のプロムナードで「汽船のゐる風景」を眺めた。此邊の色々なビルディングに色々な外國の國旗が上がつてゐる。其中で、とある建物に上がつてゐる米國の國旗

だけが半旗として掲げられてゐる。此れが他の國旗ならなんとも思はないであらうが、米國旗であるだけにそれが妙に色々な複雑な意味のあるやうに思はれて仕方がなかつた。

(昭和八年十二月、澁柿)

曙町より（十八）

此頃朝が寒いので床の中で寝たまゝメリヤスのツボン下をはき、それから、既に夜中着たきりのシャツの上にもう一枚のシャツを、此れも寝たまゝで着ることを發明して實行して居る。

今朝は餘程頭が悪かつたと見えて、手搜りで見當をつけておいたに拘らず突込んだ右の脚はまぢがひなくツボン下の左脚にはいつて居た。それからシャツを頭から引冠つて見るとどうも工合が變である。左の腕は寢衣を脱いで居るが右の腕の方はまだ袖の中にはいつて居たのである。

出勤前に洋服に着換へるとき、チョッキのボタンを上から順にかけて行くとおしまひのボタンには相手が見付からなかつた。

そんなことでよく御役目がつとまると或人が感心する。自分も感心する。

併し、此の野呂間のおかげで三十年の學窓生活をつゞけて來た。物臭のおかげで大臣にも富豪

にも泥坊にも乞食にもならずにすんだのかも知れない。

自分は冬中は半分肺炎に罹りかけてゐる。ちよつとどうかすれば肺炎になりさうである。たつた一晚泥坊かせぎに出たら唯それだけでまゐつてしまふであらうと思ふ。泥坊の出来る泥坊の健康が羨ましく、大臣になつて刑務所へはいるほどの精力が羨ましく、富豪になつて首を釣るほどの活力が羨ましい。(昭和九年二月、澁柿)

曙町より（十九）

映畫「カンチエンヂュンガ」を見た。芝居氣の交らない生真面目な實寫の編輯は氣持のいゝものである。

印度の山中の山家が日本のによく似てゐるのを面白くもなつかしく思つた。それから、目的の山に近づく前に一度深い谷へ降りて行く光景の映寫されるのも面白かつた。

人間の世界を離れた高山に思ひがけなく一寸法師の夫婦が子供を一人養つて居るのを發見して撮影してゐる。これを見たとき「人生の意義」などいふものが文明國の人間などに中々さう簡單にわかるものではないといふ氣がした。

數十頭のヤク牛が重い荷を負はされて雪解の谿流を徒渉するのを見て居たら妙に悲しくなつて來た。牛もクリーも探檢隊の人々自身も何の爲に此の辛酸を嘗めてゐるかは知らないのである。

眞白な雪原を横切る隊列の遠望寫眞を見たときは、人間も蟲もこんな大自然の前には餘り同等なものと思はれた。雪崩の實寫は驚嘆すべき見物であるが山の神様の手から唯一とつまみの雪がこぼれただけである。

大きな雲の塊が登山者に迫つて來るのを見てゐたら、その雲が何かものを云つてゐるやうな氣がして來た。その云つてゐることがはつきり分かつたやうな氣がしたが、併し、それは矢張人間の言葉ではどうしても云ひ現はせないものであつた。

是非一遍見て來玉へ。さうして此の「雲の言葉」を句にしてくれ玉へ。(昭和九年四月、澁柿)

曙町より (二十)

有名なエノケンをはじめて映畫で見た。これまで寫眞を見ただけで、どうしても實物の芝居を見る氣がしなかつたが、映畫で見ると豫想した程に不愉快ではなく、やはりとき／＼は笑はされてしまつた。

彼には矢張何處かに「強い」ところがあると見える。それが少くも彼としての一成效一の原因であらう。兎に角見物が大丈夫笑つてくれるといふ自信をもつて居るらしい。

自信のないことを自覺してゐる演藝ほど見てゐて苦しいものはない。しかし、さうかと云つて、自信するだけの客觀的内容のない唯主觀的なだけの自信をふり廻す藝も困ることは勿論である。

至藝となると、演伎者の自信が演伎者を抜け出して觀客の中へ乗移つてしまふ。エノケンもそれまでには大分距離がある。

二村は兩立する存在ではなくて従屬し補充するだけの役目をしてゐるやうである。

(昭和九年六月、澁柿)

星野温泉より

一年ぶりに星野温泉に来て去年と同じ家に落付いて見ると、去年の夏と今年の夏との間に一年もたつたといふ氣がどうしてもしない。ほんの一週間位東京へ歸つて又出て來たやうな氣がする。尤もこれは、去年歸るときに子供等をのこして歸り、今年は先に子供等をよこしてあつたので往き歸りの引越し騒ぎに關與しなかつたからでもあるらしい。

併し、なんだか、東京に居る間は「星野の自分」が眠つてゐてその間は「東京の自分」が活動して居り、星野へ來るとはじめて「星野の自分」が眼を覺まして活動しだしたと言つたやうな氣もする。

輕微なる二重人格症の症狀とも言はれるかも知れない。併し、例へば色々な月給生活者でも、勤め先に於ける自分の生活と家庭に於ける生活とは矢張或程度までは別の世界であり、その二つ

の世界では矢張それ／＼二つの別の自分があるのではないかといふ氣もする。

(昭和九年八月、澁柿)

曙町より (二十一)

昭和九年八月十五日は淺間火山觀測所の創立記念日で、東京の大學地震研究所員數名が峯の茶屋の觀測所に集合して附近の見學をした。翌十六日は一行の中の、石本所長と松澤山口兩氏並に觀測所主任の水上市と四人が淺間に登山したが、自分と坪井氏とは登らなかつた。石本松澤山口三氏はその日二時十五分沓掛發の列車で歸京し坪井氏は三時五十三分で立ち、自分だけ星野温泉に居残つた。

翌日の東京朝日新聞長野版を見ると、石本坪井兩氏と寺田が登山し三人共二時十五分の汽車で歸京したことになつてゐた。

その後、九月五日に又星野温泉へ行つて七日に歸京したのであるが、九月十三日の某新聞消息欄を見ると、吉村冬彦が輕井澤から歸京したことになつて居る。

これ等の記事は事實の報道としてはみんな途方もない嘘である。併しこれをジャーナリズムの中にある「俳諧」と思つて見れば別に大した不都合はないかも知れない。嘘の中の眞實が眞實の眞實よりもより多く眞實なのかも知れないからである。(昭和九年十月、澁柿)

曙町より (二十二)

越後の或小都會の未知の人から色紙だつたか絹地だつたか送つて来て、何かその人の家の或る目出度い機會を記念する爲に張交ぜを作るから何か揮毫して送れ、といふ注文を受けたことがあつた。但し、急ぐから凡そ何日頃までに届くやうに、といふ細かい克明な注意まで書添へてあつた。

その儘にして忘れてゐたらやがて催促狀が来て、もし「いやならいやでよろしく」それなら送つた品を返送せよといふのであつた。それでびつくりして早速返送の手續をとつたことであつた。それから數年たつた近頃、又同じ人から端書大の色紙を二三枚よこして、これに何か書いてよこせ、「大切に保存するから」と云つて來た。

一寸日本人ばなれがしてゐる。アメリカのウォール街あたりの人のやうに實にきび／＼と物事

をビジネス的に處理する人らしく思はれる。

唯、かういふ氣質の人もつ世界と自分等の考へてゐる俳句の世界とがどういふ風につながり、どういふ工合に重なり合つてゐるかといふ事が一寸不思議に思はれたのであつた。

今度は催促されないやうに折返し色紙を返送した。(昭和九年十二月、濫柿)

曙町より (二十三)

安倍能成君が「京城より」の中で「人柱」といふことが西洋にもあつたかどうかといふ疑問を出したことがあつた。近頃ルキウス・アンネウス・フロルスの「ローマ史摘要」を見てゐたら、ロムルスがその新都市に胸壁を築いたとき、彼と雙生兒のレームスが「こんなけちな壁なんか何にもならない」と云つて一とびに飛越して見せた。その爲に結局レームスは殺されたのであるが、併しロムルスの命令によつて殺されたかどうかは不明だとある。さうして「いづれにしてもレームスは最初の犠牲犠牲ヒツギテイマであつて、而して彼の血をもつて新市の堡壘を淨化した」とある。

此の話は人柱とは少しちがふが、併し何處かしら大分似たところがある。

豚や牛のやうに人間を殺して生贄とすることは西洋には昔はよくあつたらしいが、それが神を崇め慰めるだけでなく、それによつて何か難事を遂げさせて貰ふ爲の先拂ひの報酬のやうな意味

で神々に捧げる事もあつたとすれば、結局は人柱と同じことになるのではないかと思ふ。

同じ書物に又次のやうな話もある。

餘り評判のよくない方で有名なローマの最後の王様タルキヌスが方々で攻め落した敵の市街からの奪掠物で寺院を建てた。そのときに敷地の土臺を掘り返してゐたら人間の頭蓋骨が一つ出て來た。併し人々はこれこそ此の場所が世界の主都となる瑞兆であるといふことを信じて疑はなかつたとある。吾々の現在の考へ方だと、これは何だか寧ろ薄氣味の悪い凶兆のやうに思はれるのに、當時のローマ人がこれを主都のかための土臺石のやうに感じたのだとすると、その考へ方の中には何處か矢張一人柱一の習俗の根柢に横はる思想とおのづから相通するものがあるやうな氣がする。

以上偶然讀書中に見付けたから安倍君の驥尾に付して備忘の爲に誌しておくことにした。

(昭和十年三月、澁柿)

曙町より（二十四）

或る大きな映畫劇場の入場料を五十錢均一にしたら急に入場者が増加して結局總收入が増すことになつたといふ噂がある。事實はどうだか知らない。併し、「五十錢均一」といふ言葉には何かしら現代の一般民衆に親しみと氣樂さを吹き込むものがあるのではないかといふ氣がする。六ヶしい經濟學上の理論などは分らないが、あの五十錢銀貨一枚を財布からつまみ出して切符賣場の大理石の板の上へパチリと音を立てるとすぐに切符が眼前に出現するところに一種の爽かさがある。これが四十七錢均一で一々三錢のお釣りを貰ふのだつたらどういふことになるか。相手が獨逸人か或は勘定の細かい地方の商賣人だつたらどうか分らないが、少くも東京の學生のやうな觀客層に對してはこの五十錢均一の方が經濟觀念を超越した吸引力をもつてゐさうな氣がする。こんな事を考へてゐた時に偶然友人の經濟學者に會つたので、五十錢銀貨の代りに四十七錢銀

貨を作つて流通させたら日本の國の經濟にどういふ變化が起るかといふ愚問を發して見た。これに對する經濟學者の詳細な説明を聞いた時は一應分つたやうな氣がしたが、それつ切り綺麗に忘れてしまつた。

今迄に随分色々六ヶしい事も教はつたが、錢といふものほど意味の分りにくいものに出逢つたためしはないやうである。(昭和十年五月、澁柿)

曙町より (二十五)

六月九日の日曜に家族連で上野精養軒の藤棚の下へ晝飯を食ひに行つた。隣のテーブルにも家族づれの客が多い。小さな子供のゐる食卓の上には子供の數だけのゴム風船が浮遊してゐる。うちの子供等も昔はよくかうした處で風船をもらつた時代があつたが、今はもうみんな大人になつてしまつて今日は新しい夏着夏帽夏化粧である。蓄音機のダイナミックコーンからはジャズや流行小唄が飛出して折柄の鐘樓の時の鐘の聲に和してゐる。藤棚の下には中央の噴水を繞りビーチパラソルの間をくゞつて爽かな初夏の風が吹いてゐる。妙に昔のことが想出される。

精養軒の玄關にボーイが一人立つて人待顔に入口の方を眺めてゐる。このボーイはこゝでも随分古い古參である。自分など覺えてからこの方ずつと勤續してゐるやうである。今の世にかういふ何十年一日の如き人を見ると何だか頼母しいやうななつかしいやうな氣がする。電車の車

掌などにも随分古いのがゐるがそんなのを見ても同じやうな氣がする。こんな人は矢張何處かい處のある人間であらうと思はれる。

上野から圓タクを雇つて深川の清澄公園へ行つて見た。アルカウ會といふ會と、それから某看護婦會との園遊會で賑はつてゐる。關東震災火災の數日後この邊の燒野を見て歩いたとき、この庭園の周圍の椎かなんかの樹立が黒焦になつて、園内は避難民の集落になつてゐた、その當時の光景を想出した。あの震災のときには未だ生れてゐなかつたやうな年頃の子供等が大勢遊んでゐる。清洲橋の近くの一錢蒸汽の待合所を目當てに河岸を歩いてゐたら意外な處に芭蕉庵舊跡と稱する小祠に行き當つた。さうしてこの偶然の發見のおかげで自分の今迄描いてゐた芭蕉庵の夢が一度に消えてしまつた。

待合所で船を待つてゐたら、退屈してゐるらしい巡査が話しかけた。佛國映畫に出るブレジャーンといふ俳優に似た顔をしてゐる。「これから土左衛門が多いですよ」といふ。七割は自殺者ださうである。新聞には出ないが三原山よりは多いといふ。

一錢蒸汽の中で丸藥の見本を二粒づゝ船客一同に配つておいてから、そろ／＼と三百何十粒入りの袋を賣り出す女がゐた。何處へ行つても全く油斷の出來ない世の中である。

言問まで行くつもりであつたが隅田川の水の臭氣に厭きたので吾妻橋から上がつて地下鐵で銀座迄出てニューグランドでお茶をのんだ。

近頃の大旅行であつた。舟車による水陸の行程約七里半、徒歩ならゆつくり一日がゝりのところである。

自分の生れない前に両親が深川西六間堀に住まつてゐた頃、自分の一番末の姉を七歳で亡くして休日の度に谷中の墓地へ通つたといふ話を聞かされたことがあつた、それを今日ふいと思出した、殆ど一日がゝりの墓参りであつたらしい。

なつかしや未生以前の青嵐

(昭和十年七月、澁柿)

曙町より（二十六）

風呂桶から出て胸のあたりを流してゐたら左の腕に何かしら細長いものがかすかにさはるやうな痒味を感じた。女の髪の毛が一本からみついてゐるらしい。右の手の指でつまんで棄てようとするとそれが右の腕にへばり付く。へばりついた處が海月の絲にでも觸つたやうに痛痒くなる。浴室の弱い電燈の光に眼鏡なしの老眼では毛筋がよく見えなただけに一層始末が悪い。あせればあせる程執念深くからだの何處かにへばりついて離れない。さうしてそれが觸つた處がみんな痒くなる。やうやく離れたあとでもからだ中が痒いやうな氣がした。

風呂の中の女の髪は運命よりも恐ろしい。（昭和十年九月、澁柿）

曙町より (二十七)

子供のときから夜具といへば手織木綿の蒲團に餘り柔くない綿のはいつたのに馴らされて來たせむか今でも餘り上等の絹夜具はどうもからだに適しない、それでなるべくごつ／＼した紬か何かに少し堅く綿をつめたのを掛蒲團にしてゐる。

今度からだが痛む病氣になつて臥床したまゝ來客に接するのにあまり不體裁だといふので絹の柔いのを用ゐることにした。處がこの柔い絹蒲團といふ奴はいくら下からはね上げておいても丁度飴か餅かのやうにじり／＼と垂れ落ちて來て、すつかりからだを押さへつけあらゆる隙間を埋めてしまふ。それで一寸でも身動きしようとするこの飴が痛むからだには無限の抵抗となつて運動を阻止する。蠅取紙にかゝつた蠅の氣持はこんなものかといふ氣がする。

天網の如く、夢魔のごとく、運命の神の如く恐ろしいものは絹蒲團である。

(昭和十年十一月、澁柿)

短

章

その二

無 題 (八十七)

美人と云へば女に限るやうである。美醜は男をスペシファイする屬性にならぬと見える。甘い辛いが繪具の區別に役立たぬやうに。

無

題

(八十八)

宅の前に風呂屋が出来て、いろ／＼な迷惑を感じることもある。併し、どんな悪いことにでも何かしら善いことがある。第一には、宅へ始めて尋ねて来る人には此の風呂屋の高い煙突を目當てにして来るやうに教へると分かりが早い。それから、第二には夜の門前が明るくなつて泥坊の徘徊には不便である。第三には、此の風呂屋が出来てから門前に近く新に消火栓が設けられた。尤も、此れは近くに高官の邸宅があるおかげかも知れない。

無
題 (八十九)

睡蓮の花は昔から知つて居る。併し、此の花が朝開いて午後に睡るといふことは、今年自分の家をつくつて見て始めて知つた。睡蓮といふ名の所由がやつとわかつたのである。水蓮などいふ當て字をかく人のあるのを見ると、此れは自分だけの迂闊でもないらしい。人間ののんきさ加減が此んなことから分かる。併し又人間の世智辛さが此れで分かる、とも云はれるであらう。

無

題

(九十)

三原山の投身者の記事が今日新聞紙上に跡を絶たない。よく聞いて見ると、淺間山にも可なり多數の投身者があるさうであるが、此方は新聞に出ない。ジャーナリズムといふ現象の一例である。

無

題

(九十一)

「陸相官邸にて割腹」といふ大きな見出しの新聞記事がある。陸相が割腹したのかと思ふと、陸相の官邸で誰かゞ割腹したのである。日本語の不完全を巧に利用したジャーナリズムのトリックである。

無

題

(九十二)

夜中に眼が覺めた。何處かで「デンポー、デンポー」と云つてゐるらしい聲が聞こえる。それから五分も経つと又同じやうな聲が聞こえる。餘り長い間をおいて屢々繰返されるから不思議だと思つて注意して居ると數町さきの通りを通る自動車の「ブ、ブー」といふ警笛が聞こえる。さつきの「デンポー」は矢張自動車の警笛であつた。笛のうちには音色が可なり人聲に似たのがあると見える。

無 題 (九十三)

犬吠岬の茶店の主人の話ださうである。三十年來の經驗で、自殺者心中者は大抵様子でわかる。思案にくれて懊惱してゐるやうなのは却つて死なない。寫真でも撮らせたり、ひどく元氣よくはしやいで居るのが怪しいといふことである。一體死ぬ程に意氣銷沈したものなら首縊りの繩を懸けるさへ大儀な氣がしさうである。それをわざ／＼遠く出かけて、しかも三原や淺間に山登りをする元氣があるのは不思議なやうな氣がする。かういふ種類の自殺者は、悲觀の爲ではなくてみんな興奮の爲に死ぬるのだらうと思はれる。

無 題 (九十四)

淺間觀測所へ二度日に行つたら中年の女が玄關で切符を賣つてゐた。峯の茶屋の人達に比べると何處か都會人らしいところのある人柄であつた。歸京してから聞いて見ると、矢張淺間へ身を投げに來たのを、峯の茶屋の人が助けて、一時間に合はせの切符賣に採用したのださうで、それから間もなく東京へ歸つて行つたさうである。矢張カフェーとかバーとかにゐた女であつたらしい。さういふロマンスをもつた女性が、兎も角も科學的研究を目的とするインスチテュートのメムバーとして數日でも働くといふのは餘程珍しい現象である。火山といふ極めて特異な地球の現象と結びついてのみ始めて起こり得る珍しい現象であらうと思はれる。

無 題 (九十五)

第一相互館の屋上で夜の銀座を眺めて居たら、突然停電で屋上は眞闇になり、同時に銀座の兩側の街燈も消えたが、街壁を飾るネオンサインはみんな平氣で點つてゐた。しばらくして、街燈が一度に點つたが、自分等のゐる屋上は未だ眞暗であつた。さうして樓下の町で先づばつと明るさが増して、しばらくしてからやつと屋上が點燈した。人間の中風のメカニズムを想出すのであつた。

無

題

(九十六)

電話が自働式に變ると同時に所屬局が「小石川」から「大塚」に移り、更に又番號がもとより三〇〇〇だけ數を増した。なんだか自分のうちが遠い處へ持つて行かれたやうな氣がする。居は心に移すといふが、心は居を移すとも云はれさうである。

無 題 (九十七)

去年の秋手賀沼までドライヴした序に大利根の新橋まで行つて見た。利根川の河幅はこの橋の上流の處で著しく膨大して幅二籽半程の沼地になつてゐる。それに唯一面に穂芒が茂り連なつて見渡す限り銀色の漣波を湛へてゐた。實にのび／＼と大きな景色である。橋の袂の土手を下りて見上げると、この長さ一籽の眞直なコンクリートの橋の下にそれと並行して下流の鐵道の鐵橋が見え、折柄通りかゝつた上り列車が玩具の汽車でもあるやうに思はれた。

今迄一向聞いたこともないこんな處にこんな絶景があると思ふことは此處に限らず屢々ある。

さういふ處は併し大抵繪にかいても繪にならず、寫眞をとつても仕様のないやうなところである。有名な名所になる爲の資格が缺けてゐるのである。

かういふ處の美しさは純粹な空間の美しさである。それは空虚な空間ではなくて、人間に一番

大事な酸素と窒素の混合物で充填され、さうしてあらゆる膠質的浮游物で象嵌された空間の美しさである。肺臓一杯に自由に呼吸することの出来る空氣の無盡藏の美しさなのである。

往復共に小菅の刑務所の傍を通つた。刑務所の獨房の中の數立方米に固く限られた空間を想像して見たときに、この大利根河畔の空間の美しさが一層強烈に味はれるやうな氣がするのであつた。

無 題 (九十八)

昨年九月の暴風雨で東京の街路樹が大分いぢめられた。多分所謂「鹽風」であつた爲か、樹々の南側の葉が焦げたやうに黒褐色に縮れ上がつて、はじめに見萎らしい光景を呈してゐた。丸の内の街路の鈴懸の樹のこの慘狀を實見したあとで帝劇へ行つて二階の休憩室の窓から御堀の向側の石崖の上に並んだ黒松を眺めてびつくりした。此等の松の針葉はあの鹽風にもまれてもちつとも痛まないばかりか却つてこの嵐に會つて塵埃を洗ひ落されたのか、ブラシでもかけたかと思ふやうにその濃緑の色を新鮮にして午後の太陽に照らされて輝いてゐるやうに思はれた。

日本の海岸に何故黒松が多いかといふ譯がはじめてはつきりわかつたやうな氣がしたのであつた。

國々にそれ／＼昔から固有なものには矢張それ／＼にそれだけのあるべき理由があるのである。

無
題
(九十九)

昭和九年の十一月中旬には東京の丸の内の處々の柳が青々として風に靡いて居た。その一方で銀杏はもうすっかりその黄葉をふるひ落してゐるのであつた。

十月には武藏野の何處かで櫻が返り咲きに満開したさうである。十一月廿五日になつても未だ庭のカンナが咲き續けてゐた。

植物でも季節の變調に欺され易いのとさうでないのとあるらしい。

無 題 (百)

夏目先生の御弟子と見られてゐる人が可也大勢居るやうである。この「御弟子」の意味が随分漠然としてゐて自分にはよく分らない。少し嚴密に分類するとこの「御弟子」の種類が相當澤山にありさうである。古い方では松山の中學校で先生から英語を教はつた人達がある。その中でそれつ切りもう直接には先生と交渉を失つた人々も矢張弟子の一種である。又さうした人達の中で後になつて再び先生と密接な交渉をもつやうになつた人の中でもMN君のやうにあらゆる意味で師事した人もあれば、又MB氏のやうに醫師として接觸した人もある。それから又熊本高等學校時代に英語を教はつた人々、その中で自分などのやうに俳句をも教はつた爲に先生の私邸に出入することの出來た果報のものもある。もしかすると逆に出入する爲に俳句を教はつたのではないかといふ嫌疑もなくはない。又先生の家食客となつて日常親しく先生の人に接近することの出來

た幸運の人達もある。次には先生の東京時代に一高や大學で英語英文學を教はつた廣い意味での弟子達がある。その中で先生の千駄木町時代にその門に出入した人達がある。一方では英文學科以外の學生でその頃の先生の門下に參じた人もあるかと思はれる。

千駄木時代は先生の有名になり始めから大體有名になり切るまでの時代で、作品から云つても「猫」から「虞美人草」へかけての時代である。この頃の先生に牽付けられて先生の膝下に慕ひ寄つた御弟子には矢張それだけの特徴がありはしないかと思はれる。短かい西片町時代を経て最後の早稲田時代になると、もう文豪としての位地の確定した時代で、作品も前とは大分ちがつた調子のもになつてしまつてゐた。此の時代に新に門下に參じた人々の中には千駄木時代の先生の要素に傾倒した人と又此の時代の先生の新しい要素に牽引された人とがあつて、それ／＼ちがつた特色をもつてゐるのではないかと想像される。併し具體的の分類をしると云はれると矢張六かしい。

それは兎に角先生の藝術なり又その藝術の父なる先生の人に吸引されて屢々その門に出入した人々を「御弟子」と名づけることになつてゐるやうである。併しこの上記の定義は實は甚だ不完全であるかと思はれる。例へば故〇〇君の如く先生に傾倒して毎週殆ど缺かさず出入りして、さ

うして先生の揮毫を見守つて居た人が、矢張普通の意味で御弟子と云はれるかどうか疑問である。その外にも始終先生に接してゐながら先生からどれだけの精神的影響を受けたかといふことが分りにくい人もあるかも知れない。反對に先生に接しないで唯その作品だけから異常に強い影響を受けてゐる人も澤山あるかも知れない。かうなると何が御弟子で何が御弟子でないか分らなくなつてしまふ。

併し、どんな人でも先生に接して後のその人を見て、もし先生に接しなかつたとした場合のその人を推察することは不可能であるから、先生の影響が無いなどは云はれない譯である。して見ると結局「御弟子」の定義には證明の可能な一門戸出入一の頻度を標準とするのが唯一の「實證的」な根據なのであらう。

もし何かの訴訟事件でも起つて甲某が先生の弟子であつたか、なかつたかといふ事が問題になつたとしたら——そんなことがあり得るかどうかは知らないが——その時には矢張この「實證」以外に何物も物を云はないであらうと思ふ。

御弟子の名も果敢ないものである。

無 題 (百一)

震災や火災や風水害に關する科學的常識とこれに對する平生の心得と云つたやうなものを小學校の教科書に入れるといふことは、日本のやうな國では實に必要なことである。これは殆ど「問題にならぬ」程明白なことであると思はれるのに、これがどういふ譯だか一向に實行されてゐないで時々「問題になる」やうである。

自分の想像するところでは、結局教科書を編纂する機關の中に科學的な頭腦とその主動的な要素が排除してゐるのではないかと思はれる。もしかこの想像が幾分でも當つてゐるとしたら、甚だ逆説的な云ひ分ではあるが、小學生を教へる前に先づ文部省を教育しなければならぬのだとも云はれるかも知れない。

小學教科書の編纂には矢張單に文科方面のみならずあらゆる主要な自然科學の各部門からの代

表者を集めて資料選擇の任に當らせる必要があるかと思はれる。

多くの人の見る所では、小學の教科書には忠良なる文化的日本人として一生知らなくても大して差しつかへのないやうな事項が數々ある一方で、知らなくてはならないと吾々に思はれる事を書いてないことが澤山あるやうである。

例へば手近なところで震災火災風災に對する科學的常識とか、細かいことでは例へば揮發油取扱の注意とか、誤つて頭を打撲したときの手當とかいふものは萬人必要の知識であるが自分の知る限り少くも十分には取扱はれてゐない。

I博士の云ふ所を無斷で借用すれば、ドリアンといふ臭くてうまい菓物のことなど知らなくても日本人の一分は立つのである。又かうした種類の知識は心掛けのある兒童で後日さういふ知識を必要とするやうな階級になるへき素質をもつたものなら教科書で教はらなくても雑誌などからいくらでも覺えるであらうし、又、一生そんな知識を要しないやうな階級の子供なら折角教科書で骨折つて教へても恐らく三年たゝない間に綺麗に忘れてしまひさうに思はれる。

兒童教育より前に矢張大人であるところの教育者並に教育の事を司る爲政者を教育するのが肝要かも知れない。

無
題 (百二)

學校を卒業したばかりの秀才が先生になつて講義をすると兎角講義が六かしくなり易い。これには色々の理由があるが、一つには自分の歩いて來た遠い道の遠かつたことを忘れるといふせゐもあるらしい。

若い學者が研究論文を書くとき、兎角獨り合點で説明を省略し過ぎて、人がよむと分かりにくいものにして仕舞ふ場合が多い。これも色々の理由があるが、一つには自分がはじめて這入つた社會の先進者の頭の水準を高く見積り過ぎる爲もあるらしい。

無 題 (百三)

昭和九年の秋英人スコットの乗つた飛行機が英國と濠洲メルボルンとの間をたつた七十一時間で飛び渡つた。

その目ざましい成效の報知が我邦に傳はつた晩に丁度日本の東京のJ O A Kで文士の航空に關する座談會といふのが放送された。それは先日新聞社の催しで數名の知名の文士を北半日本のリレー飛行に搭乘させた、そのときの感想を話し合はさせるといふ趣向なのである。

いづれも生れて初めて飛行機に乗つて珍らしく感じたことを語り合つてそれを全國の聴取者に聞かせるのである。

世界地圖をあけてスコットの飛んだ距離と、此等の日本の文士の一人づゝが飛んだ距離とを比べて見たときに、何となく多少の皮肉な感じを起こさない譯には行かなかつた。

無
題
(百四)

上野公園の一隅にある鐵筋コンクリートの建物の中で時々科學者が寄集まつて事務的な相談會を聞くことがある。事務は事務だが兎も角も六かしい學問に關係した人事の相談である。寄合ふ人々はみんな眞面目な浮世離れのした中年以上の學者ばかりである。かういふ會が朝の十時頃から始まつて晝飯時一時間の休憩があるだけで午後六時頃迄もぶつ通しに續くことも珍らしくない。かういふときに、會が終つてほつとした氣持で外へ出て、さうして連に別れて一人でぶら／＼公園を歩いて居ると、いつも見飽きるほど見馴れた公園の森や草木が今迄かつて見たことのないやうに異常に美しく見え、又行通りの人々の顔が實に楽しく喜ばしさうに見え、さうして特に女子供が譬へやうもなく美しく愛らしく見えてくる。今迄堅く冷くすつかり凍結してゐた自分の中の人間らしい血潮が急に雪解のやうに解けて流れて全身をめぐり始めるやうな氣がするのである。

學者であつて、しかも同時に人間であることが如何に六かしいものかといふことをつくぐ考へさせられるのは、さういふ時である。

無 題 (百五)

血液の化學成分は驚くべき精密さを以て恆同に保たれてゐる。一寸勞働でもして血液中の水素イオン濃度が僅に一億分一だけ増すとすぐ呼吸が忙しくなつて血液中の炭酸瓦斯を洗滌させる。

人間の社會もこの位有機的になつて、全系統の生理に有害なものを自働的に驅逐するやうな機巧が具はつてゐるといふと思ふ。

現在でも或程度迄は既にさうなつてゐるかも知れない。併しこの調節作用を阻害するやうな病氣が餘りに多く、それに對する抵抗力が餘りに弱いのではないかと思はれる。

無題 (百六)

或日電車で新宿の通を通過しながら街路を眺めてゐると、兩側の人道に殆ど軒並に同じやうな建札が立ち並んで居る。見るとそれには區會議員か何かの候補者の名前が書いてある。小さな張板位の恰好の木枠に白紙を貼つて、それに筆太に墨黒々と「原野九郎」とか「小菅雷三」とか「不破伊勢次」とかさう云つた感じのする名前が書きひけらかしてある。

その建札に交つて又ところ／＼これとよく似てはゐるが少し風變りな建札が見える。それには「よせ鍋はま鍋」「蒲焼三十錢」「〇〇大特賣大安賣」などゝいふ文句が讀まれる。

建札が同型であるといふ事實の裏にはその建札の内容にも若干の共通點があるといふ事を暗示するのではないかといふ氣がした。

どちらも「賣物」である。さうしてどちらにも用心しないと喰はせ物があるかも知れない。

食物や商品のいかものが市民に及ぼす害毒は、腐敗した議員達のそれに比べたらそれ程でもな
らであらう。

無 題 (百七)

元素には今では原子番號數といふものが出來て、何番の元素と云へばそれで事柄は完全に確定する。それなのに今でも科學者は矢張水素とか酸素とかテルリウムとかウラニウムとか、云はゞ一種の「源氏名」のやうなものを付けて平氣でそれを使つてゐるのである。人間味を出來るだけ脱却しよう、凡ての記載を出來るだけ數學的抽象的なものにしようといふ清教徒的科學者の捨てようとして矢張捨て切れない煩惱の悲哀がかういふ處にも認められるであらう。

科學と云へども人間の產んだ愛兒の中の愛兒である。血の氣を絞取つてしまつたら乾干しになつて、孫を産む活力などは亡くなつてしまひはしないかといふ氣がする。

それは兎に角、元素の名前に「桐壺」「筈木」など、いふのをつけて獨りで喜んでゐる變つた男も若干はあつても面白いではないかと思ふことがある。併しもしそんなのがあつたら嘸や大學教

授達に怒られることであらう。

無
題
(百八)

自分の缺點を相當よく知つてゐる人はあるが、自分の本當の美點を知つてゐる人は滅多にないやうである。缺點は自覺することによつて改善されるが、美點は自覺することによつて損はれ亡はれるせゐではないかと思はれる。

無 題 (百九)

髪を短くしてゐる人は大概髪を延ばすと醜くなるやうなたちの人だと床屋が云ふ。それはさういふ場合もあるかも知れないが、又さうでない場合があるかも知れない。

いつもとりすました顔をしてゐる女は、多分すましたときの方が一番美しく見えるやうな型であり、始終笑顔を見せてゐる女は、矢張さうした方がすましてゐるより美しく見えるやうな型の顔であるかも知れない。少くも當人がさう信じてゐることだけは慥であらうと思はれる。

銘々で口をきいて銘々の意見を吐露すべき會合の席上でいつでも黙々として始からおしまひまで口を利かない人がある。もしかするとそれは口をきくと自分の美と尊嚴を損ふことを恐れる人ではないかといふ氣がする。又これと反對に所謂一言居士と稱するものもある。これは勿論自分の一言の眞と美を信ずるからのことであらう。併し、自分の「我」に固執する點ではどちらも似た

ものである。

公人としての會議では矢張公の問題そのものゝ前に自分の私を忘れるべきであらう。「顔」を氣にする女の場合とはちがふと思はれる。

無 題 (百十)

猫の尻尾は猫の感情の動きに應じて様々の位置形状運動を示す。よく觀察してゐると、どういふ場合にどんな恰好をするかといふことはいくらか分つて來る。併し、尻尾のない吾々人間には猫の「尻尾の氣持」を想像することは困難である。舌で舐めたり後脚で搔いたりする氣持は大凡想像して見ることが出來ても尻尾の振り心地や曲げ心地は夢想することも出來ない。従つて吾々は猫の尻尾の行動について一批評一する資格を持ち合はせない。

科學の研究に體驗をもたない云はゞ唯の「科學學者」の科學論には往々人間の書いた「猫の尻尾論」のやうなのがあるのも誠に止むを得ない次第であらう。

無 題 (百十一)

昭和九年十月十四日、風邪を引いて二階で寝てゐた。障子の硝子越しに見える秋晴の空を蜻蛉の群が引切りなしに大體南から北の方向に飛んで行く。よく見ると殆ど皆二匹づゝタンデム式につながつたもので、孤獨な飛行者は極めて稀である。恐らく二十分位の間の群飛がつゞいたので、數にしたら恐らく莫大なものであらうと思はれた。一寸見積つても數千といふ數であらうと思はれる。

此の群は何處の池沼で發生して、さうして何處を目ざして移住するのか。目的地の方向を何で探知するか。渡り鳥の場合にでも解釋のつきにくい此等の問題はこの一層智能の低い昆蟲の場合には一層分かりにくさうである。

二匹づゝつながつてゐるのが、それ／＼雌雄の一とつがひだとすると、彼等の婿選み嫁選みが

如何にして行はれるか。雌雄の数が同一でない場合に配偶者を求めそこねた落伍者の運命はどうなるか。

かうした問題が徹底的に解かれる迄は人間の社會學にも未だどんな大穴が残され忘れられてゐるかも知れないであらう。

無 題 (百十二)

省線電車澁谷驛の人気者であつた「忠犬」の八公が死んだ。生前から驛前に建立されてゐたこの犬の銅像は手向の花環に埋もれてゐた。

たかが犬一匹にこのお祭騒ぎはにが／＼しい事だと云つてむきになつて腹を立てる人もあつた。併し、これがにが／＼しければ凡ての「宗教」はやはりにが／＼しく腹立たしいものでなければならぬ。

或日上野の科學博物館裏を通つたら、隣の帝國學士院の裏庭で大きな白犬の寫眞を撮つてゐた。犬がちつとも動かないでいつ迄もじつとして大人しくカメラの方を見詰めてゐる、と思つたら、傍に立つてゐた人がひよいとその胴をかゝへて持ち上げ、二三歩前の方へ位置を變へたのでそれが剝製だと分かつた。寫眞師の傍に中年の婦人が一人立つてゐた。片手を頬にあてたまゝじつと

犬の方を見てゐた。

翌朝新聞を見るとこの犬の寫眞が出てゐた。矢張それが八公であつたのである。

この剝製の寫眞を撮つてゐる光景を見たときには矢張自分の胸の中に仕まひ忘れてあつた「宗教」が一寸顔を出した。(昭和十年六月十二日)

無 題 (百十三)

親が付けてくれた名が氣に入らなくなつて改名する人がある。姓名判断といふ迷信的な俗説を信じて改名するのは又別であるが、さうでなくて改名する人には自ら共通な性質があるやうな氣がする。敢て弱點といふ程ではないが兎に角若干の人の好きがあるやうな氣がする。

自分の知つた人で非常に珍らしい姓があつた。おまけに名迄變つてゐるのであつたが、その人は快活で無頓着な性質で自分の姓名の變なことなど意に介しないやうに見えた。ところが其人の子供が小學校へはいる頃になつて重大な問題がその名字にからんで起こつて來た、と云ふのは、その子が學校でみんなにその名前をからかはれ笑はれるのをひどく氣にして學校がいやになり氣持が段々ひがんで來た。さうして、その爲だかどうだか、そこ迄は誰にも分らないが、兎に角間もなく病死してしまつた。その後その子の父は郷里へ歸つて家系に關する徹底的の調査をして、

何かしら適當の理由らしいものを搜出し、それを申立て、やつとの事で革姓の手續を済ますことが出来た。

これで思出すのは、昔紅葉山人の書いた何かの小品の中に、物好きな父親がその女の子におさるといふ名をつけた話があつたやうに思ふ。妙齡になつてしかも人並優れて美しい娘を父親が人前でおさる／＼と呼び立てた、といふのである。その結果がどうなつたかは忘れてしまつた。

電車の運轉手や車掌には實際變つた姓名が多いやうである。併し、これが、異つた姓名の人は車掌や運轉手になる確率が多いといふ證據にはならない。例へば一方には車掌運轉手の名簿、一方には帝國大學生の名簿を置いて比較統計を取つて見なければならぬ。併しさうなると「變つた姓」と「變つてゐない姓」とを分類する標準が非常に六かしくなつて一寸手が付けにくい仕事になるであらうと思はれる。

併し、變つた姓は仕方がないとして、斷然變つた名の持主百人と、常識的にちつとも變つてゐないと判断される名の持主百人とを選び出して、その當人は問題とせず、それ等の人々の父親について、その社會的地位階級、教育の程度、趣味の品別等について統計して見たら、或は多少の差別が認められはしないかといふ氣がする。

もし多少でもさうであつたとしたら、父の差別が子の差別に多少でも反映してゐないとも限らないと考へられるのである。

木　蓮

白木蓮は花が咲いてしまつてから葉が出る。その若葉の出はじめには實に鮮かに明るい淺綠色をしてゐて、それが合掌したやうな形で中天に向つて延びて行く。丁度緑の焰をあげて燃ゆる小蠟燭を點しつらねたやうにも見える。

紫木蓮は若葉の賑かなイルミネーションの中から派手な花を咲かせる。濃い暗い稍冷たい紫の苔が破れ開いて、中からほんのり暖かい薄紫の陽炎が燃え出る。さうして花の散り終るまでにはもう大きな葉が一杯に密集してしまふ。

櫻でも染井吉野のやうに花が咲いてしまつてから葉の出るやうな種類が開花の魁をして、牡丹櫻のやうな葉と一緒に花をもつやうなのが、少しおくれ咲くところを見ると、これには何か共通な植物生理的な理由があるらしい。

人間でもなんだか、これに似た二種類があるやうな気がするが、何が「花」で何が「葉」だかが自分にはまだはつきり分らない。

學 會

色々の學會にはいつて居る。すゝんで入會したのもあり、何時の間にか入れられてゐたのもあり、又強ひてはいらされたものもある。數にしたら二十近い會の會員になつてゐる。

學會にはそれ／＼例會や總會がある。それに一々出席してゐたらきりがなから大抵出ないことにしてゐる。

どうも日本人は色々な會をこしらへることの好きな國民ではないかといふ氣がする。

琴

學生時代には本郷邊の屋敷町を歩いてゐるとあちらこちらの垣根の中や植込の奥から琴の音がもれ聞こえて、文金高島田でなくば桃割れ銀杏返しの美人を想像させたものであるが、昨今さういふ山の手の住宅區域を歩いて見ても琴の音を聞くことは殆ど皆無と云つてもいい位である。その代りにピアノの音のする家が多くなつたが弾いてゐる曲は大抵初歩の練習曲ばかりである。眞黒な腕と足を露出したおかつばのお嬢さんでない弾手を聯想するのは骨が折れるやうである。

たまにいい琴の音がすると思つてよく聞くとそれはラヂオである。

漫 畫

新聞の日曜附録の一頁に大掃除を題材にした漫畫が色々出てゐる中に岡本一平氏がある。おかつば洋装の孫娘がお祖母さんとバタ入れとにほこりがかゝらないやうにと大きな鶏籠のやうなものをつつぽりかぶせて置いたのをお母さんが見付けて驚いて籠を引き起こしてゐる圖である。おばあさんは大人しくバタ入れと一緒に小さくなつて籠の下に収まつて何かむしや／＼食べてゐる。孫娘の方は平氣にほがらかにあちらを向いてはたきを揮つてゐるのである。

外にも數々の漫畫があるが、どうもたゞ表面だけ巫山戯てゐて中味の何もないのが多いやうである。一平氏には、多くの場合にさうであるやうに、可笑味の底に人情味が流れてゐて嚙みしめるとあはれがにじみ出す。此漫畫なども、現代の家庭に於ける老祖母と主婦と孫娘との三角關係を心理的に描寫し盡くして餘ます所がないやうな氣がする。その眞實性の中から可笑味も美し

さもあはれも生れてくるのであらう。

たゞ一枚の漫畫でもかういふのを朝食時に見ると、その日一日位は自分の心情の上に何かしら
好い効果を残すやうに思はれる。

笑ひ聲

初夏の或日友人と京橋近くの七階樓上で晝飯を食つた。清々しい好晴の日で食卓から見下ろす銀座方面の眺めははれ／＼と明るくいき／＼と美しいものであつた。一隅の別室から賑かな爆笑が間歇的に聞こえて来る。その笑聲から判断すると、どうしても女學校の生徒の集會らしい。食卓を圍む制服を着たおさげやおかつばの一團を想像させた。

席を立つて歸りがけに開け放したその別室を覗いて見ると、意外にもそれは「制服の處女」達ではなくて、みんなもう三十前後の立派な奥さん達の集會であつた。

奥さん達の笑ひ方と女學生の笑ひ方とはたしかに區別がある筈である。それなのに別室で聞いた笑聲はどうしても十五、六、七、八の女生徒の集團にのみ聞かれる笑聲であつた。

矢張何處かの女學校の第何回卒業同窓會であらうと思はれた。同窓の顔が寄合つた機會に彼女

達の十餘年昔の笑ひが復活したのではないかと思はれて、何となく微笑ましい氣持のしたのはあながち青葉時の好晴の天氣のせゐでもなかつたやうである。

講演の口調

ラヂオなどで聞くえらい官吏などの講演の口調は一般に妙に親しみのない鹿爪らしい切口上が多くてその内容も一應は立派であるがどうも聴衆の胸にいきなり飛込んで来るやうなものが少ない。

或會議の席上で或長官が或報告をするのを聞いてゐたとき、ふと前述の講演のタイプを想ひ出した。

長官はその屬僚の調べ上げてこしらへた報告書を自分のものにして報告しなければならぬ。それで文句は分かつてもその内容は實はあんまり身に沁みて居ないらしいので、それであゝいふ口調と態度とが自然に生れるのではないかといふ氣がした。

これに反して、文士でも藝術家乃至藝人でも何か一つ腹に覺えのある人の講演には訥辯雄辯の

別なしに聞いてゐて何かしら親しみを感じ、底の方に何かしら生きて動いてゐるものを感じるから妙なものである。

學者の講演でもやつぱり同じやうなことがあるやうである。
空腹は中々隠せないものらしい。

不審紙

子供の時分に漢籍など讀むとき、よく意味の分らない箇所にしるしを付けておく爲に「不審紙」と云ふものを貼り付けて、後で先生に聞いたり字引で調べたりするときの葉とした。

短冊形に切つた朱唐紙の小片の一端から前齒で約數平方耗位の面積の細片を嚙切り、それを舌の尖端に載つけたのを、右の拇指の爪の上端に近い部分に移し取つて置いて、今度はその爪を書物の頁の上に押しつけ、丁度蚤を潰すやうな工合にこの微細な朱唐紙の切片を紙面に貼付ける。

この小紙片が即ち不審紙である。不審の箇所をマークする紙片の意味である。嚙切る時に赤い紙の表を上にして嚙切り、それをそのまゝ舌に移し次に爪に移して貼付けると丁度赤い表が本の頁で上に向くのである。朱唐紙は色が裏へ抜けてゐなかつたから裏は赤くなかつたのである。

其頃でも既に粗製の嘘の朱唐紙があつて、さういふのは色素が唾液で溶かされて書物の紙を汚

すので、子供心にも誤魔化しの不正商品に對して小さな憤懣を感じるといふことの入用をした譯である。

不審が氷解すれば其處の不審紙を爪のさきで軽く引搔いて剝がしてしまふ。本物の朱唐紙だとちつとも痕が残らない。

中學時代にはもう不審紙などは使はなかつた。その代りに鉛筆や紫鉛筆で矢鱈にアングーラインをしたり、?や!を書き並べて、書物を汚なくするのが自慢であるかのやうな新習俗に追蹤して随分勉強して多くの書物を汚損したことであつた。

それは兎に角、日本紙に大きな文字を木版刷にした書物の頁に、點々と眞紅の不審紙を貼付けたものゝ視像を今でもあり／＼と想出すことが出来るが、その追憶の幻像を透して、實に色々な舊日本の思想や文化の萬華鏡が覗かれるやうな氣がするのである。

學 會 警 察

英國の物理學者Dと瓊國の物理學者Bとが日本へ遊びに来て大學や理化學研究所で講演をしたがいづれも滿員以上の盛況だつたさうである。

Dは數年前にも一度來朝したが、その後ノーベル賞をもらつて世界第一流の學者としての折紙をつけられた。Bはこれに比べれば今の處第二流の仲間である。それが偶然にDと一緒に日本へ來たので、同時に肩を並べて歩き、同じ演壇で講演をした。B一人で來たら講演會が催されたかどうかといふやうなことが學界ゴシップの話題になつた。

Dを大學の某研究所に案内して色々な業績を見せた。前に來たときは可なり色々な事に興味を示したさうであるが、今度は一向に素氣なくて何を見せても冷淡な態度しか見せなかつた、兎に角さういふ風にその研究所の人達には感ぜられたさうである。

以上の事實は色々な意味で記録しておく價值があると思はれる。

ずつと前にアインシュタインが來朝したときのことを色々思出す中に一つ餘り從來記録されてゐないと思ふ極めて興味ある現象がある。

アインシュタインが大學内を歩いて居るときにはいつでも、その後に學界の長老達が影のやうに附添つて歩いてゐた。集會の席でも護衛兵のやうに引添つて立つたり坐つたりしてゐた。珍客を遇する禮として當然のことと思はれた。自分等のやうな弱輩のものがこの碩學に近づいて何か話してもしようと思ふと、その護衛の方々の中には急に眼を見張り或は肩を攀めてその近よるものが何を云ひ出すかと云つたやうな緊張と不安の表情を正直に露出する人もあつた。それで大抵の氣の弱いものは近寄りたくても近寄れないで遠方から眺めるだけであつた。なる程弱輩なものが突拍子もないまづい質問をしたりしては失禮にもなるし又日本の學界の恥辱になるといふ心配もあることであらうと思はれたことであつた。

それから後は、もう西洋から有名な學者が來ても餘り近よらないことにした。第一言語が不隨意で思つたことの三分一も云へず先方のいふこともどれだけ分つたか分らないかさへ分らないからわざ／＼危険を冒して近よることもないと思つたのである。唯遠方からその風采や態度を眺め

ることの興味で満足してゐた。

それでも、どうかすると自分の研究室へ外來の學者を案内して來られることがある。その案内者が親しい同僚だけであれば何でもないが、併しその中に學界の監察官のやうな方が一人でも居て來客の肩の後に嚴肅な顔をしてゐられると自分の口は自然に膠着してしまつて物が云へなくなる。

かうした監察官も日本の名譽の爲に必要なかもしれない。

兎に角以上の事實は記録に値する。これは自分だけの體驗した事實ではなくて可なり多數の同學者が多少ちがつた程度と形式とで體驗した事實だからである。(昭和十年六月)

死刑囚

友人の生理學者が見せてくれた組織學ヒストロギの教科書の中に色々な人體の部分の顯微鏡寫眞が澤山掲載されてゐる。その圖の下にある説明を讀んで行くと「或る若き死刑囚の○○○と云つたやうなのが可也多數にある。

虎や豹は死してその毛皮を留める。さうして人間の生活になにがしかの貢獻をすると同時に白己が嘗て此世に生存してゐたといふ實證を残す。

此世に活かしておけないといふ理由で處刑された人間の身體の一局部の極めて微細な顯微鏡標本は生理學や醫學の教科書に採録されて世界の學徒を教育する。

下らない人間や、或は極めていけない人間の書いたものでも後世を益することはある。假令それがどんな嘘でも詐りでも、それでも矢張人間の嘘や詐りの「組織」を研究するものゝ研究資料

としての標本になり得る。但しそれが「詐らざる嘘」「腹から出たうそ」でないと困るかも知れな

50

とは云ふものゝ、「佯りの嘘」でも結局それが本當に生きてゐた人間の所産である限り、やはりそれはそれとしての標本として役立つかも知れない。

全く役に立たない人間になる、といふこと程六かしい事はないかも知れない。

(昭和十年七月三日)

ノルマンディー

今度フランスで造つた世界一の巨船ノルマンディーに關する記事が澤山の美しい挿畫や通俗的な圖解で飾られてリリュストラシオンに載せられてゐる。七萬九千噸十六萬馬力、船の全長三百十三米。食堂、社交室、喫煙室の壯大は勿論、劇場、教會堂、水泳プールから保安警察のやうなものまで具備してゐる。全く掛値なしに海上のビルディングである。

數週前の同じ雜誌には大西洋横斷旅客飛行機リュートナン・ドウ・ヴェーソー・パリ號のことが出てゐた。重量三七トン、動力五千三百馬力で、三四トンの荷物を積み、毎時一七五浬乃至二二〇浬の速度で大西洋を無着陸で飛ばうといふのである。

フランスに現在「世界一熱病」の流行してゐることが窺はれる。

日本もいろ／＼な精神的なことでは世界一を自信してゐるやうであるが、科學とその應用方面

でどれだけの自信があるか疑はしい。多くの方面では寧ろ反對に一生懸命「世界一」になることを忌避してゐるのではないかと思はれるふしがある。日本人の出した獨創的な破天荒なイデーは國內では爆發物以上に危険視される。併し同じ考が西洋人によつて實現され成效するのを見ると、はじめてやつと安心して、そろ／＼その成果の摸倣をはじめ。「外國のに劣らぬものが出來た」といふのが最高の誇である。併しそれが出來た頃には外國ではもう次の世界一が半分出來かゝつてゐる。(昭和十年七月十三日)

無 題 (百十四)

腰の屈伸の不自由な病氣にかゝつた。寝てゐるか、立つてゐるのはいゝが坐つたり腰かけたりにしてゐるのがどうも工合が悪い。特に腰を低く下ろすやうな椅子がいけない。

珍らしい秋晴の日に縁側へ出て庭を眺めながら物を考へたりするのに工合のいゝやうな腰の高い椅子があるといゝと思ふ。併し近頃は昔あつたやうな高い籐椅子はもうめつたに見當らない。みんな安樂椅子のやうな扁平なのばかりである。

これは矢張「流行」の現象であらうと思はれる。併し扁平な低い椅子が流行るといふ現象には何かしらその背後にある時代的な心理の反映が見られる。

無 題 (百十五)

左の足が痛むのでびつこを曳いて歩いてゐたら、その効果で今度は腹と腰とのつがひ目の處の筋肉が痛んで立つたり坐つたりする度にそれが飛上がる程痛むのであつた。立つてゐるか寝てゐれば何の事はない。併し一寸でも咳をするとそれがひどく痛み所にひどく。

色々な動作でちつともそこにひどくかぬ動作とひどく動作がある。それでこの特別な筋が平生如何なる動作に如何なる程度に動員されてゐるかといふことが實によく分つた。健康な場合には到底分らないことである。物の效用は、それが失はれて見て始めてよく分るといふ一例である。

坐つたり腰かけたりして、物を書かうとすると矢張この筋肉が引釣つて痛む。

物を書くのには頭と眼と手だけでいゝと思つてゐたのは誤であつた。書くといふ仕事にはやつぱり「腹」や「腰」も入用なのである。意外な「發見」であつた。

無
題 (百十六)

からだの自由に動かせない病気で十日も寝てゐると無闇に痲癢が起こつて面白い。今朝は呼鈴のコードを手近に置くべきのを誰かゞ遠くに押しつけてあつたので大聲でオーイ／＼と呼んだが階下にゐる五人の誰にも聞こえない。臥床の脇に置いてあるステッキでやけに障子や敷居をたゝいて呼んでも未だ聞こえない。障子と敷居をいゝ加減疵だらけにした頃に、細君が上がつて來た。「お隣りに大工さんが來て仕事してゐるのだと思つた一さうである。

子供の時分に親戚や知人の家に中氣で身體の不隨な老人がゐて、よく痲癢をおこしてゐるのを見た。家族はもうすっかり馴れつ子になつて程よくあしらつてゐるだけである。それが又一層老人の不滿をつのらせるらしかつた。

今度の病氣で昔の中風老人達を想出して、この天下に普遍的な家庭小悲喜劇の心理分析を試みる

機會を得た。

亡友K君が眼病で手術をして一時失明したことがあつた。癩癩が起こりはしないかと聞いたら、それどころか反對に一生懸命細君にもその他の家族にも從順にして機嫌を損ねないやうにしてゐるといふ。どうしてかと聞くと、もしや今家族に見放されたら大變だといふ氣がして、自然にさうなるのだといふことであつた。

自分の場合の癩癩は結局、病氣が大した事でないといふ潜在的な自覺から、いくらやんちやを云つても家族が大丈夫遁げ出さないといふ自負心を獲得してゐるせゐかも知れない。

無

題

(百十七)

明治時代の青年に於ける「星」すみれの流行と近代ボーイに於けるマルキシズムのそれとはその原動力となる情熱の感傷的な點では殆ど大差ないものゝやうな氣がする。唯理論で裏付けられたヒステリック感傷は治療が一層面倒なやうである。

無 題 (百十八)

伊太利とエチオピアとの葛藤が永引いて、殆ど毎日のやうにムツソリニの顔が新聞に出る。毎日見てゐるとその顔が段々にナポレオンの顔に似てくる。實際何處かよく似てゐるのである。

伊軍の飛行機を輸送船に積込むといふので翼を取外した機體を埠頭に並べてある光景の寫眞が新聞に出てゐた。その機體の形が蝗そつくりである。見れば見る程よく似てくる。

默示録のいなごが現世に現はれたのである。

形の似たものには矢張性能にも何處か似た處があるやうである。

無 題 (百十九)

エチオピア事件で殆ど毎日毎夕の新聞に伊國首相や、エ國皇帝、それから國際聯盟の英佛代表イーデン、ラヴールの肖像が出る。

日本の内閣に何か重大な事件でもあると岡田首相や陸相海相の顔が毎日のやうに新聞の紙面の相當な面積を占めて出現する。

一寸吾々には了解の出來にくい現象である。新聞の讀者といふものは恐ろしく健忘性なものであると假定するか、或は又新聞購讀者の大多數は、ほんの氣紛れに、十日に一度二十日に一度位その日の新聞を買つて見るだけである、といふことでも前提に置いて考へて見なければ全く譯の分らない「煩雜」であり「浪費」である。

尤もかうしないと「其日々々主義」とも譯されるジャーナリズムの「氣分」が出ないのかも知れない。

無 題 (百二十)

秋晴の午後二階の病床で讀書してゐたら、突然北側の中敷窓から何か、飛込んで来て、何かにぶつかつてはたりと落ちる音がした。郵便物でも外から投げ込んだやうな音であつたが、二階の窓に下から郵便をはふり込む人もない譯だから小鳥でも飛込んだかしらと思つたが、からだの痛みで起き上がるのが困難だから確かめもせず、にやがて忘れてしまつてゐた。暫くしてから娘が二階へ上つて来て「オヤ、これどうしたの」と云ひながら縁側から拾上げて持つて來たのを見ると一羽の鶯の死骸である。可愛い小さな身體を筒形に強直させて死んでゐる。北窓から飛込んで南側の庭へ抜けるつもりで硝子障子に嘴を突當て、脳震盪を起こして即死したのである。「まだ暖かいわ」と云ひながら愛撫してゐたがどうにもならなかつた。

鳥の先祖の時代には硝子といふものはこの世界になかつた。硝子戸といふものが出來てから今

日迄の年月は鳥に「硝子教育」を施すには餘りに短かゝつた。

人間の行路にも矢張この「硝子戸」のやうなものがある。失敗する人はみんな眼の前の「硝子」を見損つて鼻柱を折る人である。

三原山火口へ投身する人の大部分がさうである。又ナポレオンもウイルヘルム第二世もさうであつた。

この「硝子」の見えない人達の獨裁下に踊る國家はあぶなくて見てゐられない。

無 題 (百二十一)

隣家に犬が居る。戸外へは出さないらしいので姿は一度も見ることがない。夜中に吠えて居る聲から判断すると相當體軀の大きな堂々たる犬らしい。ところが、この犬が時々不思議な鳴き方をする。人間が何か泣きごとでもいつて居るかと思ふやうな聲を出すかと思ふと、首でも締め殺されかゝつてゐるのかと思ふやうな悲鳴を上げる。さうかと思ふと癩癩が起つてくやしがつてきゆうくゝいつて居るやうな奇妙な聲を出す。段々氣を付けてみるとさういふ不思議な鳴き方をするのは、殆どきまつて豆腐屋の喇叭が遠くから聞えて段々近よつて來るときか、又は多分豆腐屋であらうかチリン／＼と鈴を鳴らしながら前を通るときであるらしい。どういふ譯か知らないが、その喇叭や鈴の音を聞くと、堪へがたい恐怖か憤懣がこの犬の腦神經中樞をいらだゝせるものと思はれる。

生理學の方で「條件反射」といふ現象がある。この犬の場合は或はその一例かも知れない。まだ小さい時分に何かしら同じやうな音響のする場所で度々ひどい目に遇つた經驗の記憶が、この動物の脳髓に焼付けられたやうに印象されて居るのかも分らない。

それとも又、この犬は何か耳の病氣があつて、或る一定の高さの音がとくに鋭く病的にその聽覺を刺戟するのかもしれない。これはたゞ犬の話であるが、我々人間でもよく考へてみるとこれとよく似た現象がいくらかでもあるらしい。そこらの花盛りを見て心が浮立つたり、秋の月を見て物を思はされたりするのもその一例であるが、これらは國民全體に共通な教育による「條件反射」のやうなものである。併しもつと特殊な例としては、芋蟲を見ると體がすくんでしまふ人や、蜘蛛が這出すと顔色を變へるやうなものもある。中學時代の同窓で少し強い風の吹く日には怖くて一歩も外へ出られないのがあつたが、その男は間もなく病死してしまつた。矢張どこか「弱い」ところがあつたのかも知れない。(昭和十年十月十日)

無 題 (百二十二)

友人の科學者で陶器を作るのを道樂にしてゐる男がある。自分の邸内に窯を造つて専門の職人を雇込んで本式にやつてゐる。御當人は勿論であるが、その細君も又お母さんもそれ／＼熱心なアマチュア藝術家である。この間その友人が大きな風呂敷包を抱へて飛込んで來た。新聞紙で包んだものを取り出すのを見ると、この家庭藝術家三人の作品の多分代表的なものであらう、分厚で長方形のシガレットケース——これは科學者の作、それから半月形の灰皿——これは美しい令夫人の作、それから手どくで白釉に碧緑の色を流した花瓶——これは母堂の作である。

今病床の脇の小卓の上にこの三つの陶器がのせてあるのをつく／＼眺めて居ると、この三つの作品のそれ／＼の個性が段々にはつきり眼についてくる。角箱には鼻つ張りの強い負け嫌ひの氣性とオリヂナルで鋭いしかもデリケートな才能の動きが地味な褐色の釉藥の底から浮出して居る

といつたやうなところがある。

灰皿の方は肉の薄味、線の丸さ、波形の縁へりのうねり、その他どう見ても優しいさうして濃やかな感じの持主の手になつたものとしが思はれない。

花瓶の方をよく見て居ると手づくねの筒形の胴の表面の彎曲、釉薬の自然な斑模様、さういつたものゝ極めて複雑な變化の中に、如何にも世の中の苦勞といふ苦勞を舐め盡して來たかのやうな、しかも如何にも女らしい一種の心ばえのやうなものがあり／＼と讀みとられるやうである。

これではうっかり團子も丸められない。(昭和十年十月十日)

無

題

(百二十三)

辻待の圓タク、たとへば曙町迄五十錢で行かないかといふと、返事をしないでいきなりそつぽを向いてしまふのがある。いやな顔をして極めてゆつくりかぶりを振るのもある。それから又ここにこと愛嬌笑ひをしてもう十錢やつて下さいといひながらドアに手をかけてインヴァイトするのがある。

前者はペシミストであり、後者はオプチミストであるともいはれる。しかし又全くその反対だともいはれる。

いつか上野驛の向ひ側の或る路地の自動車停留場で、一番先頭の車の運転手に例の通り曙町まで五十錢で行かないかといつたら、餘り人相のよくないその男は「イカネエ」と強い意味をその横にひん曲げた口許に表示したかと思ふと、いきなりエンヂンをスタートして走り出した。さう

して獲物を狙ふ鷹のやうな鋭い目を集注して居るその視線の行手を追跡してみると、すぐにその焦點がはつきりされた。今上野驛から出て來たらしい東北出と思はれる母娘おやこ連れが銘々に大きな風呂敷包を抱へて、今や車道を横切らうとしてあたりを見廻して居るところであつた。

この場合は悲劇的であるかもしれないが、又ひどく喜劇的であるかもしれない。そんな事を考へながらスーツケースを右手にぶらさげてぶら／＼と山下の方へより多く合理的な運轉手を物色しながら歩いて行つた事であつた。(昭和十年十月十日)

無 題 (百二十四)

隣に栗の樹が一本ある。二十年前にこゝへ移つて來た頃には、まだいくらも隣の家の棟を越えないくらゐの高さであつた。それが年々に眼に見えるやうに伸び茂つて、夏はこんもりした木蔭を作り、一杯に咲いた花がこちらの庭に散りこぼれ、やがて腐れて甘すつばいやうな香ひを漲らせた。秋が來ると筈みこぼれた栗の實がこちらの庭へも落ちるのを、當時まだ小さかつた子供等が喜んで拾ひながら大聲で騒いで居たら、やがてお隣からお盆にのせて澤山な栗の實を持たせてよこした。家内中は顔を見合せてきまりの悪い思ひをしたことであつた。

この栗の樹が近年になつてなんとなく老衰の兆を見せてきた。夏の繁りも何となくまばらで、栗の實の落ちる數も眼立つて少くなつて來た。

次第に悪くなる東京の空氣のせゐであるのか、それともこの樹の本來の壽命に依るものか、ど

うだか自分には分らない。

とにかく栗の樹などいふものは人間よりは長生きするものとばかり思つて居たが、一概にさうでもなささうである。(昭和十年十月十一日)

無 題 (百二十五)

住家を新築したら細君が死んだといふ例が自分の知つて居る狭い範圍でも三つはある。立派な邸宅を新築して間もなく主人が死んでその家の始末に困つて居るといふ例を近頃二つ聞いた。

併し家を立て、誰も死ななかつた例は相當澤山にあるであらうから、嚴密な統計的研究をした上でなければ「家を建てる人と人が死ぬ」と云ふやうな漠然とした言明は全然無意味である。

併し又考へてみると、家を建てる人と人が死ぬと云ふことも、解釋のしやうによつては全然無意味だともいはれない。

今迄借家住居をして居た人が、自分の住宅を新築でもしようといふことは、その家庭の物質的のみならず精神的生活の眼立つた時期を劃する一つの目標である。今迄は生活の不如意に堪へながら側目もふらずに努力の一路を進んで來たのが、いくらかの成效に恵まれて少し心が弛んでく

る。さういふ時期にこの住宅の新築といふ出来事が起るといふ場合が屢々ある。さういふ時に若しもその家の主婦が元來弱い人であり、どのみちさう長生きをすることのできない人であつたと假定する。さうするとその主婦の今迄張詰めて居た心がやつと弛む頃には、その健康は最早臨界點近く迄蝕まれて居て、氣の弛むと同時に一時に發した疲れの爲に朽木のやうに倒れる。さういふ場合もかなりあり得る譯である。

又從來既に一通りの成效の道を進んで來た人が、いよ／＼隱退でもして老後を楽しむ爲に新しい邸宅でも構へようといふやうな場合にも、矢張同じやうな事がいはれようかと思ふ。

植物が花を咲かせ實を結ぶ時はやがて枯死する時である。それとこれとは少し譯は違ふがどこか似た所もないではない。

いつまでも花を咲かせないで適當に貧乏しながら適當に働く。平凡なやうであるが長生きの道は矢張これ以外にはないやうである。(昭和十年十月十一日)

無 題 (百二十六)

夜中に身體中の痛む病氣に罹つて一晩中安眠ができない。この廣い世界のすべての存在が消えてしまつて自分の身體の痛みだけが宇宙を占有し大千世界に瀰漫して居るやうな氣がして居る。

夜が明けて繰りあけられた雨戸から空の光が流込む。硝子障子越しに庭の楓や檜の梢が見え、隣の大きな栗の樹の散残つた葉が朝風にゆれて居て、その向ふ一杯に秋晴の空が廣がつて居る。

さういふ時にどうした譯か分らないが、別に悲しくもなんともないのに涙が眼の中に一杯に押出してくる。

學生時代に、阿片喫煙者が中毒からくる恐ろしい悪夢の爲に悩まされて居たのが、突然その夢が醒めて現實にかへつて、片方に居る人間の顔を見た時に、涙が止め度もなく流れたといふくだりを讀んだ記憶がある。

悲しいときの涙、嬉しいときの涙、その他いろ／＼な涙の外にかうしたやうな不思議な涙がまだ外にもいろ／＼ありさうな氣がする。(昭和十年十月十一日)

無 題 (百二十七)

銀座のオリムピックで食事をして居たら、同じ食卓の向ひ側に腰を掛けて何か食つて居た中年の男が新たにパンを注文した。柔かい六角のパンを持つて来た女給に「これでない堅いやつを持つて来い」といつて、手まねでその形をして見せた。「フレンチロールですかコッペーですか。」
「あゝ、そのコッペーだ。」「焼いて持つて参りませうか。」「いや焼かないで持つて来い。」やがてそのコッペーを皿に入れて持つて来たら「あゝ、やつぱり焼いて持つて来てくれ」といつてその皿をつきだした。

かうした型の男は恐らく何でもまめによく仕事をし又世話のできる人であらう。おそらく嫁や養子の世話から相手の人のネクタイの世話までやく人かも知れない。併し、「俳諧」の方にはどうも不向きらしい。(昭和十年十月十四日)

無

題

(百二十八)

或る若い男の話である、青函連絡船のデッキの上で、飛びかはず海猫の群を見て居たら、その内の一羽が空中を飛行しながら片方の足でちよいくと頭の耳の邊を搔いて居たといふのである。どうも信じられない話だがといつてみたが、兎に角搔いて居たのだから仕方がないといふ。

この話をその後いろくの人に話してみたが、大概の人はこれを聞いて快い微笑を洩らすやうである。

なぜだか分らない。(昭和十年十月十四日)

無 題 (百二十九)

人體生理學や組織學の教科書の中に載せてある色々な顯微鏡寫眞の標本には、屢々死刑囚の身體のいろ／＼な部分から取つたものがある。

この點だけから見ると、一生何一つ世間の爲に貢獻することなしに終る紳士淑女達よりも、かういふ死刑囚の方がはるかに大きな功績を世界人類の知識の上に遺したことになるともいはれるのである。(昭和十年十月十四日)

無 題 (百三十)

大きな百貨店へ行けば大概の品は何時でも調へられるものと思つて居たが、實際は中々さうでないといふ事を経験してきた。むしろ望み通りの品のあつたためしは少いくらゐである。

十月の初旬病床で暖い日に蒲團の代りかけようと思つて旅行用の夏の膝掛を買ひにやつた。さうしたら、來年の夏まで待たなければ店には出ないといつた。それから、夜中に肩の冷えるのを防ぐ爲に鳥の羽根入の肩蒲團を探しにやつたら、もう一月くらゐすれば出ますといつたさうである。時候に合はない品だから無理もないが、併し百貨店といふ所はやつぱり存外不便な所である。

尤も、今頃本屋でスコットの「湖上の美人」やアーヴィングの「スケッチブック」やニーチェの「ツアラーストラ」でも探すとしたらすぐに手に入るかどうか心もとないやうな氣がする。

マルクス、エンゲルスが同様な羽目になる時が何時かは来るかも知れないといふ氣もするのである。(昭和十年十月十四日)

無題 (百三十一)

或る日電車の中で、有機化學の本を讀んで居ると、突然「琉球泡盛酒」といふ文字が頭の中に現はれたが、讀んで居る本の頁をいくら探してもそんな文字は見つからなかつた。よく考へてみると、多分途中で電車の窓から外を眺めたときに何處かの店先の看板にでもさういふ文字が眼についた、それを不思議な錯覺で書物の中へ「投込んだ」ものらしい。丁度其時に讀んで居た所がいろいろなアルコールの種類を記述した頁であつた爲にさういふ心像の位置轉換が容易に出來たものと思はれる。

人間の頭腦のたよりなさはこの一例からでも大凡想像がつく。何時幾日に何處でかういふ事に出會つたとか、何といふ書物の中にどういふ事があつたとか、さういふ直接體驗の正直な證言の中に、現在の例と同じやうな過程で途方もないところから紛込んだ異物が少しも入つて居ないと

いふ断定は、神様でないかぎり誰にも出来さうにない。
(昭和十年十月十四日)

無 題 (百三十二)

ベルギー皇帝が唯一人で自動車を運轉して居て山の中の崖から墜落して崩御された。その慘ましい變事の記憶が未だ世人の記憶に新しいのに、今度は又新しい皇帝が皇后とスイツルの湖畔をドライブして居たとき、不慮の事故を起して、その爲に若く美しいアストリッド皇后陛下はその場で崩御され皇帝も負傷され、唯うしろの座席に乗つかつて居た運轉手だけが不思議にかすり傷一つ負はなかつた。

皇帝が前の座席の左側に坐つてハンドルを握り、皇后はその右側に坐つて一枚の地圖を擴げ何か皇帝にお尋ねになると、皇帝は右を向いてその地圖を覗込まれた、その瞬間に車の右の前輪が道の片側を仕切るコンクリートの低い土手の切れ目にひつかゝつた。そのはずみで土手を飛越えて道の右側の斜面に走込んだ車はその右の横腹を立樹にぶつつけて、ぐいと右に方向を轉じ、そ

の際に皇后は運悪く頭を立樹にぶつつけて即座に絶命すると同時に草原の上に投出された。車は更に進んで第二の立樹にその左の横腹をぶつつけて傷いた皇帝を投出した。さうしてする／＼と斜面を轉がりながら湖水の汀の葦の中へ飛込んではじめにその致命的な狂奔を停止した。うしろに坐つて居た運轉手は咄嗟の出来事に茫然としてどうすることも出来なかつた。道路をそれて樹にぶつかる迄の時間は一秒の十分の一にも足りない勘定になるので、まづたく考へるよりも速い出来事だつたに相違ない。さうして運轉手が眼前の出来事を意識した瞬間にはもうすべてが終つて居たわけである。

これが昔の日本であつたら、この二代續きの遭難はきつと何かしら尤らしい迷信で綴られた因縁話の種を作つたかも知れない。

併し因縁が全然無いこともない。それは先代の皇帝も今の皇帝も自分でハンドルを握つて墜落の危険の絶無ではないやうな道路を走らせることに興味を持たれたといふ事がたしかに一つの必然な因縁で繋がれて居るのである。即ち一つの公算的な因果の現はれだともいはれるであらう。

(昭和十年十月十五日)

無 題 (百三十三)

聯合艦隊が芝浦に集合して、晝は多勢の水兵が帝都の街頭に時ならぬユニフォームの花を咲かせ、夜は品川灣の空に光芒の劍の舞を舞はせた。

この日病床で寝て居たら澤山の飛行機が西の空から東へかけて丁度蜻蜓の群のやうに、しかも物凄い唸り聲を立て、飛んで行くのが縁側の障子の硝子越しに鮮かに見えた。

このページェントが非常時の東京市民に我が海軍の偉容を示して、心強さと頼もしさを吹込むといふ効果を持つたであらうといふ事には少しの疑ひはない。

併し物は考へやうである。私はこの百餘臺の飛行機の示威運動を病床から眺めながら、若しか我が聯合艦隊の航空兵器の主力がたつたこれだけのしかも餘り世界的に自慢の出来ない飛行機で代表されて居るのだとしたら、何といふ心細いことであらうといふ氣がした。さうして外國映畫

や繪入雜誌の挿繪で見る歐米列強の飛行隊の壯觀を思浮へ、一方では又我邦の海軍飛行機の餘りにも頻繁な墜落事故の記録を胸算用で算へながら、何となく暗い氣持に誘はれるのであつた。

これは恐らくその日の病苦のせゐであつたかも知れない。(昭和十年十月十五日)

無 題 (百三十四)

蝶や鳥の雄が非常に美しい色彩をして居るのは雌の視覚を喜ばせてその注意をひく爲だといふやうな説は事實に合はないものだといふことがいろ／＼の方面から説明されてゐるやうである。

自分の素人考ではこの現象は或はむしろ次のやうに解釋さるべきものではないかと思ふ。

周囲の環境と著しく違つた色彩はその動物の敵となる動物の注意をひき易く従つてさうした敵の襲撃を受け易い譯である。さういふ攻撃を受けた場合にその危険を免れる爲には感覺と運動の異常な鋭敏さを必要とするであらう。それで最も目立つ色彩をして居ながら無事に敵の襲撃を免れて生き遺ることの出来るやうな優秀な個體のみが自然淘汰の篩にかけられて選り残され、さうしてその特徴を段々に發達させて來たものではないか。

戦争好きで、戦争に強い民族などの發生にいくらかこれに似た選擇過程が關係して居るのでは

ないかといふ氣がする。(昭和十年十月十六日)

無 題 (百三十五)

先頃警視廳で東京市のギャング狩を行つたときに檢舉された一街の紳士一達の中に、杯やコッブを嘔み碎いて口唇から赤い血を出して相手を縮みあがらせるといふのが居た。この新聞記事を読んだとき私は子供の時分に見た一硝子を食ふ山男の見世物のことを思出した。

高知の本町に堀詰座といふ劇場があつた。そのの木戸口の内側に小さな蓆圍ひの小屋をこしらへて、その中に僅かな木戸錢で入込んだせいぐ十人かそこいらの見物の爲にこの超人的演技を見せて居た所謂山男といふのはまだ三十にもならないくらゐの小柄な楮ら顔の男であつたが、白木綿の鉢巻で眞黒に伸びた頭髮を箒のやうに縛り上げて、よれ／＼の縞の着物とたつつけ袴に草鞋がけといふ出立ちで、それに眞赤な木綿の扱帯しきのやうなもので纏がけをした、實に悲しくも滑稽にして颯爽たる風事は今でも記憶に新たである。

何でも蛇を齧つて見せたり、兎の毛皮の一片を食ひちぎつて見せたりした。それからおしまひには大きなランプのホヤの毀れたのを取り出して、どん／＼ぢやん／＼といふ物凄い囃子に合せてそれを見物の前に振廻して見せた後で、そのホヤの硝子の一片を前歯で嚙折りそれを唇の間に含んで前につき出し兩手を廣げて目をむき出し物凄いみえをきつた。かけらが唇からひつこんだと思つて急いで四股を踏むやうな大仰な身振をしなげらばり／＼とその硝子を嚙砕く音を立て始めた。緒ら顔が一層朱を注いだやうに赭くなつて、むき出した眼玉が今にも飛出すかと思はれた。

嚙砕く音が段々に弱く細くなつて行つた。やがて嚙砕いたものを吞下したと思ふと、大きな口をくわつと開いて見物席の右から左へと顔をふり向けながら、口中に最早何にも無いといふ證據を見せるのであつた。その時に山男の口中がほんたうに血のやうに眞赤であつたやうに記憶して居る。

この幼時に見た珍しい見世物の記憶が、それから三十餘年後に自分が胃潰瘍にかゝつて床に就いてゐたときに、ふいと忘却の闇から浮び上つて來た。

あの哀れな山男は、恐らくあれから一二年とはたゝない間に消化器の潰瘍にかゝつてみじめな最期を遂げたに違ひない。云はゞ、生きる爲に硝子を食つて自殺を遂げたやうなものである。

街の紳士の場合もいくらかこれと似たところがあるかも知れない。
(昭和十年十月十六日)

斷

片

午後の秋の日が斜に田圃を照して北の山の隅が柔かな陰色をして居る。刈田の鋤かれた後には、三番稻が淋しうそよいで居る。三軒家の西、稻畔の陰に一匹の黒牛が西日に向つて脇腹をこつちに向けて立つて居るのが見えるが、殆んど其處から生え抜いた様にじつとして居る。時として尾を振つて蠅でも追うて居る様であるが、今朝見た時にも同じ所に同じ様子で立つて居たので、自分は此黒牛がなんでも朝から今迄此處に立ちつゞけて居た様に思はれて、又其れがひどく自分の單調な今の境遇に似て居る様で、じつと見て居ると極めて平和なのびくとしたしかし何處かにうら悲しい様な感じが起つた。秋の日足は早や小高坂山を陰の中に包んで、何處かに鴉の鳴く聲が夕方の靜かな野に響いて居る。

かつてナシヨナル讀本の四を習つた時ジョンニーと云ふ怠惰な子供が夢に惡魔の處へ連れていかれて、其口癖の「アイムゴーイングツ」¹と云ふ詞を日々數百萬回永久に繰返すべく命令せられたと云ふ話を讀んだ事がある。其後いつか自分の夢に、自分は暗い穴の様な處へ入れられて其處にいつ迄もく永劫何もせずに籠つて居ねばならぬと或るものに命ぜられて如何に恐ろしく感じたか。夢が醒めて自分は限りある生命を與へられた人間であると云ふ事を思つた時如何にうれしかつたか。其後は此永久とか永劫とか云ふ言葉が何とも知れぬ恐ろしい感じを起させる。今もし自分にソロモンの榮華を與へられて其榮華の生活を幾千萬億年は愚か、永久に續ける様に、そして如何なる事があつても死ぬる事の出來ぬ様にせられたらばどうかと考へると一種不可思議な恐怖の念が徐々としかも動かす事の出來ぬ勢で、心の奥底から湧いて來るのである。此恐ろしさに比較すれば十字架上の刑戮の苦しみの様な短時間のしかも肉體的の苦痛は殆んど何でもない事であると思つたが、之れは永久が恐ろしかつたではない、單調と云ふ事が恐ろしかつたのだ。

子供の時には仙人になりたいと思つた事もあつたが、霧を吸ひ霞を食つて九千年生きた處がづ

まらない。

煎豆を嚙んで天下の英雄を罵倒するのは易いが、其煎豆を買ふべき數厘を正當な俯仰天地に恥ぢぬ様な手段によつて得る事は難い。

夢語一束

我時あつて賢時あつて愚なり。其賢なる時の我は最も愚而して其愚なる時の我更に愚なり。

無爲に苦しむ時筆を取り紙を展べて一大圓を畫す。萬象其中に在り亦飽く事なし。

夢中我幾度か死す、幾千億劫。覺めて鷄鳴を聞く。則ち創世の曉を憶ふ。

夢中人我を罵り我を殺す。さめて其人を惡む。是耶非耶。

夢中街上に彷徨する我の背後を見る。

其の前夜

明日はいよく出立よと云ふに今更心細き心地もせらる。晝は暇告げんとて訪ひ來る人々の應接繁はしきにしばしまぎれつるが夜となりてこそ思ひはまされ。集ひし人々も大方は去りつ、庭なる燈籠の一つ二つ消え残れるが打水したる青葉越しにほの見ゆるもあはれと見ゆ。蟲の音いと高きは夜も更けぬと覺ゆ、折々鳴き止むは何に驚きてや。雲の行きかひいと繁くて月の晴れ曇る事定め難し。竹縁の端に親しきどち打集ひてしめやかに談る名残は盡くべしとも覺えず。父母は今出立の事は何ものたまはず只四方山の物談りし玉ふ御心はさぞとこそ。明日の日和いかに、汽船の延びもやせんなど云ふは兄上なり。末なる甥のまだいといとけなきが臉重げなれど常にも

似ず猶眠らで姉なる君の膝の上に乳房弄びながら珍らしげに人々の顔見おこせたるあどなしや。
夜はいよゝ更け行くめり、蟲の音澄みまさる。明日は疾く起きぬべければ今宵は早くこそと云ふ
にいざとて竹縁を離るゝ時、月光さと雲間をもれて一聲過ぎ行くは郭公なるべし。

其の朝

我を送らんとて門邊に集ひし人々の顔おぼろげに見ゆる明方近き頃、さらば御無事にてとの一
聲を背に受けて車軋らし出づ。

見返れば門柳の朧なる朝霧の中に微になり行きて、我を見送れる人影の定かに其れとも別き難
し。昨日迄は楽しく面白く、うつし心もなく遊びし芝生の傍へも、幼き頃より常に釣垂れし小川
の小橋も我は只夢心地にいつしか過ぎて車高坂なる舊城の北を過ぐる頃ほひ、東の空やうく茜
さして起き出づる鳥の囀り賑かに成り行き、涼しき風のそよと面なづれば流石に心地すがくし
くなりぬ。

聲面白く荷積せし人足も次第に去り見送りの人々も大方は船を下りてデッキの人影稍まばらになり行き繁はしげに馳せめぐる船員の靴音のみ喧し。船首の方にけたましき物音は何ぞ。錨上ぐるなるべし。やがて汽笛一聲靜かなる海の面に響き渡れば指令室に鈴の音聞えて機關は運轉を始めぬと覺し。四方の景色動く様に覺えて、見送りの端艇に振り懸す手布忙はしく、鐵欄に倚りて見下す人々の顔淋しげなり。洲山も棧島も後になり種崎も過ぎて船は早や沖津しら浪の聲立て行く、九十九の灘に乗り出でぬよと思ふ時浪稍高くなりて動搖甚だしくなりぬ。

戀しき山々。なつかしき浦邊。あはれ今は定かに別き難くなれり。はてしも知らぬ青海原に日も早や暮れなんとす。夕陽斜に海面を照していづくともなく聞ゆる船歌哀れに悲しく、何に驚きて哉飛立つ鷗の二つ三つ夕霧の中に消え行くあり。

しばしは有耶無耶の境をたどる夏の夜の夢淡く、圓窓より吹き入る潮風肌寒きに心付きて起上れば、消え残る燈火船體の動搖につれてゆらめく光朧に、毛布にくるまりて、いびきの聲のみ高き乗客を照し出しぬ。窓より眺むれば月いと明き景色なるに獨り甲板に出づれば船は今や苦が島根を過ぐると覺しく、右舷なる黒き島影に燈臺の光きらめきぬ。隈なき月は鏡なす海面に水銀を

たゞへて、船首の水切る音澄みて聞ゆ。しばし鐵欄にもたれて我にもあらず佇めば夢見て夢の中を走せ行く様なる心地せらる。形は見えて哀れに優しくチ、と聲立てゝ行くは千鳥とや云ふものならむ、我ながら怪しき迄にうら悲しくなりて

月明し鳥影黒く千鳥なく

四

秋

鴻雁一聲刈田に音づれて吹く風や、肌寒うなりぬよと思ふ間に、山姫の錦いつしか龍田の峯に織り成されて尾花そよぐや萩の上葉におく露もろく女郎花色めでたき頃とはなりぬ。あはれ去年迄は哀れてふものゝ世にありとしもおもほえず故郷の花にあくがれ月に浮れて樂しき月日をのみ送りし身も、人は知らじな昨日今日流石に秋の哀れを覺え初めて、澄み渡る大空に我は顔なる月光青く風に誘はれてはらくと窓を敲く枯葉音繁き夕など我にもあらで袖しぼる事も度重りては、日に日に我心の沈み勝ちになりもて行くぞ佗しき事の限りなれや。

秋はいよゝ深くなりぬ、道の邊に枯残る千草の色あせて、明方の空に霜白うなりぬ。

枕邊の燈火消えなん計り、心焦れて思ひ寢の夕。しばしはうれしき故里の夢、結びもあへで驚
きさむる夜半の床寒く、窓の下なる叢には、今宵限りの命とやすだく蟲の音いと悲し。身も世も
あられず故里人の戀しきに

きりぐす鳴くや霜夜の床寒み心きえ／＼家をしぞ思ふ

五

日も金峯の峯に没しぬ。家々に立登る夕炊の煙絲の様にたなびきつるがやがて一團となりて臙に市街を蔽ひつ。東なる山嶺の夕陽に映じて赤やかなりしもしばしにて、たそがれの色は山々の麓より湧き出で夜の神は將に其巡行を始めんとするなり。

木蔭次第に暗うなり行きて時求むる鴉の羽音けたましくも亦哀れ深きに龍田の頂なる老松の幹にもたれ、覺束なき記憶の絲にすがりて過にし年月を辿り見れば追想は追想を呼び回顧は回顧を誘ひて身は昔の我に歸りて果敢なく哀れなる事のみいと多かり。別けても情なう無常を觀ぜらるゝは逝にし人のありし事ども思ひ出で偲ぶにぞありける。

我姉なる君の嫁ぎ玉へるは城下を西に離るゝ一里ばかり、稻田十里鶏犬の聲相和する邊にあり。我は幼なきより常に其家に至りて姉君のあつき愛の光と清潔なる田舎の空氣に浴しつゝ數日を送るを此上なき樂とはしぬ。門邊に一株の柳ありて其が根元を洗ひつゝ樂しげに聲立て行く小川の流一つあり。春は岸邊に萌え出づる菫菜蒲公英蓮華草さては土筆の筆にも盡されぬ草々の眺面白きに家路を忘れて遊び暮らせし事もあり。秋は澄み渡る月の光をたゝへて白金の漣うるはしき折など蟲籠片手に其岸邊を徘徊し「うゝさぎうさぎ」を歌ひし事も幾度か。別けても忘れやらぬは此純潔なる樂を共にせし戀しき友の面影なる。

我に一人の友ありき。笑はゞ笑へ世の心汚れたる情火の奴よ、我には實に理想の戀人あり名をば雪と云へる孤兒にて姉君が家に隣れる賤しき農家に養はるゝ者なりし、我よりは稍年かさなりけん。容貌は美なりしやと問ふ人あらば我は只知らずと答ふべし。されど〳〵我は又能く記憶せり、其いたく引締りてしかも愛らしき口元と涼しくて涙多き黒め勝なる其眼とを。

いついかなる折に友垣を結びしかは我も知らず。只物とはなく其人の慕はしきに雪ちやん〳〵と睦めば彼も亦坊よとて我をいつくしみぬ。柳の本に芝生折しきて我をかき抱きつゝくさ〳〵の物語聞かせつ、折々薔薇の様なる唇をそと我頬に押付くる毎に我はえならず樂しく又うら悲しき

様の心地に胸の中亂れて我知らず涙ぐめば彼は「いかにやしつる許してよ」と云ふに一入心亂れてゆゑ知られぬ涙にむせびし事もあり。夕風涼しく川面をなでゝはた／＼と袖あふる夏の夕螢や取らんとて打連れ立ち螢の光歌ひつゝ畔道分け行く程折々携へたる螢籠すかし見る面ばせの神々しき迄美はしかりしが今も只眼の前に浮び出づる心地せられて。

一年柳の梢まばらになりて西風に木の葉生きて走る頃なりしよ。或日彼が戯れに此柳を指して我等の丈けいつ此の様になるぞとて打笑みし夕、家より迎の男來りて我をゐて歸る事となりぬ。別れ際に彼は常の如く姉君等と共に見送りつゝ、又こそと云ふに我もさらばとて立出でし時常にもあらず安からぬ心地せしを心に止めて立ちあかれぬ。

しばしは語るべき事もなし。秋は漸々深くなるのみ。十月の末、久し振りに姉君がり音づれし時彼の人の見えざるにいぶかしくて姉君に尋ねれば御山に行きしと云ふ。山とはいづこぞと云へば遠い／＼御前等の行かれぬ處なりと答ふ。更にいつ歸るにやと問へば俯首うつむき玉ひていつ歸るやらと云ひ玉ひぬ。何とはなく心弱くなりて我も泣けば姉君も泣き玉ひぬ。こゝ語るまじ語らんとて語り得べしや。

其後幾度か姉君を訪ひぬ。冬も暮れ春は歸れど我待つ人は歸らざりき。年暮れ年明け年又暮れ

て門邊の柳もいたく長けぬ。我丈けも長けぬらんに我友はそを見んとも思はでいづこの野邊何處の月にあくがるゝか。

去年の夏郷里を出でんと云ふ前日姉君に暇乞はんと赴きし序近き小山なる彼がおくつきに詣でて心ばかりの香花たむけさきの世の幸多かれと祈りし時あたりなる草心の儘にいたく生ひ繁りつるがあらはれはらふ人もなきか。

天無情人無情とかこちつゝ立ち上る時片への繁みに梟の聲凄し。

(明治卅平六月廿二日戯れに作る)

六

病に就て

四百四病と云ふは昔の事で今日は何百何病あるかそんな事はどうでもよいとしてこゝに手近な病の色別けをして見たら面白からう。黄疸、赤痢、猩紅熱、黒死病、白下帯などは云はずともちや。腦充血も無論赤で少し紫がゝつて居る。肺病之れは桃色で胃病は蒼白い。腸加答兒は白つぼけた灰色で、腎臓病は眞白ぢや。それから神経病はと考へるとこいつは無色透明らしい。

(明治三十二年)

月の十八日は思ふ事多き日なりき。湯あみ果てたる鬢の毛に春風ゆらぎて心は早くも菜の花かほるなべにさまよふ。

灯ともす頃清岡の君來る。刺繡の模様くさくさ君が折にふれて寫し集めたる草紙もたらしてくりひろげ見る。雲井に舞ふ鶴の品高きは手巾の縫箔にやよからん。行水に遊べる龜は龜焼と云ふもの其まゝなど戯れつゝなほ見て行くに青海波に七寶を散らしたるがあり。我幼なかりし頃宮詣野遊の折柄腰につけし守袋のそれと露たがはずと見てあれば、清岡の君「その模様に見覚えはまさずや。そは朝倉なる君が姉君の許なる守袋より寫し取り侍りぬ」と云ふ。さればこそ、と打ほほゑまれつゝ廿とせの昔の夢をなつかしむ今の我うたてのさだめに身一つを人の世に措き煩ふ今

の我を思ひてかつ泣きぬ。
(明治三十五年二月二十五日須崎)

八

白百合

世にさすらへの廿年男ありけり。けはしき山と、危き谷越えて若草香ふ春の野に出でぬ。一本松の影に白百合の花立てり、男は此花めでたしと見て其傍の草折りしき憩はんとす。蜂の羽音聞えて男はしばしまどろみぬ。

清き姿したる天使夢に現はれて「其根を見よ」と云ひぬ。眼さめて白百合の根に群がれる小さき小さき悪魔の形したる蟲を見出でつ。そを拂はんすべ知らに泣きぬ。泣きつゝも行手を急ぎて野もせに迷ふ行雲の影を追へり。(明治三十五年)

片断

九

夏の山路に渴ける旅人、谷間なる椎の木蔭、野茨咲き亂るゝ奥に、わきて流るゝ泉の音を聞き
てしばしと立寄りぬ。花の香、苔の香、草鞋しめりて赤き蟹這出でたり。泉の傍なる草のしとね
に柴を枕に眠る少女を見出でゝしばしたためらひぬ。頭をつゝむ白き布より一房の黒髪垂れて地に
ふるゝあたり小さき草の花さきて風なきにゆらぐ時、鳥啼きて一片の葉落ち山蟻膝に上るを見た
り。清水掬び果てゝ去らんとする時一度立ちかへりて袂なる手帳に少女の姿を寫し一ひらの茨の
花を紙にはさみつゝ出で立ちけり。坂道下り來る柴こりの若者に會へり、柔和なる其額に流るゝ
汗を見つゝ又彼の泉を思ひ又彼の少女を思ひぬ。旅人のふりかへりし時若者もふりかへりて互に
打ちまもりつ。再び旅人がふりかへりし時は若者の姿岩角にかくれて見えすなりぬ。

(明治三十五年)

十

葉
櫻

土曜日の午後を春雨しと、降りぬ。宿にあらんも物憂しと立出で、久しくも音づれざりし友を四谷本村に訪ふ。傘傾けて門の戸押せば鈴の音して葉櫻の雫額に落ちたり。

いつに變らぬ主人の接待ぶりに、膝くつろげてしばし我を忘るゝ放談大語に更けつゝ、若き友の妻がすゝむる儘に手馴れぬ杯も數重なりぬ。障子のガラス越し庭の若葉にさせる火影をば降る雨にきらめきて美し。

一しきり降り來る雨の音に交りてオルガンの音隣より聞えたり。うるはしく清き女の聲にて唱ふを聞けば「青葉しげれる櫻井の」と云ふ小楠公の唱歌なり。「散るは涙かはた露か」と結ぶ時

そゞろに胸にしみぬ。三人言葉なくて耳かたむけし時の心地今も忘れず。(明治三十五年)

十一

春の水野に満ちて所々に麥の穂や、色づきぬ、雨後の山々霧晴れ渡る心地よさに背戸に出でたり。水田打ちかへす若き夫婦あり、相並びてされど相背きて歛うちふるふめり。

(明治三十五年)

十二

若き妻肺を病みて衰へ行く中に春を迎へて餘寒去りやらぬ植物園に遊べり。妻はしばし病を忘れて常磐の木立に團栗を拾ひぬ。年経て後此可憐の妻が忘れ形身なるちごの手を引きて再びこゝに遊びつゝ無心の小兒と昔ながらの木の實拾ひぬ。(明治三十五年)

草取歌

物憂くも降りつゞく雨かな。机の前なる障子のガラス越しに見れば北の山々朧に、久萬川堤の下には簑笠きたる一群の人青田の緑に黄なる點打ちたる如し。しめやかなる雨の音に交りて草取歌聞ゆ。節ゆるやかに歌ふ言の葉を何と別き難けれど云ひしらすあはれに悲しげなるしらべよ。たとへばつれなき世の定めにあへられて遣るに由なき戀の悶えを其儘に唱ひ出づるにも似たるかな。所々優しき聲の打ちふるひて、切なる胸の亂れを包み兼ねたらん如く、又消え入る様に歌ひ終りてしばし聲なきは小さき胸の玉の緒の絶えしかとも。折柄空には子規さへ鳴き渡りぬ。

(明治三十五年五月二十八日)

十四

反映

「スグ刈つて貰へますか」と云ひながら、はいりこんで大姿見の前の金魚鉢と碁盤の側へ腰をかける。洗面臺の向ひに腰かけて尺八を右の手に握つて左の手のひらを打ちながら口笛を吹いて居た二十二三の男があわて、頭を下げてイラツシヤイをかける。同時に奥に縫物して居た藪尻の主婦らしいのが出て来て「只今スグ……」と會釋しながら店から出て行つた。尺八の男も「もうデキ歸りますから……」と言葉を添へて又笛をいぢくつて居る。主人は留守と見える。間もなく歸つて來たが手に小さな玉網を持つてゐる。金魚の餌にするぼうふりと見える。泥の臭がぶんと鼻をついた。「御待遠様。ドーカコチラへ」と言葉はやさしいが見る所二十四五の眼に一種の

凄味をもつた男。「五分にしてください」と云ひつゝ椅子へ寄つた。店の割には白の掛布は清潔な。「オイ。仕様がないちやねえか。そんなに水ばかりぶつかけたつて。……ようく振つて泥をおとすんだよ。さう／＼。そして又少しやつておきな。一鉢をセハシク使ひながら店先でぼうぶりを洗つて居る藪殿に命ずる。「短く切つてやらんでも、宜いかね。食ふだらうか」と尺八が喙をいれる。主人はそれには答へずに「段々黄色くなつて来るなあどう云ふ譯だらう」と獨語の様に呟く。「そりやなるさ。それから赤くならうと云ふ奴さ」と金魚學の講義が始りかけた。余の頭は首筋から始めて、やつとてつぺんへかゝつたので、首を上げて鏡を見ると眞中に鬢の無い百日鬢を着た様な變手古な顔がある。これは自分なので、其向ふに忙しさにチヨキ／＼やつて居るのが無論主人で、其向ふが○町の往來である。其往來の向側に軒の低い藁葺のくすぶつた茶店がある。屋根を突抜いて生えた大きな柳の枝が青々と垂れた下に腰かけが二つ三つ並べられて、二三人近郷から來たらしいのが、尻端折つた儘腰をかけて餅を食つてるのもあり茶を呑んでゐるものもある。薄暗い隅の方から白髪の媪の顔と、萎びた腕がヌツト出て禿盆にのせた茶を差出した。見てゐる内、鉢は前頭部へかゝつたので顔へバラ／＼と来るから目をふさいでしまつた。後でチリチリンと自轉車のベルが聞えると同時に振りかへつたらしかつた主人が「オイ。あれはね、×

×の子だとか云ふがね、實はさうぢやないんだとさ。なんでも、何處かに棄子になつてたのを新平民が拾つて育てたんだつて。」「フム」と尺八男の氣の乗らないのは大方金魚でも見てゐるのだらう。不意に尺八が「イヨウ」と妙な掛聲をしたと思ふと「オイ六圓てなああれ……。」余が眼をあげて鏡を見た時丁度左のはづれに大きな丸鬘と白い首筋と紺がすりの單衣と紫縹子の帯とがちらりとしてすぐ消えてしまつた。「コレは辯護士だつて云ふんぢやないか。」櫛を持つ手を一寸上げて親指を示した。「ム、……。六圓だとよ。」余の眼と主人のギロリとした眼とが鏡の中でハタと出會つたから、余はあわてゝ眼をそらした。向ふの柳の茶店にはさつき見えた人々はもう居ない。仲持的の人相をもつた、眼をパチ／＼する癖のある中老年が一人バクついて居るばかり。急に何か思出した様に吹殻をたゞいて煙草入を腰へさした。立つたと思つて居ると又落付いて眼ばかりパチ／＼して居る。余の頭はやつと終つて洗面臺の前の椅子に移されて尺八と向ひ合うた。そろ／＼剃り始める。何時の間にか店口へ七七八の美しい顔が現はれて居る、そして相變らず根氣にぼうふりを洗つて居る敷殿の手先を無意味に見つめて居る。尺八は反身になつて笛を口にあてゝ吹き始めた。尺八の音がやんだ頃は剃刀も終つて、頭を洗ひ終つて、やつと腰を延ばした。美しい顔は消えてしまつたが敷腕の主婦は依然として無言でぼうふりを洗つて居た。

歸る道すがら、涼しい頸筋を撫でつゝ、余はこんな事を考へた。床屋の世間話しを聞きながら
姿見の中へ走馬燈の様に映つて行く人生を見て居ると、丁度自分が別の世界に居て四角な穴から
此世をのぞいて居る様で、鏡の中の人物は自分等の過去現在未來の反映である様な心地もする。

(明治三十五年高知)

十五

風呂から出ると涼しい風がゆふべ刈つた頭にひえ／＼して急に秋が來た心地がする。何となく愉快でぬれた手拭を握つて曙町の方へ上つて見た。真中に短冊なりの石をしいた綺麗な赤土道を上ると左側にはかやすゝきの思ふ儘に茂つた土手、其中は松林で大弓の射場らしいこけらぶきが一軒ある切り、其前を電話線が二筋奥へ通つて居る、大方土井邸の射場だらうと思つて行き過ぎようとすると左側の黒板塀の中に柏の木立のある内で琴の調子を合せる音がする。今朝西片町を通つた時もとの寓居の隣の御師匠さん處でいつもの通りやさしい音のしてゐるのを洩れ聞いて、おとどしを思出し何となく胸をさゝれたのが今更の様に胸の中に反響していつの間にか下り坂になつたのも知らなかつた。又引きかへして來るともう夕日が沈んで松林の梢の間に眞赤な夕焼が

見えて射場のあたりでは蟲が鳴き初めた。琴は佳境に入つてゐるらしい。豆腐屋が一人黙つて通の方へ下りて行く後影がなんとなくすら淋しさうに見えたが、それよりも夏のなごりのよごれた白の浴衣を着てぼんやり坂の上に立つて居た自分を一しほ淋しく思うたのである。

(明治三十五年九月十八日東京)

十六

冬の雲は模糊として厚みと深みがない。夏の雲はハッキリして厚みと深さがある。雲があつて沸き上り空際に聳え其峯は透明な瀨氣の奥に光つて居る。一抹の横雲が其前を横切ると雲は更に高く空は更に大きい。此方の横雲と彼方の雲の峯の間には何物もない虚空の壯麗、玲瓏の快感は此の空間に存する。(大正三年)

學生の中に斷えず下宿を變へる者がある、別段著しい不都合といふ程の事もないのに一處に落着かない。卒業して一家を構へて後も一年中轉宅ばかりして居る。又一方には一度定めた下宿には少々の不都合や不便があつても其儘居据り卒業後も家を構へたが最後中々容易な事では引越し

をしない人もある。前者の中には勤勉で親切で行届いて氣が利いてそして一向成效しない人も居る。後者の中には無精で冷淡で間が抜けて居てそして大に出世する人がある。(大正四年)

東京の特有の美を味はんと思ふ者は夏醗なる日の暮近く馬場先門内に立ちて西の空を眺め、一秒毎に變り行く空の色と皇城の森の陰影の濃く染り行くを見るべし。此の半時間の光景は日本にも西洋にもなき不思議の壯觀なり。此の美は唯日本の田舎者にして始めて味ひ得べきものなり。

「ローマ字のすゝめ」といふ刷物の配布を頼まれ某所に行く。刷物の部數少く某所の人數は此れに倍す。此れを配るべき相手を物色す。此れを與へて讀んでくれさうな人とくれさうもなき人と大凡は區別し得らるゝ心地す。前者は青年と老人に多く後者は壯年の人に多し。

小説は一つの (Feldankenexperiment) なり。

颯風の吹き荒れ怒濤の岸を打つを見て心自ら快なるは破壊を喜ぶ本能の満足によるか、充實せ

る威力に對する憧憬の實現によるか。

電車の中にて人々の顔色を窺ふ。苦き顔暗き顔疲れたる顔腹立たしき顔凄き顔十中の八九なり。嘗て獨逸にありて朝夕電車に乗る、明るき顔晴々しき顔もしくは何ともなき顔過半を占む。生活問題は暫く措きて問はず、日本の苦熱、街路の塵埃、泥濘、横に降る雨、息苦しき空風、堅き蒲團、不潔なる便所、巾着切の横行、物貰の訪問、此れだけでも人の顔は苦くなり暗くなり凄くなるべし。

門番は横風にて癢にさはるものなり。此れ其職に忠なるが爲なり。

一夜夢に樓閣に登る、樓上人なし。眼前一大湖あり、其水銀の如し。汀に草あり、其色血の如し。醒めて心落寞、即ち滂沱として泣く。

深き古井をのぞきてワーンと叫ぶべし。中に聲ありてワーンと答ふべし、此れ地の底より來る聲

にして餘韻の消え去る時鬼氣胸を襲ふへし。

鏡に映れるは我が影にあらず。我は右衽にして彼は左衽なり。我が右眉の黒子は彼の左の眉にあり。我が身體衣服を如何にすれば彼と同じくなるかを考へ見るへし、其時空間といふ問題に逢着すべし。

Staatseinkommensteuerneinschätzungskommissionsvorsitzender とし、一字あり、アルファベットの數五十七あり、Hōgyōsakinok wambakudaiizyōdaizin には三十三あり。

子音の多く続ける人名にては *Irlika* あり、日本の *Oi* など、反對の極端なり。 *Jentschke*, *Prizbran*, *Zabze*。

羽田の邊り早船といふものあり、交通機關としては最も遅緩なるものなれ共婦人などの徒歩するよりは場合により早き事もあるべし。

近頃腹立たしきは粗製のマッチの多き事なり。霖雨の降り續く頃など濕りて用をなさぬもの十中の八九なり、或は軸木の尖端なる發火藥の脆くこぼれ落つるもの、箱の塗藥の容易に剝脱するもの、強ひて發火せしめんとすれば紙は破れて箱はバラ／＼に崩るべし。軸木の折れ易きもの、頭に藥の付き居らぬもの幾本も交りたるなどいづれか忌々しからざらん。それ等はまだしもなり、或は發火の際爆發的に火の粉を飛散し膝を焦し指端を焼き或は唇に灸する事あり。箱の塗藥が溢れて固着し開き難く強ひて開く拍子に一時に發火して大火焼を生ぜる例もあり。此様な品物が横行しても世間では餘り苦情を稱へる人を聞かず、恐らくマッチは此様なものとあきらめ居るに哉。此様な不愉快な非科學的なる物品の市場に蔓延するは一つは需要者の罪なり。僅かの研究改良によつて避け得べき不便なるに公に小言を云ふ人のなきをよき事にして製造業者は粗製濫造を敢てし不正の利益を占め居るとしか思はれず。些細な事なれど全國民の文明の程度を計る目安にもなる事柄なり。西洋の事は知らざれ共恐らく獨逸や英國でこんなマッチが市場に生存し得る氣遣はなかるべし。需要者が粗製を排斥し製造者が科學者にでも少し相談すれば霖雨に濕らぬ位の方法はいくちもあるべし。或る化學者の話によれば西洋ではそんな事は疾の昔にいくちも研究してあ

る由なり。マッチのペーパーを集める人は其處等中一面にあれどマッチの品質の研究をして世間の注意を促す様な科學的の閑人は少しと見ゆ。自分の近頃東京で出會ふマッチには一つも碌なものなし。此夏逗子にて求めたる神戸良燈社の燕印のだけは稍役に立ちたり。專賣局の煙草に御愛嬌に添付する小形のマッチの如きは粗惡の最なるものにてあの様なものは貰はぬ方がどの位有難きか分らぬ位なり。あれを頼みにして隱袋などに入れ雨天に外出しいざ必要といふ場合に取出して見れば薄べらの箱の中に疎につめた數十本のマッチは殆んど何の役にも立たぬ事は常なり。日本の商品の多くがもし此マッチと同様ならば軍艦は何艘ありても日本の將來は覺束なし。

電車で廣告のピラ繪など見て居ると随分色々の意匠を凝らしたのがある。どうせ模様であるからどうでもよいと云ふかも知れぬが中には餘り物理學を無視したものがあつて吾等の眼には不都合に見えるのが往々ある。例へばペリカンの嘴から噴出した水がインキ壺に落ちて居るのを見ると水は初め暫らくは凡そ水平に逆つて或る處から急に下の方へ曲つて落ちて居る、あれはもう少し拋物線形にして貰ひ度い、其の方が自分等には美的に見える。又子供の雜誌の挿畫に電車の急に動き出して乗客が皆一方へ傾いた處を描いたのがある。處が天井から下つた釣革を見ると人の

からだの傾きと平行する様に傾いて居る。これは間違でない迄も却て不自然である、寧ろ反對に傾かすのが正當である。尤も釣革の振動週期は短かいから突撃の起つた後の或る瞬間にはかういふ形にならぬ事もあるまいが畫家の積りはさうではあるまい。

餘り急いで歩けば早く疲れる。しかし同じ距離を餘り遅く歩いてても却て草臥れる、丁度或る適當な速度で歩くのが一番樂である。此れは何故であらう。餘り急いだり無理に遅く歩かうとするには精神に斷えず或る仕事をさせるのも一つの原因であらう、又自分の力の極限迄骨折つて筋力の過度の消費をすれば疲れるのは當り前として、遅く歩くと草臥れるのは何故か。同じ距離を遅く歩けば歩行する時間がそれだけ長くなる。長く立つて居るといふ事自身が疲勞の一つの原因になり得るとすれば其爲にも遅行は骨が折れる譯である。しかしそれだけの事であらうか。歩行運動は一種の週期的振動である以上は恐らくは其の固有の週期があつて此の週期で歩けば一番筋肉を勞せず經濟的に歩行が出来るのではないだらうか。音樂の拍子に *andante* といふのは歩行の速さである。矢張り此處らが適當な速度であらう。もしさうだとすると矢張り短身の人は長身の人に比して步調を幾分早くしなければならぬ筈である。若しも週期が身長²の平方根に比例し一步

の長さは身長に比例するとすればどうであらう、長身の人と短身の人とが最も適當な固有速度で歩いて居る時どちらが早いだらうか。

$$\text{歩行速度} = \text{振動數} \times \text{歩數} \propto l^{-\frac{1}{2}} \times l$$

$$\propto l^{\frac{1}{2}}$$

即ち矢張り長身の方が早い、そして一割高い人は五分程早い事になる。天秤棒で荷物を擔へば身體と荷物とで出來た一つの系の固有振動がある譯である、其場合にもし此の週期と適當に調子を合はさなかつたら餘計に筋肉を勞せなければならぬ事は勿論である。しかし自身の身體もつまり自分の荷物だと考へれば矢張り理窟は同じ事ではあるまいか。

先生が生徒に勉強せよといふ。生徒も勉強したいと思ふがどうも勉強が出來ぬ。怠惰で意志が薄弱な爲に勉強の出來ぬのも多いが、又どうするが勉強かといふ事が解らぬ場合が少くない。本を読むのみが強い勉強ではない。本を読んだばかりで學者になれるものなら活版屋の植字工は大學者であるべき筈である。

十七

子供二人濱邊に美しき貝を拾ふ。甲は從容脇目もふらず瞬く間に美しく珍しき貝を得て籠に充つ。乙は左顧右眄して徒に眼を見張り甲の美しきものを得る毎に此れを羨み見て更に眼を砂上に走らす、得る所甚だ少し。

昔の科學者の實驗室と云へば殆んど皆個人の私邸の一室であつた。十九世紀初の有名な化學者 Berzelius は臺所を實驗室にあて、炊事と實驗とを兼帶でやつて居た。Newton が白光の分散を實驗したのも Cambridge の自宅であつた。今日ではあらゆる學校研究所に立派な實驗室が出来て結構なことであるが、餘り便利になり過ぎた爲に立派な實驗室がなくては如何なる研究も不可

能な様に考へる傾がある。今日でも氣象などに關した研究には立派に自宅の二階で出来るやうな種類の事も珍しくない、物理の實驗でも種類によつては自宅で充分に出来るのである。立派な設備があつても研究心のない人ばかりでは何事も出来ない。研究すべきな山中の中學校教員エルスタール・ガイテルが空中に於ける荷電の分散を研究して輓近科學に重要な貢獻をしたのは近頃の事である。

或る若い繪かきが著名な人の肖像を描いて大層よく出来たといふ評判であつた。其繪をかき上げる迄に二十日程かゝつた。或る古典派の老畫家が此れを聞いて笑つた。一あの畫家はまだ繪具を交ぜる事も充分に分らない、それでそんなに永くかゝつたのだらう。自分なら三日でかいて見せる」と云つた。しかし其繪は文展で特選の榮を擔つたのである。

繪具の交ぜ方が分らぬ處が價值である。此れが分つて型に入つてしまへばもうおしまひだと思ふ。御定まりの色だけつかふのなら三日でもかけよう。寫眞を見ただけで *portrait* が出来る譯であらう。

Hydrogen peroxide の瓶がある、一ポンドが……である。 H_2O はロハで買へる、 O_2 も亦ロハである。それなら H_2O_2 の價は何の價だらう。しかし／＼考へて見ると、何でも同じ事になる、物質は無代價で energy が金になるのだらう。

自然の色彩に對する感覺は繪から教はつた。子供の時分に買つた西洋の色石版畫の森の繪から木の葉の色の無限の變化と錯綜を教はつた。それから高知公園の杉の木立の色が非常に美しく見え出した、殊に冬の北山の霜枯れの色の中に名狀の出來ぬ程複雑に美しい色のシンホニーを眺め暮した。三十餘年後の今日畫をかき始めてから強い外光の陰影に揺曳する深い紫色を目の當りに認識する事を得た。(大正八年八月十六日)

片斷
田丸先生が足尾銅山からよこした繪ハガキに一足尾の主な仕事はカスの始末だと感じた一とある。世の中の仕事もカスの始末が大分多いやうである。否殆んど全部がカスの始末かも知れない。

熱を機械的エネルギーに變ずる際には必ず若干の熱は役に立たずに低温度に移らなければならぬ。如何なる食物でも少しも糞便を生ぜずには攝取される事は出来ない。考へて見るとなるべく多くカスを排出するといふ事が人間の積極的な仕事なのかも知れない。カスのない事ばかり氣にして居る人は終に生涯なんにもしないで居る外はあるまい。(大正八年八月十六日)

近代の凡ての繪畫(東洋畫も込めて)は一度一つの焦點に集合しそれから放散して居るやうに見える。其焦點は即ち *Vanne* や *Gogh* である。*Stray Light* はない事はないが。

眼で見て極めて簡單で畫にかいて存外複雑になるもの、例へば室内や靜物のやうな物は描き易く効果を收め易い。此れに反して眼で見て極めて複雑で描く時には簡單化したければならない物は六かしい、例へば樹葉雜草の群のやうなものである。(大正八年九月七日)

富士山を描いた繪は多いが淺間の繪は少ない。しかし實際は淺間の方が遙に繪になり易い。

自分の持つて居る定規に合ふやうに人を強ひる事を親切と心得て居る人がある。かういふ人の定規は不思議に曲つて居るのが多い。

同情のない親切と同情のある不親切——自分は糊の硬くない浴衣の方がいい。

或る問題に對して「ドーデモイ、」と云ふ解決法のある事に氣の付かぬ人がある。何事でも唯一つしか正しい道がないと思つて居るからである。

「ドーデモイ、」といふ事は必しも無責任といふ事を意味するのではない。

相互に對して動きつゝある二つの系の矛盾は相對率によつて解決された。異なる人生觀を有する人間の間の融和は愛と同情による外はない。

常識といふ言葉の内容は此れを用ゆる人々によつて悉くちがつて居る。換言すれば、人の事を「常識がある」とか「ない」とかいふのは自分と似て居るか居ないかといふ意味に了解すればいい。

AがBを評して「彼は氣取つて居る」といふ場合には次のやうに解釋すればいい。即ち「彼は自分とちがつた氣取り方をして居る」と。本當に氣取らない人は人の氣取るといふ事を感じない。

Pride を持たぬ人程厄介なものはない。幸に大多數の人は此れを持つて居る。

物事に對して「ツマラナイ」と云ふのは「自分は其物事の中にツマル或物を發見する能力を持たない」と自白するに過ぎない。

人格の高いと思ふやうな人の口から「人格」といふ言葉を聞く事は甚だ稀である。

「邪道」といふ言葉は頭腦の古い人が新しい人の捉へた眞理に名づけるものである。

十九

連句の附句の妙諦は自己を捨て、自己を活かす事である。前句の世界に身を沈めて其底から何物かを擲んで浮上つて來ると自分の世界が開けて居る。

前句の表面に現はれたものだけから思ひ付いた考を何處迄も執着するのでは到底いゝ附句は出來ない。

前句が假令まづくても平凡でも、それに付ける附方次第で前句がぐつと活きて引立つて來る。此れは前句がどんなものでも其句の底には色々な可能性が包まれて居る、それを見付け出すのが仕事である。併しそれをするには矢張前句に充分な理解がなければならぬ。

又前句をつけた人の心持に同情がなければならぬ。此れが出來る爲には矢張人間が出來て居

なければ駄目である。

大正十五年九月四日 暴風雨。庭の櫻の樹が一本折れた。此れは今年の春藤をからませ、その葉が大變に茂つて居たので風壓が過大になり、幹の彈性極限を超過したものと思はれる。

此れで見ても樹木などの枝葉の量と樹幹の大きさなどが如何にうまく釣合つて無駄がなく出来て居るかよく分る。それを無理な事をするものだから少しの暴風でも折れてしまふのである。

鹽原などの景色は實に美しいが、馴れないせぬか、かういふ山水の中へ行くと自然に壓迫せられるやうで軽い腦貧血を感じメランコリックになる。霞が浦の飛行場のやうな廣い處へ行つても同様である。丸一日も居ればなれてしまふだらうが行つた當座はひどく氣が沈む。

山の空氣の肌觸りはどうしても平地のとちがふ、同じ涼しさでも何處かちがつた處がある。此れには色々の原因があるだらうが、事によると山の方では溫度分布が粗い粒狀をなして居て、それで皮膚に特別の刺戟を與へるのではないかといふ想像が起される。もしさうだとすれば微細な

thermojunction か resistance thermometer と string galvanometer なども使つて此れを實驗する事が出来るだらうと思ふ。

反對に物理的療法などで皮膚に熱い水滴と冷い水滴とを混じて吹きつけて刺戟を與へ、それが如何なる効果を及ぼすかを驗して見るのも面白いのではないかといふ空想も起される。

三毛が死んで數日の後鹽原鹽の湯明賀屋で三毛と同じやうな斑點をもつた猫が居た。始めて見た時は毛色と眼の色が似て居るだけで、顔付は少しも似て居ない、厭な顔だと思つて居た。しかし見馴れて來れば來る程、其顔が段々三毛に似て來てしまひには全く同じやうに見えて來た。此れは前の印象が段々新しいものゝ方に移り變つて行くせるか、それとも新しいものゝ中から古いものに似た點だけを抽出し、似ないものに對して盲目になるのか、どつちだか分らない。

同じやうな事がもう一つある。

松本の博芳を森の人々は貞子にそっくりだといふ。併し自分が見ると何處が貞子に似て居るか分らない。其代り博通にも又壬五郎氏にもよく似た處があると思はれる。さうして見ると、自分に familiar なものを定規にしてそれから少しでも deviate した點だけを認識するものであるか

も知れない。

して見ると猫の場合にも、始め一見した時には *revelation* だけを認識し、段々見て居る中に其定規の *norm* がはつきり見えて来るのかも知れない。

もう一つ似よつた事がある。

TとKとは同じ理學者で、廣い世人と比較すると二人随分よく似た處がある。よくいろんな人が二人を混同する。しかしKはTと自分の差異の點を *exaggerate* して見て二人正反對の性格だと思ひ又さう人にも話して居る。

餘り頭のいゝ人は研究家思索家にはなれない。六かしい事がすぐよく分るものだから、つい本當は分らない事迄も分つてしまふ。頭の悪いものは分らない事だから、考へて居るうちに本當に分らない事を分らせる可能性がある。頭がよくて *imagination* の豊富なものが結局一番いゝ仕事が出来るだらう。

讀書の方法に就いて學生から聞かれる事がある。自分の答は「精讀せよ濫讀せよ」といふので

ある。少數の良書を精讀し深く考へるのは自分の考の筋骨となる系統を立てるに必要である。雜書を濫讀するのは此の骨に肉を付け又 *hints* を得るのに必要である。此れには如何なる愚書も有益であり得る。

物理學は自然界にどれだけ分らない事があるかを學ぶ學問である。自然界が分らぬ事だらけになつた時にその人の物理は少し進んでゐる。

中等教科書の物理學は嘘で固めたものである。本當は分らない事をちやんと分つたやうな顔をして書いてあるのだから。

自分は暑い日と寒い日ばかりで暑くも寒くもない日がない。浴衣の終る時はすぐメリヤスのシャツに羽織が必要になる。調節の *range* が *zero* に近い。

歲時記新註

稲妻

晴れた夜地平線上の空が光るのをいふ。獨逸では此れを *Wetterleuchten* といふ。虚子の句に「一角に稲妻光る星月夜」とある。説文に曰く電は陰陽の激曜するなりとはちと曖昧であるが要するに陰陽の空中電氣が相合する時に發する光である。遠方の雷に伴ふ電光が空に映るのだが雷鳴の音は距離が遠いのと空氣の溫度分布の工合で聞えぬのである。稲妻のひかりとする時間は一秒の百萬分一といふ短時間で此れに照して見れば砲丸でも止つて見える。餘り時間が短いから左程強く目には感ぜぬが其實月の光などに比べては比較にならぬ程強い光である。時としては天の眞上で稲光がして矢張音の聞えぬ事がある、此れはブラシ放電と名ける現象で此時の光の色を

分析して見ると普通の電光とちがふ事が分る。稻妻が光る度に稻が千石づゝ實るといふ云ひ傳へがあるが、どういふ處から割り出したものであらう。近頃海外では農藝に電氣を應用する事が漸く盛にならうとして居るから稻妻の傳説と何か故事つけが出来さうである。

(明治四十一年九月十二日、東京朝日新聞)

二

一 葉

淮南子には一葉落而天下知秋とあるが、植物學者に聞いて見ると、木の葉が夏過ぎて落ち散るのは葉柄の根元の處にコルク質の薄い層が出来て其處だけ脆くなるから少しの風にでも誘はれて天下の秋を示すものださうだ。又或人の話によると、落葉樹の葉の中で遅く發育したのがまだ十分成熟しない内に早い霜に痛んでしまふと、それきり發育が止まつて、コルク質の出来る間がなく、梢に枯れたまゝ淋しい趣を見せるといふ事である。(明治四十一年九月十六日、東京朝日新聞)

露

夜地上の草木土石が冷えて空氣よりも冷くなると空氣中の濕氣が持ち切れなくなつて露と結ぶ。地面は晝間温かい太陽に向つて九千三百萬哩の彼方から來る光熱を浴びて居るが夜になると冷い死灰の様な宇宙の果に向き變つてしまふ。すると晝間折角太陽から貰つた温熱の大部分は人の知らぬ間に音もなく地面から抜け出して虚空へ逃げて行く。一秒時間に十八萬六千哩といふ驚くべき速度で逃げ出すと、もう未來永劫再び我が地球へは歸つて來ぬ。よく晴れた夜には地面は赤裸で天體の寒さに曝されるやうなものだから餘計によく冷える。こんな晩には露が多い。しかし雲があれば丁度地面に着物を着せた様なわけで熱の放散が少い、それだから露が少い。又風がある

と地面の冷えようとするのを始終空氣が撫で、行くから空氣よりも著るしく冷える間がない。それだから風のない雲のないそして濕氣の多い晩に露が多い譯である。又物によつて熱の逃げ易いものと逃げにくいものとある。草木の葉や土石藁の様なものには冷え易いから露も多くつくが、光つた金屬例へば金盞などは冷えにくいから露も付きにくい。熱帯地方では露の夥しく降る處がある。アフリカのコンゴ河口に近い海岸で一夜に降る露の量は地面を一分程の深さに蔽ふに足るといふ。(明治四十一年九月十七日、東京朝日新聞)

四

鳩 吹

古書には「鳩をとるとて手を合せて鳩の聲のやうにふきならすなり」とある。丁度フラスコの口に斜に呼氣を吹き付ける時に出る音と同じ譯で、兩掌の間の空洞内の空氣が振動して音を出すのである。此種類のものでは其音の調子は空洞が狭くて口の穴の廣い程高くなる。唸り獨樂の音なども同じ様な例である。又栗の實に小さい穴を穿つて中實を掘出し穴から長い絲を出し其絲の端をもつて栗の殼を烈しく振り廻すと音を出すがあるも同理である。此種類のものは大抵ウ行に近い音を出す。人間の聲でもウ行の音を出すには口を狭く突き出さねばならぬ。「吹く」と云ふ言葉も頬を膨らし口をすぼめた時に出る聲から起つたものであらう。

(明治四十一年九月二十五日、東京朝日新聞)

秋 分

五

昨日迄北半球の上に照つて居た太陽が將に南半球へ越えんとして丁度赤道の眞上に来る日である。此日我が皇室では皇靈祭を行はせられる。佛教では彼岸の中日時正の日で、一切の諸佛三世の諸尊及無數萬億菩薩說法して衆生に樂みを與ふといふので春分の時と同様阿彌陀詣などをする。昔埃及の天文學者は地上に環を立て、北極星に面せしめて置き、環の影が丁度一直線になる日を見て春分秋分を定め、此れを基として曆を定めたといふ事で、其時の環が今日でもアレキサンドリアの博物館に保存してある。此日は晝夜長短相同じで此れから段々夜長になる。すつと昔十二宮を定めた頃には秋分の日地球から太陽を望むと略天秤星座に當つたので秋分をもつて太陽天秤

宮に入ると云つて居たが、今から二千年前希臘のヒッパークスは晝夜平分の日に太陽が天球の上に見える位置即ち秋分點は少しづつ西の方へ變つて行くといふ事を發見した。今日では秋分の太陽は處女宮の西のはづれに近い處迄動いて來た、従つてもとは同名の星座に配してあつた十二宮は同名の星座と合はなくなつて來たのである。秋分點或は春分點が天を一廻りして舊位に歸る迄には二萬五六千年の星霜を経ねばならぬ。今から一萬二三十年の子孫の世には北極はとんでもない天の河のはづれを向いて、七夕の星が春見えるやうな事になる。此んな變化の起る譯は地球の自轉の軸が獨樂の軸と同じやうに徐々に味噌摺り運動をやる爲である。

(明治四十一年九月二十六日、東京朝日新聞)

六

霧

霧の出來方には色々ある。夜地面に近い空氣が段々に冷えて來る爲に水蒸氣が細かい滴になつて空中に浮遊すれば即ち霧である。又濕氣を帯びた温かい風が森や山腹の冷い處に觸れる場合や黒潮と親潮が會うて温かい空氣と冷い空氣が混する場合などにも起る。いづれにしても空中の水蒸氣が凝つて水滴となつたもので實質に於ては雲と少しも異つて居らぬ。此滴が大きくなれば雨である。霧の滴の大きさは色々あるが直徑大凡一分の百分一位のもので一滴毎に凝結の中心となるべき核をもつて居る。此核となるものは極微な塵埃や又物理學者がイオンと稱へて顯微鏡でも見えぬしかも其れ／＼電氣を帯びた微分子である。滴が餘り細かいから空氣の摩擦に支へられて

容易に地に落ちず空中に浮かんで居る。野山の霧は消え易いに反して市街の霧が消散し難いのは水滴の核になる塵の差違から起るといふ事である。霧で有名なはロンドンで、石炭や煤の粉交りだから特別な不快な色をして居る。そして此霧は市の上に限られて少し市外へ出れば無くなる。

つまり市中の工場や住家から立昇る煙が霧の核を多量に供給して居る爲であらう。此霧を散らせる爲に大砲などを發火して試験をして居る。市街の煤煙と同様に火山の煙も霧の發生を助けるものである。もう一つ霧で有名なのはニューソアウンドランド島の近海で、此處は暖流と寒流の出會ふ爲に春から夏へかけては霧が深くて航海が危険である。三十七八年の戰役に我が艦隊を悩ました濛氣も此從兄弟のやうなものであらう。又船乗の恐れる海坊主といふのは霧の濃いかたまりだといふ説がある。兎に角霧は航海には厄介なもので、此障害を防ぐ爲に霧笛、霧砲などいふものが色々工夫された。(明治四十一年九月三十日、東京朝日新聞)

七

霧の海

野原に下りた霧の渺々として海の如く見ゆるをいふ。獨逸には此れに相當して *Nebelmeer* といふ字がある。佛國でも *une mer de brouillard* といふ語がある。

霧の筈

霧は「切り」で、立ち切る意なりとの説がある。霧が物を障ぎる事は東西を通じて詩にも歌にもいろ／＼に云ひ現されて居るが、或學者は霧が視界を障ぎる距離を詳しく調べて見た。其人の説によれば視力の及ぶ距離は霧の滴の直徑に比例し、空氣の一定容積中に含まるゝ水の量に反比

例する。早くいへば霧が細かくて濃い程遠くが見えぬのである。先づ普通山中などで出會ふ霧では百歩の外は見えぬものと思へばよい。英語に「霧の堤」といふ語があるが、此れは障ぎるといふ意味よりは寧ろ海上などで霧が水平線に堤の様に下りて陸と見違へるやうなのをいふさうである。

霧の香

古書には「霧に匂ひのあるものなり云々」とあるが水滴許りでは香のある筈はない。按ずるに霧の凝結する核となる塵埃中にはいろ／＼香や臭のあるものもあつて此れが鼻感を刺戟する場合があるのでさう云つたものではあるまいか。實際松山の霧は松の香がして火山の霧は硫黄臭い。しかし「霧不斷の香をたく」といふのは香煙に見立てた眼の感で鼻の感ではあるまい。

（明治四十一年十月一日、東京朝日新聞）

八

火 桶、火 鉢

金屬や陶器のは火を入れると周圍が熱くて觸はれなくなるが木製のだとそんな事はない。此れはつまり金屬陶器木材等の傳熱率の大小による。此の三者の内で木材が一番熱を傳へ悪いから假令内側は焦る程熱くなつても外迄は熱が届かぬのである。灰には石灰や土灰をも用ひるが普通は藁灰である。藁を燃した屑にはまだ大分に炭素が残つて黒い色をして居るが火鉢に入れておくと此の灰は段々に燃えて灰ばかり残る。灰の成分は主に種々の輕金屬の酸化物で、就中水に溶ける分は強いアルカリ性で所謂灰汁になる。灰の火鉢に於ける效用は強い炭火を容器に密接させぬ事や炭をのせる臺になる事の他に、炭が急に燃えるのを防ぎ、又熱の直接に空氣へ放散するのを一

部其中に貯へて置く事である。炭の活け方には色々あるが、要するに炭を並べて真中に縦穴を作り穴の下の方に横穴を作れば全體が丁度ストーヴの煙突と同じ作用をして空氣の流通を促し炭の燃えるのを助ける譯になる。炭火から出る炭酸瓦斯は熱した空氣と一緒に天井へ上り障子の紙を透して外へ出るから日本の家屋ではさう恐ろしい害はない。又炭火の中で炭酸瓦斯が還元して一酸化炭素といふ恐ろしい毒瓦斯を作る事はあるが、此れは大抵青い焰を上げて燃えてしまふ。

(明治四十二年十一月十一日、東京朝日新聞)

九

炭

木材を蒸焼にすると大抵の有機物は分解して一部は瓦斯になつて逃げ出し、残つたのは純粹な炭素と灰分とが主なものである、此れが即ち木炭である。質の粗密によつて或は燃え切り易いものあれば、燃えにくく消え易いものもある。いづれも内部には無數な細かい穴があつて其間に多量の瓦斯を吸収する性質がある、炭が臭氣止めに使はれるのは此の爲である。近頃檳椰子の炭を使つて極寒迄冷した空氣を吸はせ眞空を作る事も發明された。又炭は溶液の中にある有機性の色素を吸収する性質がある、殊に黓炭或は骨炭が此れに適して居るので砂糖の色を抜く事などに使はれる。コークスは石炭を蒸焼にした炭だ、火力が強いが燃えつきにくい。近來電氣の應用が盛に

なるにつれて色々の事に炭を使ふ、白熱電燈の細い線も炭、アーク燈の中の光る棒も炭である、電話機の受話口の中の最も要なるものは炭でこしらへた丸薬の様なものである。

白炭

小枝に石灰を塗つて焼いた炭である。黒い炭の中に交ぜて炭取を飾り爐の中を飾る。焼けると眞白に光つて美しい。瓦斯の焰を石灰に吹きつけて光らせるのはドラモンド燈であるが、白炭の強い光を喜んだ昔の人は偶然に一種のドラモンド燈を知つて居た譯である。

埋火

炭火を灰で埋めれば酸素の供給が乏しくなるから燃えにくくなつて永く保つて居る。しかし終には燃えてしまふのは空氣が少しづつ中を流通して居る證據である。

(明治四十一年十一月十八日、東京朝日新聞)

話
の
種

給仕人は電氣

今春米國モンタナの工科大学で卒業生の爲に祝宴を開いた時、ボーイの代りに電氣を使つて御馳走した。一列に並へた食卓の真中に二條のレールを据ゑ付け、此上を御馳走を満載した可愛らしい電車が徐々と進行する。卓の兩側に陣取つた御客様の前に來る毎に、宜しく召上れと停車する。此給仕車の進退を食卓の片隅でやつて居た主人役は、其學校の教授某先生であつたと云ふ話である。

磁石に感ぜぬ鐵の合金

一に一を加へて二になるのは當り前だが、白い物と白い物を合せれば必ずしも白くなると限らぬ。合金などの性質も一般に其組成金屬の性質から推して知られぬ妙な事がある。例へば普通金屬中で最も磁石に感じ易いものは鐵とニッケルだが、不思議な事には鐵を七十七、ニッケルを二十三の割合に交ぜて作つた合金は常溫では殆んど磁石に感じない。ハイカラ同志が結婚して急に世帯染みたと云ふ譯でもあるまいが、兎に角此不思議な合金を航海の方に應用する事になつた。一體近來の汽船には鐵を多量に使用する爲動もすれば船體の鐵材が船の生命——羅針盤の磁石に感じて多少の誤差を起させる。さればと云つて鐵の代りに他の金屬を用ひては高くなる。此れには前述の二十三プロセントニッケル鋼を羅針盤の近傍必要の箇所に使つたらよいと云ふので、目下ブレメンで新造中の船には此れを採用する筈になつて居る。

(明治四十年九月三日、東京朝日新聞)

二
罪人を發見する器械

近頃サイコメーター即ち測心器とでも名くべき器械を作つた人がある。其人の説によると、人體に適度な弱い電流を通し、此れを鋭敏な電流計に接続して置くと、其人の心の状態によつて電流の強さが變り電流計に感じる。非常に驚いたり、又恐れたり、著しい心の劇動があると、其爲に筋肉や血行に急變を起し、即座に電流が變るから電流計の鏡が著しく動く。此事を利用して重罪嫌疑者の審問に使はうと云ふのが所謂測心器の目的であるさうな。先づ嫌疑者の兩の手に器械の電極をシツカリ握らせて置いて、色々の問を掛ける、其内にギツクリ胸にこたへる事があると器械の鏡から反射する光線がビクリと動く。いくら平氣を粧うて胡麻化さうとしても駄目だとい

ふ事である。此器械がいよ／＼成效するかどうかは未だ判らぬが兎に角面白い發明である。もし早く此器械が出来て居て而して男三郎の審問などに使つたら面白かつたらうに。

電氣療法のみま／＼

強い電光で皮膚病、殊に狼瘡などを治す所謂フインゼン療法は數年前から行はれて居る。又エックス線で照して皮膚や血液の病を癒す事も往々あるが、しかし此線の爲に癌腫を生じた例があるから注意を要するとの事。次に電氣浴の新しいやり方は鹽四つに四肢を別々に入れ電氣を通すので心臓病や痛風などに好いと云ふ。又強い電光に全身を浴するとトルコ風呂よりも藥になるさうである。次に一寸耳新しいのは露西亞の某醫師が患者の咽喉の中へ紫色の電燈を點じて喉頭の病を治した事である。其他中耳や眼の治療にも電燈を用ひる事があるさうな。次には痛みなしに齒を抜く爲にテストラ電流を用ひる事。此テストラ電流と云ふのは非常に高壓なそして非常に頻繁な交番電流であるが、此れを局部に通すと一時其處が麻痺して仕舞ふ、其間に手早く引抜いてしまふと云ふ趣向で、此法は他の外科手術にも應用される事と思ふ。次には電氣按摩器械、此れは以前から我邦へも渡つて居る。槌の様な形をした物の中に小さい電動機モートルがあつて此れが回轉すると槌

がブル／＼ふるふる、そこで槌の頭を肩なり腰なり、すきな處へ當てれば、好い工合に按摩が出来る。と云ふ仕掛である。

(明治四十年九月四日、東京朝日新聞)

火災と電気

燈用としての瓦斯と電気と、どちらが火事を起し易いかと云ふ事は議論の種になつて居るが、近頃新しい統計によると、電気から起るのが〇・一五乃至〇・二〇プロセント、瓦斯から起る方が〇・二三乃至〇・四〇プロセントだと云ふ。即ち瓦斯の方が少し悪い事になつて居る。

航海と無線電信

遠洋航海の途中で船の位置を知る爲に、正確な時計を要するは誰も知る通り。しかるに長い航海の間にはどんな良い時計クロノメーターでも多少の誤差を生ずるのは免れ難い。此不都合をなくするには陸

上の天文臺で定めた正確な時刻を無線電信で海上の船に毎朝報じ時計の誤りを正す様にすればよいと云ふので、今度加奈太政府では此れを實行する事になつたさうな。

肉類の中の結核

獸肉中に結核の有無を見るには從來唯此れを切開して吟味するより外に手段はなかつたが、近頃或人がX光線で透して見てすぐに病所の有無を知る事を發見した。

カナリヤの雛

近頃英國で、或學者が二軒の小鳥屋に就いてカナリヤが生む雛鳥の雌雄の数を調べて見た處、甲の家では雌百に對し雄が七十七であつたが、之に反して乙の鳥屋では雌百に對する雄が三百五十三の大多數を占めて居た。そこで甲の家のカナリヤを一番選んで乙の家に移し、其後に孵化した雛について、雌雄の割合如何と調べて見ると、面白い事には乙の家に來て以來は雄を多く生む様になつた。此れから考へると、生れる雛の雌雄いづれが多いかと云ふ事は其親鳥の食餌や鳥屋の溫度其他の周圍の狀況でさまるものだと云ふ事が分る。もし他の諸動物に就いても同様の事が

あるかないか調べて見たら面白いだらう。

指頭の渦紋

人間の指の渦紋の形は生れ落ちてから死ぬる迄變らないもの故、人間の見覚えをするには最もよい目印である。それで現に罪人などの指形を紙に寫して置いて再犯の時の参考にする事がある。此れならば額のほくろや瘤などよりは確な事は勿論であらう。そこで十本の指の紋が悉く符合する様なものが二人以上あるだらうかと云ふに、或數學者の計算した結果によればザツト六十四萬億以上の人間を集めなければ同じ指の人は二人とはあるまいと云ふ事である。世界の人口悉く皆でも僅に二十億足らずだから、先づ同じ人はないと見てよからう。今に指形を印に親子の再會など、云ふ新聞種が出来るかも知れぬ。

(明治四十年九月七日、東京朝日新聞)

脳髓の重さ

四

佛國の某學者が、種々の動物に就いて、其全體量と腦髓の重量との比例を調べて見た。其結果によれば、比較的重い腦をもつて居るものは人間の外に手長猿、鸚鵡、はつか鼠、駒鳥などで、此等のものゝ腦は體量の二十分の一乃至百分の一位の目方である。百分の一近邊のものは狸々、鹿、猫など、それから下つて百分の一より千分の一の間にあるのが麒麟、象、羚羊、獅子、袋鼠、鷺、白鳥、雉、鼠、蛙、鯉など、たほ一層下つて千分の一より一萬分の一の間には海馬、鯨、鰐、海鰻、章魚などがひかへて居る。それで現世界に於ける動物の腦の目方は體量の二十分の一以下萬分の一の間にあるものと思へばよい、尤も畸形兒などでは大きな頭のもあるがさう云ふのは別

である。右の結果で鸚鵡が比較的重い脳をもつて居る事や、象などが鼠や蛙と相伍してゐるのは一寸面白い。

野獸の寫眞

動物園で色々の野獸の形狀だけは見る事が出来ても、其天然の棲所でどんな舉動をして居るか
と云ふ事は分らぬ。殊に人目を嫌つて逃げるものや、夜間のみ出あるく獸の天眞の態度は猶更知
り難い。が、近頃自働的寫眞器械を森や藪に仕掛けて野獸自身に寫眞を撮らせた人がある。此れ
には寫眞器械から小さい糸を前方に張り、獸が此れに觸るゝと同時に器械のシャッターが開いて
種板に寫る仕掛がしてある。又夜間ならば糸に觸れると點火器の引金が落ち、マグネシウムがパ
ツと燃え上つて、動物は驚いて遁げる間のない中にカメラに寫される。かうして撮つた寫眞を現
像する時には、どんな獸が寫つてゐるか豫め分つて居ぬだけ非常に楽しみなものださうな。

談話に費す勞力

人間が談話をしたり、歌つたり、演説したりする時には、肺の中の空氣を若干の壓力で押し出

して居るか、此爲に要する機械的の仕事はどれだけであるか、平たく云へば一時間しやべるにはどれだけの努力をするかと云ふ事を測定した人がある。此結果に據れば、廣い室で演説する場合ならば、一時間につき一四四乃至二八八キログラムメートルの仕事をする。もう少し分り易く換算すれば、一秒毎に三十五乃至七十匁位のを一尺位持ち上げるのと殆んど同じ位である。普通の對話ならば此五分の一位なものだと云ふ。但し演壇をあちこち歩き廻つたり、拳固を振りまはす努力は此外であるのは勿論の事だ。

(明治四十年九月十五日、東京朝日新聞)

五

土を食ふ人間

各種の土や灰を食ふ人間は餘り珍しくない。我邦でも昔から壁土や土器をかじる子供があるが、他人種でも矢張胃病やヒステリー或は悪阻の爲に土を食ひたがる者が往々あるさうである。南亞米利加の一部では土人のみか白人迄も病的に土を嗜み、子供などは夜中に壁の泥や漆喰を剝して食ふから、其れを制する爲假面を着せて寝かせるさうである。以上は病的な例であるが、又一方では一種の風味の爲に食用にする事がある。昔羅馬人は穀物に混じてプテオリと云ふ土地から出る白堊を食つたと云ふ。ボルネオ邊では菓子に粘土を使ふ。ボリビアでは馬鈴薯に粘土のソースをかけて食ふ。ペルシアでも鹽氣のある土を食ふ。それからセネガル地方では米に土を交せて食

ふが、此れは單に腹を膨らせる爲で味がよい爲ではないらしい。印度では饑饉の時灰や土を木の皮に交せて間に合せる事がある。又醫藥として土を用いた例はアルメニアや西班牙にもある。それから魔法を使ふ爲に土を呑む事もあるさうである。土を食ふ分量はもとより一定せぬが、オットマック土人は一日に半ポンドも食ふと云ふ。食ひ方は生で食ふのも焼いて食ふのもあり、又粉のまゝで食ふ事もあれば、人の形、動物の形或は皿のやうな形にこねてかじる事もあると云ふ話である。

航海の未來

近頃英國の製鐵所で所長のサー・ヒュー・ベル氏が愉快な未來記めいた演説をやつた。即ち遠からざる將來に於て、船には蒸氣機關のやうな重い場ふさげなものは入らなくなり、ナイアガラ邊で起した強大な電力を無線電信で洋上の船に送り、輕少な機械で巨船を動かすやうな事になるだらう、今日こんな話は餘りに夢の様に聞えるかも知れぬが過去百年間の歴史に鑑みればその位な事は出来る筈だと云つたと聞き及ぶ。

(明治四十年九月十七日、東京朝日新聞)

六

結核の初期診断法

一時有名であつたコツホのツベルクリンは、其後唯結核病の診断にのみ用ひられて居た、即ち結核の疑ある患者に此れを注射すると、もしさうであれば發熱などの反應を起すからわかると云ふのであつた。然るに今度佛國のカルメットと云ふ人の發表した所に據ると、酒精で沈澱させたツベルクリンの一プロセント溶液を眼に點すると、健康體ならば何の異状も起らぬが、少しでも結核のあるものならば、二十四時間内に充血して紅くなると云ふ事である。千人近くの患者について試験をして此事を確めたが、或場合殊に小兒などでは、他の方法でどうしても知れなかつた結核の存在を此法で見付けたと稱して居る。(明治四十年九月二十六日、東京朝日新聞)

七

アフリカの杜鵑

アフリカに、杜鵑の一種で俗名を一蜂蜜の案内者 と稱する鳥が居る。蜜蜂の巢の所在を人に知らせるからかう云ふ名が付いて居るのださうな。然るに近頃或動物學者の調べた處によれば、此鳥は普通の杜鵑の様に、他の鳥の巢へ自分の卵を産んで孵化させるのみならず、一層性の悪い事をする。即ち巢の中にある他鳥の卵、云はゞ我子の乳兄弟を嘴で突破つて殺してしまふさうである。それが萬一僥倖に助かつて孵化しても、親に似て性の悪い杜鵑の雛鳥に鋭い嘴で啄き出されてしまふと云ふ。

家の貧富と子供の體格

近頃蘇格蘭の文部省でグラスゴー府の小學兒童の體格検査をした結果を發表した。此報告によれば親が貧しくて唯一室だけに住つて居るものは、體量も身長も最劣等であるが、二室持つて居る者は此れよりは少し良く、三室、四室と増すに従つて段々良くなる。例へば男兒だけに就いて見ても、二室のものゝ子は四室の者の子に比べて平均十一ポンド七分軽く、四・七吋丈が低い。女の兒の方は此れよりも一層此差が大きいやうである。つまり貧家の子供は自然に榮養其他の缺乏から體格が悪くなるのだらう。

(明治四十年九月二十八日、東京朝日新聞)

八

煙の中で呼吸する器械

佛國のチソーと云ふ人が、煙や硫氣其他の毒瓦斯の中で仕事をする人の爲に呼吸器を作つて發表した。背囊の様な箱から管が二本出て口と鼻とに連絡し、巧に瓣の作用で、一方から新しい空氣を送り、他方に呼氣を出すやうになつて居る。一旦吸うて出した汚れた空氣は、背囊に歸つて苛性加里で清淨にされ、再び用ひられる。なほ不足な空氣は箱の一部に壓搾した酸素が必要に應じて少しづつ補はれる仕掛になつて居る。此器を用ふれば五時間位毒瓦斯の中で働いても差支へがないと云ふ事である。(明治四十年九月二十九日、東京朝日新聞)

九

心臓の鼓動

犢から取つた血清を水に浸して置くと其中の鹽分が段々に脱けて來る。遂に○・六プロセント位になつたのを蛙或は龜の心臓に注入すると、其の心臓の鼓動が全く止つて一時間位は動かぬで居る。此の鼓動の休止中何か他から刺戟を與へると、一回或は數回強く鼓動して又靜止する。此等の試験の結果から考へると心臓の鼓動するのは鹽の如き化學的の刺戟物が心臓の神經に作用する爲で、此種の刺戟がなければ自ら鼓動する事は出來ぬだらうと云ふ。此れは或學者の新説である。

ある。(明治四十年九月三十日、東京朝日新聞)

十

新奇な風見鴉

此れは俱樂部或は宿屋の室内に粧飾用を兼ねて据置き、時々刻々の風の方向を知らせる器械である。一見置時計の様な形をして居るが、其前面の圓盤には羅針盤と同じやうに方角を誌し、其周圍には小さい豆電燈が一行に輪をなして並んで居る。もし北風ならば盤の北と誌した針のさきのランプが光つて居る。南ならば南、西北なら西北といつても風向に應じて盤の豆ランプが點るのである。内部の仕掛は簡單なもので唯屋根の上に備へた風見鴉から針金を引き電池一個を接続すればよい。店先きに備へ付けて人寄せの廣告などに使つたら妙だらう。

(明治四十年十月一日、東京朝日新聞)

磁力起重機

強い電磁石を使つて重い鐵片などを吸付けて吊し上げ、汽車や汽船の荷上げや荷積みをする機械が近來處々で用ひられる。今度米國の某鐵道會社で試験した結果によれば、人夫が六人掛りで半日にやつとする仕事を、此機械でやれば四人で僅か一時間に片付けてしまふさうである。

米國の電話

北米合衆國の電話に關する最近の統計を見ると、國柄だけに盛な勢を示して居る。千九百〇三年におけると三年後の千九百〇六年即ち昨年と暮に於けると、電話機の数も電線の延長もザツト

倍になつて居る。即ち個數の三百八十萬弱が七百十萬餘になり、電線の三百萬哩足らずが六百萬餘になつて居る。加入者の數は全人口に割り當てると廿八人に一人となる。一日中の通話の回數が驚く勿れ千六百九十四萬とある。

(明治四十年十月二日、東京朝日新聞)

風車の利用

風の力の大きい事は云ふ迄もない。此力を原動力に利用して各種の作業をすれば利益があるだらうと云ふ事はよく人の考へる事だが、唯一つ困る事は、風は至つて気まぐれ者で、思ふ時に思ふやうに吹いてくれぬので、始終きまつた馬力を要する器械には一寸使ひにくい。しかしこれには蓄電池と云ふ都合のよいものがあつて、風の力を電氣の力に變じて蓄へ、必要に應じて勝手に使ふ事が出来るのである。現に英國バーミンガムでは十一年前から風車で電燈を點じて居る人がある。其風車は直徑三十五呎で此れを五十呎の櫓の上に据付け、十六燭の電燈二百個を點する外に、なほ五馬力のモートル三個を運轉して居るが、未だ曾て停電などを起さぬと云ふ事である。

石炭や水力を得難い土地では風車を用ひた方が石油機関よりは利益だと云ふ。

(明治四十年十月三日、東京朝日新聞)

十三

霧中の汽車信號

鐵道線路の傍に亘人の如く直立し或は片手或は兩手を擴げて線路の安否を知らせる普通の信號標は、通常の天氣ならば晝夜の別なく有效であるが、唯霧が掛つて數歩の外は見え分かぬやうな日には何の役にも立たぬ。此の不便と危險を防ぐ爲、近頃米國大西鐵道で採用する發音信號機と云ふのは簡単な仕掛けであるが數ヶ月間の試験によつて有效な事が確められた。危險の時には汽笛、安全の場合には鐘を鳴らす事になつて居る。(明治四十年十月四日、東京朝日新聞)

十四

馬鈴薯の皮を剥く器械

大樽に一杯の馬鈴薯の皮を僅に數分間で綺麗に剥いてしまふと云ふ器械が近頃米國で發明された。器械の桶の中に馬鈴薯を詰め込んで半馬力のモートルを運轉させると、見る間に外皮は剥け落ち清淨に洗はれて直ちに料理の出来るやうになる。米國の海軍では此器械を四十臺使つて居るが、水夫二三人掛りで十五分間も運轉させると一日の食糧位は樂に出来るといふ事である。馬鈴薯のみならず蕪や人參にも應用が出来るさうだから我邦でも軍隊の炊事などに使へば便利かと思はれる。如何にも米國人の拵らへさうな器械である。記者が此器械の事を近着の科學雜誌で讀んだ後、場末の町を散歩して居たら、とある米屋の店先で小僧がズツクの袋に豆かなにか入れたの

を一生懸命汗を垂して振つて居た。随分な對照コントラストだと其時に一寸をかしかつた。

(明治四十年十月八日、東京朝日新聞)

十五

奇妙な病氣

始終X光線を使つて居る人は往々不思議な恐ろしい病氣に罹るさうである。此病の爲に死んだ人は米國だけで既に四人ある。第一に斃れたのが有名なエジソンの助手某。次にはボストンの醫師某。第三が桑港の一婦人。第四に近頃やられたのはロチエスターの外科醫ウィーゲル博士だと云ふ。此人は始めに其右手と左の指三本を切斷したがなほ駄目で、次には右肩より胸にかけて肉を取り去つたが、それでも遂に無効であつたと云ふ。此の恐ろしい病氣は原因も全く分らず治療の方法も知れぬとの事である。(明治四十年十月九日、東京朝日新聞)

十六

腦髓の保存法

解剖學や人類學の參考品として腦を保存する方法を詳しく研究した學者の説に従へば、普通の腦を漬けて置く液にはフォルマリンを三、蒸餾水を四五乃至二五、酒精を五二乃至七五の割合に交ぜたものが宜い、そして腦の大きい程水を少く酒精の方を割合に多くするがよいといふ事である。(明治四十年十月十一日、東京朝日新聞)

十七

船内の消毒

船中で鼠を驅り、又消毒をする爲に亞硫酸瓦斯を用ふる事があるが、其效驗に關する詳細な調査の結果に據れば、鼠や害蟲の類は僅に〇・五プロセントの亞硫酸を含む空氣で二時間も燻せば絶滅する事が出来る。しかし積荷の奥底迄行渡らせる爲には約三プロセント位にしなければならぬ、此れならば大抵の病菌も死ぬると云ふ事である。織物類、金屬器具等は此瓦斯には害せられぬが硫黄を燃して亞硫酸を發生せしめる際硫酸の瓦斯も伴つて出るから此れが少々損害を及ぼす。肉類、菓物、蔬菜の類も亦多少の損害を免れぬと云ふ。(明治四十年十月十三日、東京朝日新聞)

優しい返答

シカゴ市の或る青年紳士が一日電話をかけようとしたが、どういふ都合であつたか接続が大變手間が取れるので紳士は痲癢を起して交換手を怒鳴りつけた。その相手の交換手はイリノイ州出の女であつたが非常に優しい聲で可憐な返答をしたその聲が妙に紳士の心を動かし、其れが縁となつてとう／＼日出度く結婚する事となつた。此れは嘘の様な話だが事實である。

長さ一哩の手紙

米國の或る水兵が電信用の紐紙に細々と書いた手紙を其友に送つた。其長さ一哩餘で此れを書

き上げるのに二週間かゝつたと云ふ。恐らく開闢以來の長い手紙であらう。こんな手紙を貰うた人こそ災難だつたらう。

(明治四十年十月十四日、東京朝日新聞)

十九

植物の生長

倫敦の王立植物園で植物の生長に有效或は必要な諸種の條件に就いて調査した結果の報告書によれば、第一に強烈な弧燈より出づる紫外光線、第二には根より幹に不斷に通ふ電氣、第三には華氏七十乃至八十度に於て適當の濕氣と炭酸瓦斯の供給、第四には理想的の窒素肥料、第五には根に充分なる水の供給、此の五つの條件が揃へば植物は理想的に生長するとの事である。そして面白い事には此等の條件は唯石炭さへあれば殆んど凡て充される。即ち石炭を燃して發電機も動かされる。熱も炭酸も濕氣も出来る。窒素肥料の硫酸アムモニアも亦石炭から採ることが出来るといふ話である。其石炭なるものは太古の植物から生じたものと云ふ事を考へると猶更面白い。

(明治四十年十月十五日、東京朝日新聞)

二十

ボートレースに無線電話

今年の七月、北米の大湖エリーの水上で端艇競漕のあつた時、其時々刻々の景況を陸上に報ずる爲テルマと名くる小蒸氣船に無線電話機を載せて現場に臨ませた。此れが恐らく無線電話の實用された最初の例であらう。其成績は豫想外に良かった。話聲を聞いて相手が誰だかと云ふ事さへ知れたさうである。船は十八噸でアンテナを張つた帆柱が低かつたにも拘はらず四哩の距離で通話自在であつたといふ。(明治四十年十月十六日、東京朝日新聞)

日本の舞ひ鼠

子供の楽しみに飼ふはつか鼠に一寸歩いてはクル／＼まはり又歩いては舞ふ所謂舞ひ鼠と云ふのがある。あの舞ふのは何故かと調べて見ると、内耳の一部をなして居る三半規管の構造が不完全な爲、始終に眩惑を起すからだと言ふ事である。さう聞けば可哀相で飼ふのは厭になる。人間でも内耳の病患で三半規管に故障が起るとグラ／＼して直立歩行が出来なくなる。鼓膜の破れた人が耳を洗ふ時眩暈を感じたり、又健全な者でも少時間グル／＼舞うた後には平均を失うて倒れたりするのは皆此の三半規管を刺戟する爲だと云ふ。船に酔ふのも矢張同様な原因に歸する事が出来る。(明治四十年十月十七日、東京朝日新聞)

二十二

護謨の新原料

近頃葡國領西部阿弗利加で發見された一種の植物の球根は丁度蕪菁の様な恰好をして居るが、其の液汁中には護謨を含み、此れを壓搾して酒精で凝らせると二分の一プロセント位のゴムが取れる。栽培後二年たてば一エーカーの地面につき百八十斤位の收穫がある見込だといふ。

(明治四十年十月十九日、東京朝日新聞)

章魚と烏賊との研究

(一) 章魚の生殖作用

今年の英國科學會ブリチッシュサイエンスの總會でホイルと云ふ動物學者が講演した章魚や烏賊の類に關する研究の結果中で吾々素人にも面白く思はれる二三の事實を夜長の話柄にもと受け賣をして見よう。

俗に章魚船と名けられ、水面に浮んで風のまに／＼帆かけて走る章魚の一種がある。其雌の體內で外套膜腔の中に奇妙な細長い蟲の様なものが見出された事があるので、昔は一種の寄生蟲だらうと考へられて居た。處が段々研究して見ると、驚くべし、此れは生殖作用を遂げる爲、雄の足の一部が子種を運ぶ爲に脱離し、雌の體内に侵入したものだと言ふ事がわかつた。それ以來次

第に研究を進めて見ると、章魚船には限らず一般に頭足類の動物中には此種の生殖法が特有なものと云ふ事が知れて來た。尤も種類によつては雄の足を脱離しなくつて其代り雄は六本の足で相手を押さへ二本の足を外套膜の中に挿し込む、其時雌は呼吸を止められるから必死になつて逃出さうと藻搔くさうである。蓋し一奇觀であらうと想像される。足の脱離する方の種類では、雄が自身に落ちた足を持つて行くか、或は又足が自働的に動いて行くか、其處迄はまだ研究が届かぬさうである。(明治四十年十月二十日、東京朝日新聞)

(二) 光を放つ烏賊

次に面白いのは海底で光を放つ烏賊の話である。一體頭足類の動物中で多少の光を放つものが三十種以上もある。中にも非常な深海底から発見されたソーマトランパスと名けるものゝ如きは其光彩の美實に寶石をはめた様だと云ふ。例へば眼の邊には紺青色と眞珠色の光を放ち、腹部にはルビー色、雪白色及び空氣の光斑を具へて居る。かう云ふ怪物が眞暗な深海底の底を照して游泳する處も亦一奇觀であらうと思はれる。そこで此種の動物の發光器はどんな仕掛で出來て居るものだらうと色々研究した結果、二種の區別が知れた。即ち一種のものでは光を放つ液體を分泌す

る腺を備へ、他の種類では動物の組織の一部が発光するのださうである。後者に屬する發光器には此れに附屬したレンズや反射鏡の如きものを備へた極めて精巧なものもあると云ふ話で、又發光器の中には體の内腔にあつて透明な肉を通して光を放つものもあるさうである。前に述べたソーマトランパスなどでは總計二十二個の發光器を分類すると凡そ十種類の各々異つた仕掛で出來て居るさうな。そして此等の發光器は大抵皆腹の方ばかりにあるので、深海の底を照しながら食餌を搜し歩くには都合のよい探海燈の用をするだらうと思はれる。

明治四十年十月二十一日、東京朝日新聞

(三) 熱の無い光線

如何なる作用で光を發するかといふ事はまだよく分らぬ。しかし一つ注意すべき事は、此種の發光器は大抵光線を出すばかりで熱を出さぬ。此れに反して人工的光ではいつも熱が伴うて起る。六かしく云へば機械力なり電氣なり又化學作用なり如何なる方法によるも熱くない光を作る事は出來ぬ。つまり使つたエネルギーの一部は必ず熱に變じて消費される、即ちそれだけ餘計な勢力を損して居る。しかるに造物者の手製の深海のラムプは此の如く理想的に經濟的にしかも美術的に出來て居るのである。(明治四十年十月二十二日、東京朝日新聞)

二十四

水雷破壊機の發明

今度米國政府の爲にアック・スタンソーパーンと云ふ佛國人が敷設水雷を破壊する機械を發明し、實地の試験をしたが好結果を得たと云ふ。しかし其機械の構造は勿論一切を極く祕密にして居るから分らぬが、兎に角磁力を利用したもので、此れを載せた船の向ふ處一定の距離にある沈設水雷を悉く爆發して無効にするさうである。(明治四十年十月二十五日、東京朝日新聞)

二十五

火星の近狀

今年の夏、火星が我が地球に最も接近した位置に來て居た頃、米國のロウエル天文臺では此好機會を利用して種々の觀測をした。其結果此星の表面を縦横に走つて居る運河の様なもの、南北兩極の氷塊の消長につれて隱見する有様が仔細に知れた。其模様を見ると火星の上にはどうしても智能を備へた人類の如きものが棲息して居ると考へざるを得ないと該天文臺長のロウエル氏は斷言して居る。又同臺からは一隊の學者をアンデス山頂に派遣して火星の寫眞を撮らせたさうであるから、定めて有益な知識を斯學の上に齎す事であらう。

(明治四十年十月二十六日、東京朝日新聞)

二十六

風向と漁業

英國西南部の海岸で年々にとれる魚の總數を漁夫の數に割り當て、統計して見ると、漁夫一人の漁する數が年によつて著しくちがふ。其の原因を詳しく調査して見ると之は全く其の年々の平均の風向によるものだと言ふ事が知れた。即ち風が多く沖の方へ吹く年は海岸の潮流も陸を遠く距れ、魚類の卵は逃げてしまふので其後は不漁がつゞく。此れに反して風が潮流を陸近くへ吹き送れば自然に漁が増すのださうである。(明治四十年十月二十七日、東京朝日新聞)

二十七

蟻の知覺

蟻が溫度の變化に對してどれだけの感覺力をもつて居るかと云ふ事を調べた人の説によると、大抵の蟻は攝氏の○・五度位な僅な變化でも識別するさうである。又人間の眼には見えぬ紫外光線でもよく感じ、此光を當てると嫌つて逃げると云つて居る。

恐水病の豫防

昨年中巴里のパストゥール免疫所で狂犬に嚙まれた人の爲に恐水病豫防の注射を行うた件數が七百七十三、其中で不幸にして該病の爲に死んだのは僅に二人しかない。即ち恐水病と云ふもの

は殆んど全く豫防する事が出来ると云つてもよい。

(明治四十年十月二十八日、東京朝日新聞)

癌腫の研究

英國では帝室の保護の下に癌の研究のみをやつて居る所がある。其基本金の現額は十一萬八千餘磅で、其中四萬磅は某富豪が金婚式の際に寄附したさうである。此處の所長のバシユフォード博士が近頃報告した處に據れば癌の療法と稱するものは色々あるが、いづれも餘り確實な效驗はない。評判のあつたトリプシンも餘りきかぬ。今日の處矢張外科手術で患部を取り去る外はあるまいと云ふ事である。(明治四十年十月二十九日、東京朝日新聞)

て五プロセントの稀硫酸液に入れ大きな桶で電気分解をやる。陽極には大袋に亞鉛を入れたものを用ひ、陰極には銅板を用ひ、二・五ボルトの電壓で千アムペアの電流を通すと陰極の方へは純銅が段々に附着し、陽極には硫酸と酸素が出て来る。一時間に一キログラムの銅を得る爲には約三馬力に當る電力を要する勘定になつて居るさうだ。此の法で得た銅は非常に純良である事は勿論である。

明治四十年十月三十日、東京朝日新聞

三十

水底信號機

霧の深い海上を航海する時には往々海岸や他船の近づいた事を知らずに居て坐礁や衝突の災を招く事がある。此れを防ぐ爲此頃行はれ始めた方法は、海岸ならば其處に繫留した燈臺船の底に鳴鐘を付け、斷えず此れを鳴らして居る。船の方では水底に仕掛けた微音機マイクロフォンで此の音を聞くと云ふ細工である。目下大西洋並に沿岸航路で此れを使用して居る燈臺船が五十六艘、汽船が二百十艘ある。英皇及び獨逸皇帝の遊船ヨットにも此の装置を備へてあるさうだ。

(明治四十年十月三十一日、東京朝日新聞)

世界一の高壓電流

米國ミシガンのマスケゴン電力會社で昨年來使用して居る高壓電流は七萬二千ボルトの高壓で蓋し世界第一と稱せられて居る。其の電線の經路九十二哩の間は近邊の樹林を切り開き、又人の近かぬ様に斷えず巡邏して居る。何しろ非常な高壓であるから漏電を防ぐ絶縁器には特別のものを用ひて居るが、それでも多少の放電が止みなくある故柱の一部が段々焦げて來るさうである。一度落雷の爲に絶縁器がこはれた時などは、電柱は強い電流の爲に卽座に焼けてしまった。此の電線に障害を與へた者は一年間の禁錮に處せらるゝと云ふ事である。

地下電車鐵道の衛生問題

地下鐵道で長い間隧道内の空氣を呼吸するのは衛生上有害ではないかといふ事を近頃紐育で調査した。隧道内の空氣中にはレールや機關の摩擦の爲に生ずる微細な鐵粉がかなりに浮游して居るが、此れは案外人體を害はないさうである。寧ろ坑内の溫度の急變が健康に悪いだらうとの事である。

(明治四十年十一月一日、東京朝日新聞)

有益な鼠

北米に産する地鼠の一種に尻尾の短いのがある。此鼠は蝸牛などを捕つて食物とし、餘つた外は貯へて置いて欲しい時に出して食ひ、穀は巢の内外に積んでおく。又作物を荒す有害な野鼠や蟲類なども捕つて食ふので農夫に取つては非常に有益なものださうな。

(明治四十年十一月八日、東京朝日新聞)

三十三

世界第一の巨船

現今世界で最大最速の汽船ルシタニア號は去る九月愛蘭のクイーンスタウンより紐育迄二千七百八十二哩の航路を五晝夜と五十四分間に、即ち一時間二十三哩〇一の速度で快走した。先年ドイチュランド號が二十三哩一五の速力を得たに比較して少々劣る様であるが、此れは途中で霧に逢うた爲だとの事である。今より二十三年の昔出来たアムプリア號と云ふ當時での巨船に比較すれば實に非常の進歩である。船の長さは五割も長くなり、噸數は三倍の餘に達し、機關の馬力は五倍に届いたが、唯速度のみは此割に増す事が困難で二割五分位しか増して居ぬ。ルシタニアは首尾の長さ七百六十呎、幅八十八呎、高さが六十呎餘と云へば随分大きなものである。排水噸數

は三萬八千噸で、一航海に要する石炭が五千噸。それから機關はタービン式で六萬八千馬力出る。千五百噸の荷物と二千二百人程の乗客の外に船員の數が八百二十七名と稱して居る。

(明治四十年十一月九日、東京朝日新聞)

三十四

北極探檢氣球隊の消息

氣球を利用して北極を探檢せんと企てたウェルマン氏の一隊は志を遂げずして去る九月那威に歸つたさうである。始めフォージェルペー島迄船で進み、其處で氣球を浮べたが生憎吹雪の風が烈しくてスピツバーゲンに吹き戻された。そこで止むを得ず瓦斯を抜き無事に地上に下るを得た。残念ながら今年は失敗に終つたが、しかし今年の實驗で此氣球が少々の風には逆つて疾走し得る事を確めたから、更に來年の夏を待つて再擧を計る筈だと云ふ。

(明治四十年十一月十日、東京朝日新聞)

三十五

氣球の競走

先々月白耳義の首府で開かれた萬國の氣球研究者の會で高價な盃を懸賞にして氣球の競走をやらせた。此競走に加はつた氣球は三十四あつたが、最長の距離に達して月桂冠を得たのは獨逸の氣球で丁度千軒を航した。其れに次ぐべき距離に達したのは瑞西のと英國のとであつたと云ふ。來年はロンドンで此會を開くとの事である。(明治四十年十一月十一日、東京朝日新聞)

三十六

獨逸の製粉研究所

獨逸人が凡ての工業の發達を計る爲に其根本たる科學的研究に注意する事は今に始めぬ事だが、今度又麵麩粉の研究所を新に設立し既設の製糖並に醸造研究所と共に三幅對を作るさうである。其設備の如き随分大きなもので、例へば其倉庫には三十萬貫に近い穀物を貯へる事が出来る。動力には電氣を用ひ、機械は最新式に依り十時間に四噸の粉を作る事が出来る。又麵麩製造部もあつて大仕掛の研究をやるやうになつて居る。此設立に際して農務省は三十萬圓程の費用を支出しなほ年々保護を與へる筈、そして獨逸の製粉組合や製麩組合等の合同で維持して行くとの事である。貯藏、製粉、製麩に關するあらゆる科學的並に實用的の研究をする外、なほ廣く民間の需

に應じて雜穀、粉、麵麩等の分析等をするさうである。
（明治四十年十一月十二日、東京朝日新聞）

三十七

露西亞の蟻

露國のカザン大學は古來有名な科學者の出た處である。近頃此處のルスツキと云ふ動物學者の著した「露西亞の蟻」と題する書の如きも斯學上有益なものださうである。初編だけ刊行されたが八百頁の大冊である。著者の調べただけでも露國全體に産する蟻の種類が三千五百もあると
の事である。(明治四十年十一月十三日、東京朝日新聞)

三十八

世界で最大のダイヤモンド

近頃トランスバル政府では其の所有に屬する世界最大の金剛石を英國皇帝に獻する事に決した。此の寶石の發見されたのは一昨年 of 正月の事であつた。プレトリアと云ふ所に近い採掘場で地下十八呎の穴から見出された。其の重量三千廿四カラット強で、從來世界第一と稱せられて居たものゝ三倍以上である。長徑四吋短徑二吋位、色は稍蒼味を帯びて居るが非常に純粹なるものださうな。此の石の結晶の形から察する所、此れは餘程巨大な金剛石の一半が缺損したものだらうと云ふ。此れを採掘したプレミアア會社社長の名を取つてクリナンダイヤモンドと命名されて居る。(明治四十年十一月十六日、東京朝日新聞)

三十九

赤茄子の傳來

洋食に用ひるトマトの來歴を調べた人の説によると、此植物は十六世紀の中頃に南米祕魯ペルーから西班牙或は葡萄牙に渡りそれから歐洲に擴がつたものである。しかし其頃は單に飾り物に使ふだけの事で栽培も餘り盛でなかつたが、十九世紀になつて後段々食用せらるゝやうになつたさうである。(明治四十年十一月十七日、東京朝日新聞)

四十

那威の夫婦匙

那威で結婚式の際に用ひる木彫の匙がある。鎖で二つの匙をつないだ様なものであるが、唯一の本の木で作るさうな。結婚の朝新郎新婦は此夫婦匙で睦しく御馳走を食ふといふ。

リウマチスと蜂の毒

蜂に刺されるとリウマチスが癒ると云ふ云傳へが英國邊で昔から行はれて居るので、其眞否を試す爲に材料を集めて居る人がある。我邦でもさう云ふ例があるかどうかどうだか御存じの方は教へて頂き度い。

(明治四十年十一月十九日、東京朝日新聞)

四十一

一種の迷信

英國デボンシャイアのある町に百二十年來營業を續けて居る牛肉屋があるが、開店の昔から今日迄店に屋號と云ふものがない。此店の先祖がどう云ふ譯だか店の名を付けなかつたが、商賣は非常に繁昌し子孫代々名無しの牛屋で通つて居る。名を付けると先代以來の幸運に障ると云ふやうな迷信から子も孫も屋號を付けなかつた爲ださうな。(明治四十年十一月二十日、東京朝日新聞)

四十二

ラヂウムの新産地

從來ラヂウムの産地と云へば殆どボヘミアに限られて居たが、此頃アルプス山で有名なシムプロン隧道附近に可也多量のラヂウムがあると云ふ事がわかつたさうな。同隧道の奥の方の地温が著しく高いのはラヂウムが發する熱の爲ではないかと云ふ説がある。

水の清淨法

近頃汚水から清水を得るのに電氣分解を用ひる法が出来た。汚水中にアルミニウムの電極を入れて電流を通ずれば、過酸化アルミニウムを生じ、此れが種々の汚物に結合して固つて仕舞ふ。

此れを一遍濾せば非常に清浄な水が得られるさうである。

(明治四十年十一月二十一日、東京朝日新聞)

四十三

長距離の急行列車

去る九月十六日、北米の大西鐵道では二百六十三哩の間を一度も停車せずに走る別仕立の三等客車を出したが、平均一時間に五十三哩の速度で首尾よく目的地に達した。こんな長距離の急行は餘り例のない事である。

海底のラムプ

近頃米國のデイオンと云ふ人が專賣特許を得た海底燈と云ふのは、港などの水底に強烈な電燈を點じて、闇の夜や霧のある時入港を容易ならしむる仕掛であるさうな。

(明治四十年十一月二十五日、東京朝日新聞)

四十四

象を馴らす事

阿弗利加のコンゴーでは象の馴致を盛にやる。近頃同地へ視察に行つた人の通信によれば、目下馴らして居る象が二十五頭で其中十九頭には種々の作業をさせて居る。雨期が来ると皆解放して森林の棲家へ歸してやるが、また飼養所へ歸つて来る。其際往々森の中から野象を連れて来る事があるが、大抵もう年を取り過ぎて居て馴らしにくいものが多いさうな。阿弗利加の象は一體脊が低く、コンゴーで馴らして居るのは肩の高さ四呎四吋位から五呎七吋位なものだと云ふ。

(明治四十年十一月二十六日、東京朝日新聞)

四十五

眼の濫用

近頃スコットと云ふ人が讀書の眼に及ぼす害について某雜誌に述べて居る。其中に次の様な事を云つて居る。「元來人類の眼は可也遠距離の物體を見る様に進化して出來て居るものであるが、近年の様に書籍や新聞雜誌などが無闇に澤山になつては一通りでも眼を通すのは中々大抵の事でない。それで眼と云ふものゝ天然の役目の外に新しいしかも不馴れな役目が増したから早晚どうしても何等かの害を生ずる様になる。」少年などには餘り必要もない讀書をさせぬ様にせねばなるまいと云ふ事である。(明治四十年十一月二十七日、東京朝日新聞)

四十六

大洋中の拾ひ物

本月十四日の本紙に横濱の人が北太平洋で鮫漁中に英文の手紙の入つた空瓶を拾うた記事が出て居たが、近着の科學雜誌を見ると次の様な事が載せてある。一ウードジョーンズと云ふ人が一昨年の暮に印度洋から空瓶を數個海中に投じ、其中に手紙を封入して誰でも此れを拾うた人は其場所と時日を通知する様に依頼してあつた。處が昨年の五月に阿弗利加のソマリの海岸で其中の一本を拾ひ上げ、又今年の七月同じ處で他の一本を拾ひ上げた。夫で印度洋の眞中から西の方へ向うた不斷の潮流がある事が知れる。云々」北太平洋のも或は此仲間でないとも限らぬから巖の寫眞でも撮つて知らしてやつたらよからうと思ふ。(明治四十年十一月二十八日、東京朝日新聞)

四十七

英國の軍用輕氣球

先月初、倫敦附近で軍用輕氣球の試乗があつた。アルダーショットからロンドン迄一時間二十四哩の速度で飛行し、聖ポールの寺院を一まはりして今度は風に逆つて進んだが、餘り風が強かつたから水晶宮の邊で地上に下つた。飛行した全距離五十哩、地面より平均七百五十呎の高さを航したさうである。

狂人の眼と髮

此れは蘇格蘭の話で我邦には應用し難いかも知れぬが、同地の瘋癲病院で調査した處によれば、

統計上狂者には普通の人よりも眼の色が薄く髪の色が濃いのが多いと云ふ事である。

(明治四十年十一月三十日、東京朝日新聞)

四十八

寒さと尿量

寒い時に三時間運動せずに居ると尿酸の排出量が平日の五割増す。しかし筋肉を運動させて居れば一割強位しか増さぬ。此れに反して暖かに着物を着て盛に運動すれば却て三割位減する。それで尿酸の分泌の幾分は體熱の損失に對する反應として起るものだらうと云ふ。

新發明の耳喇叭

瑞典政府の電話局で近頃發明された耳喇叭は交換手の耳にさし込んで通話をする爲のものであるが、此れは又耳の遠い人の爲にも重寶なものであるさうな。此器械の電線は耳の背後などに隠

せば少しも目に立たぬさうである。

(明治四十年十二月一日、東京朝日新聞)

四十九

寶石の人造法

近頃佛國のボルダと云ふ人が鋼玉石の粉を變じて種々の寶石とする方法を發見した。即ち此寶石の碎片をラヂウムと一緒に一ヶ月も管に入れて置けば或は黄色なトップパズになり或はルビー、サツファヤ等種々の寶石に變るさうである。此法で作つた寶石を其道の目利に見せたら眞贋の區別が出來なかつたと云ふ。從來各種の鑛物又は硝子などがラヂウムの爲に變色する事はよく知られて居たが、今度の發見が確なれば餘程著しい事と云はねばならぬ。

(明治四十年十二月十六日、東京朝日新聞)

五十

濃霧を消散する新案

ロンドンには霧の名所であるさうだが、近頃マデヨラと云ふ人が此霧を消す新案をして氣象臺で此れに關する研究をして居るさうな。其法はと聞いて見ると随分大仕掛けなものである。直徑六呎高さ六十呎の鋼鐵製の大砲を作り、其中でアセチリン其他の瓦斯を爆發させ空氣に劇動を起させる趣向だと云ふ。遠からず此研究に關する報告が出る筈になつて居る。

(明治四十年十二月十七日、東京朝日新聞)

五十一

坑夫に賞牌

英皇エドワード陛下は今度新に二種の賞牌を制定せられた。此れは鑛山の坑夫などで多數の人の生命を救ひ危険を除く爲に自分の生命を賭した者に授與する筈だと云ふ。其綬は青リボンに黄の縁を取つたもので一等二等に區別されてあるさうな。

結核病研究の萬國會議

來年九月廿一日より十月十二日迄米國ワシントン府で表題の會議が開かれる。全體七部門に分れて結核に關する病理、療法、豫防其他一切の會議をする筈で、又開會中は該病に關する展覽會

を開いて公衆に觀せるさうである。

(明治四十年十二月十八日、東京朝日新聞)

五十二

ペストと蚤

ペストと云へば鼠を聯想するが、鼠族の間に此病毒を擴めるものは蚤だと云ふ事が段々に確められるらしい。或人が天竺鼠に就いて試験した所によれば、假令健全なのと病にかゝつて居るのとを接近させぬ様にして置いても蚤が移ると感染する。又健全な方を籠に入れて吊して置いても蚤が飛び上る事の出来る位の高さに吊したのでは矢張感するが、其れ以上高くするか又細かい網に入れて蚤の出入せぬ様にして置けば傳染せぬと云ふ。もし鼠が人間なら捕蚤の懸賞でもする處だらう。序にペストの本家本元たる印度では宗教上の迷信から殺生を絶對的に忌むので鼠狩りの實行が甚だ困難なやうである。(明治四十年十二月十九日、東京朝日新聞)

五十三

人造藍と天然藍

藍を人工的に合成する法が出来て以來、人造藍の需要が増すにつれて天然藍の産額が減する傾向をもつて居るのは著しい現象である。例へば天然藍の産地たる印度では此二三年の間に藍の栽培面積が半分以下に減少してしまつた。又英國では一昨年と昨年との比較統計によると人造藍の輸入高が二割程増し、此れに反して天然藍の方は七分位の減額を示して居る。しかしまだ、天然のが人造のに壓倒される處迄には月日がある。栽培法や製法の改良を加へて行けば天然藍も當分市場に立ちゆかれる見込だと云ふ。(明治四十年十二月二十日、東京朝日新聞)

五十四

水晶の鑄物

水晶は硝子とちがつて容易に火熱の爲に融けぬから、此れで種々の器物を製するは困難であつた。しかるに先年來は酸水素吹管で水晶の小片を熔して細い棒とし、此水を澤山に熔し合せて管やフラスコを作る事が出来る様になつた。近頃又電氣の熱で勝手な形の瓶などを作る法が發明されたさうである。其法は先づ鑄型の中へ水晶の粉を詰め、其中に炭の棒を挿し込んで此れに強い電流を送り、粉が熔けた時に型の口から空気を吹き込めばよいといふ事である。一旦熔した水晶製の器物は耐火力が強く又熱の爲に破れる變がない。眞赤になる程焼いたのを冷水中に投じても何の異状もないと云ふのが特長である。(明治四十年十二月二十七日、東京朝日新聞)

五十五

巨船モータニア

先日ルシタニア號の話を掲げたが、其姉妹船モータニア號に關する概略を數字だけ比較の爲に擧ぐれば、船の長さ七百六十呎、幅が八十八呎、噸數三萬二千。乗客の數は一等五百六十三人、二等四百六十一人、三等千百三十八人、試運轉の平均速度二十六哩三である。

女優と無線電信

有名な佛の女優サラ・ベルナルは近頃北米と歐洲との間に開通された無線電信について次の様な事を云つて居る。「此の様に歐羅巴と亞米利加とが虚空を距て、睦しく接吻する様になつた

のは科學の力の最も詩的な表現である」と。

(明治四十年十二月二十八日、東京朝日新聞)

五十六

天然色寫眞

先日本紙に載せてあつた天然色寫眞の新法よりなほ一層新しい法が見出された。それはウワリー・ポラリーの法と云ふので、去る十月ロンドンで開かれた天然色寫眞會で展覽に供した。先日のリュミエール會社のオートクロム板は三色の澱粉を混合して作つたものだが、今度のは種板の上に三色の細い線を並べたもので大體の理窟は前のと變りはない。色のついた線を作るには細い格子の様なものと護謄寫眞と同じ法で板に寫し此れを染めるのである。此種の寫眞では色はよく出ても一體に暗くなるのが缺點であるが、ポラリー氏は特別な仕掛で此れを照し一體を明るく見せる様にしたと云ふ事である。前のと今度のとこの優劣は現物を較べて見ねばわからぬ。

(明治四十年十二月二十九日、東京朝日新聞)

五十七

婦人と動物學者

テキサス大學のモントゴメリー教授は、衣服其他の粧飾に鳥類の羽毛を使用する事を絶對的に禁じ度いと論じて居る。單に米國で鳥の濫殺を禁ずるのみならず、輸入も止めなければ無効である。鳥の捕獲が盛になれば益々、羽毛が安くなり使用高が次第に増して結局は鳥の種類が絶える様になるだらうと云つて居る。(明治四十年十二月三十日、東京朝日新聞)

五十八

蜂に螫された時

アムモニア水が蜂の針の毒を消す事はよく人の知る處であるが、或る人の經驗では、それよりも幾那をアムモニア水に溶した丁幾が一層有效ださうである。

火山の變形

話の種

昨年四月伊太利のヴェスヴィアス山が稍烈しい噴火をやつたが、其後同國陸軍地理局で測量を行つた結果によると噴火前に於ける最高點の高さ海拔千三百三十五米あつたのが千二百二十三米に減じて居る。其代りに地獄ヴァルヘルムインフエルノ谷など、いふ窪みは五米乃至五十米の高さに埋められたさうである。

(明治四十一年一月一日、東京朝日新聞)

五十九

結核病と食物

結核菌を接種した動物に種々の食物を與へて病の經過を試験した結果によると、脂肪分を主に與へたものは四十日位で死し、含水炭素殊に砂糖を多く與へたものは八十七日位で死んだ。此れに反して含窒素食物を主に食はせた動物は三百七十一日生きて居たさうである。

(明治四十一年一月二十五日、東京朝日新聞)

六十

燈臺の光色

海上で遠い燈臺を見出した時其光の色が赤だか青だか分りにくい事がある。其時は雙眼鏡か何かで見て肉眼で見たのと比較し、もし肉眼で見る方がよく見えれば其燈色は赤光で、さうでなければ青か白だと云ふ。

屍體とX光線

生きて居る人體の腹部をX光線で照し寫眞を撮つても胃や腸を識別する事が出来ぬが、死後間もなく寫して見ると明に此等の臟腑の所在がわかる。そして死後時間が經つに従つて愈々明白に

なる。生きて居る中は内臓が絶えず動いて居るから寫らぬのだらうと云ふ説になつて居るらしい。

(明治四十一年一月二十六日、東京朝日新聞)

六十一

猿と蛇

いろいろの動物について試験してみると、蛇を怖れるは猿猴の類に限る、但し其中で狐猿と云ふ一種のみは蛇をしかけても平氣だと云ふ。

窒扶斯菌の壽命

北米シカゴ市ではミシガン湖から用水を取つて居るので市中の下水を湖水に流し込む譯に行かぬ。それで下水溝渠は凡て此れをミスシッピー河に放流してしまふ様になつて居る。處で其下流なるセントルイ市で窒扶斯が蔓延し此れはシカゴの病菌が下水と共に河を下つて來る爲だらうと

云ふ所からやかましくなり、其結果窒扶斯菌が水中で幾日間生きて居るものと云ふ問題を研究せねばならぬ事になつた。そこで色々試験をして見た結果だと云ふのを聞いて見るに、普通下水溝渠の如き汚水中では精々四日間位しか生きて居ぬが水が清浄な程永く生きて居るさうである。しかし日光がよく當ればそれだけ早く死ぬる。いづれにしてもシカゴからセントルイ迄三百二十哩の流を下るには十一日位かゝるから、此間には病菌は大抵死滅するだらうと云ふ事に歸着したやうである。序に人體や濕土中に於ける該菌の壽命は數週乃至數月にも互ると云ふ。

明治四十一年一月二十七日、東京朝日新聞

六十二

迅速なるX線寫眞

從來X線で人體の内部などを寫眞するに當つて一つの缺點は照射時間の長い事である。つまり早撮りが出来ぬから運動して居る臟腑を寫す事が出来ぬ。もし此の早撮りが成效すれば體中の活動寫眞が撮れる事になるのである。しかるに近頃ローゼンタールは特別な感應コイルを發明し、此れによつてX線を生ずれば喉頭の寫眞を僅か二秒間で撮る事が出来ると云ふ事を發表した。もう一息早くなれば遂には内臓の活動寫眞も出来るだらうと思はれる。

(明治四十一年一月三十日、東京朝日新聞)

六十三

マホメットの墳墓

土耳其皇帝陛下は近頃メヂナにある回々教祖マホメットの墓に電燈をつけて神聖な墓地の闇を照さうと云ふ事を思召し立たれて英國の某會社に右の工事一切を御下命になつたと傳へられて居る。

女皇陛下の電話

昨年の暮葡萄牙の女皇アメリー陛下が巴里に御滞在中の出來事である。一日巴里倫敦間の長距離電話に故障があつて唯一線しか通じないので、電話申込人は何十人もつかへて順番の來るのを

待ち兼ねて居る有様であつた。其時ブリストル旅館から英京のバッキンガム宮へ通話を申込んだものがある。交換手は「七十五番ですからも少し御待ちなさい」とやると失望の嘆聲が聞えてやがて「アメリカ女皇から英皇へ御話しがしたいのだが」と云つた。そこで交換局では畏つて早速接続すると女皇陛下は御満足でものゝ小半時間もゆるゝ御對話があつた。他の電話申込人等はそんな事とは知らず待てどもゝ願番が來ぬ、殊に巴里の銀行家など一刻を争ふ經濟上の交渉をひかへて居るので氣は氣でない。時の立つ内にどんな事が起らうかと青くなり赤くなつたと云ふ話である。

(明治四十一年二月四日、東京朝日新聞)

六十四

煤煙問題

ロンドン地下電鐵會社の發電所で焚く石炭の煙がウエストミンスター¹の町へ掛つて損害を興へるといふので同市會から會社を相手取つて訴訟を起した。が審理の結果、同會社の煙突から出る煤煙は十分な設備によつて清められたものであつてそんなに害毒を生ずるやうな悪い煙でないと言ふ事になり、此訴訟は却下になつたさうである。

面白い電燈

近頃室内に取りつけ又は卓上に置く電燈に面白い自動装置を附したものが工夫された。例へば

人形が電燈を持つて立つて居るのならば灯が點ると同時に電燈を高く振りあげる。又柱などに龍や鬼の頭をつけ、夕方が來ると此れが口を開けて電燈を吐き出す様な仕掛になつて居る。

(明治四十一年三月六日、東京朝日新聞)

六十五

過失より起る火災

放火や悪戯より起る火災は人の不注意から起る火災に比すれば殆んど云ふに足らぬ少数であるさうな。米國での統計に據れば、過去二十一年間に過失から起つた火災の損害は金高にして二億六千六百三十四萬〇五十八弗になる勘定だと云ふ。電線、落雷、地震、おまけに野火を加へても過失から起るものゝ數には足らぬさうである。

新しい白熱電燈

近頃トムソン・ボーストン會社で專賣特許となつた白熱燈の炭素線は純粹な石墨だと云ふ。此

れを作るには、油煙を電爐の中で攝氏三千度に熱したものに或る糊を混じて線状とし、此れを四百度に熱して糊を炭化させるのださうである。

(明治四十一年三月七日、東京朝日新聞)

六十六

黄金の産額

昨年中に世界各地で採掘された黄金の總額は六百七十四噸で、もし此れを集めて一塊とすればザット一丈四方に高さ九尺位になる勘定である。此内殆ど三分の一は阿弗利加の南部から、又四分の一は北米合衆國及びアラスカから出たのださうな。序にアメリカ發見以來去る明治卅三年迄に該地で採つた金の價額を見積つて見ると二百五十億圓程になるといふ。

樹木と遺傳

縦などの種子を播いて其生長の遲速を試験して見ると、低い土地から取つて來た種子の方が高

地から取つたのに比して餘程生長が早いと云ふ事が瑞西や塊太利邊で確められた。なほ一般に種子の重さや生長期の長短或は病にかゝり易い度なども其種子を採つた母樹の土地に餘程關係するさうである。それでかう云ふ樹の種子を選ぶには播種すべき土地に應じて適當な處の産を用ひねばなるまいと云ふ事を論じて居る人がある。但し樅の外の樹木にも同様の事があるかどうかは、まだよくわからぬやうである。

(明治四十一年三月十九日、東京朝日新聞)

六十七

新しい魔睡劑

鹽化エチールを魔睡劑に使用せんと試みた人がある。其の近頃に發表した論文によると、此の藥劑に酸素を混じて試験用の動物に吸入させて見たが一時間程極く安靜に魔睡し、睡からさめる時も速に醒め切つて、エーテルやクロロホルムの様にさめ際の悪い様な事がなかつたさうである。しかしまだ人間には試みて見ぬが多分同様の好結果を得る見込だとの事である。

寫眞の無線電送

近頃寫眞電送といふ事が大分評判になつたが、從來の法は皆電線によつて電流を傳へるのであ

る。處が昨年暮に佛國で試験したペルジョンノオ式といふのは長い導線を引かずに無線で寫眞を電送するのださうな。巴里と馬耳塞間で試験の結果好成绩を得たと傳へられて居る。

(明治四十一年三月二十日、東京朝日新聞)

六十八

眞珠の採取にX光線の應用

世界中の眞珠産地で年々に採る母貝の數は夥しいものであるが其中で眞珠を含んで居るのは比較的少い、それで母貝の多數はつまり無駄に殺されてしまふ事になる。もし貝を開かず眞珠の有無を驗する事が出来れば非常に無駄が省ける譯である。處が今から七年前にデュボアといふ人がX線で眞珠貝の寫眞を撮り珠を驗する事を考へ出したが、なにしろ澤山な貝の寫眞を撮るのは可也に手數でもあり費用もかゝる處から實業社會の注意を惹くに至らなかつた。しかるに又近來紐育のソロモンと云ふ人が同じ考を起して大仕掛に資本をかけて此の法を用ひる事になつたさうである。吠の様な物に母貝を澤山に並べたのを一度に寫眞にとる。そして眞珠のあるのはすぐ

に採出し、ないのは養殖場へかへすさうである。此の法が果して收支相償つて利益があるかどうかは他日を待たねば分らぬが、兎に角米國人が科學の應用に熱心な一例と見る事が出来る。

(明治四十一年三月二十一日、東京朝日新聞)

六十九

光線と眼

薄暗がりて讀書などすると、むぎに眼が疲れて来る。永く続けると非常に眼を害するのは誰れも知る通りであるが、又餘り強い光も眼に害がある。例へば太陽などを長く見つめるのは恐ろしい病の基である。印度では宗教上の迷信から太陽を強ひて直視する爲に内障眼を起す者が澤山ある。又露西亞の或る地方で牧牛が白皚々たる雪の強い光のため眼病を起すのを防ぐとて一種の眼鏡をかけさせた話がある。それ程に強くない光でも永い間には案外の害を及ぼすから、燈光などでもなるべく裸火を廢して磨硝子の玉ボヤの様なものを使った方がよい。近頃の話だが、米國の或る夜學校で強い電燈を點じてやつて居たが學生中に眼病が非常に出來て困つた。そこで電燈の

下に反射鏡を取り付け光を天井から反射させる様に改良したら其後は眼を病む者がサツパリなくなつたと云ふ事である。(明治四十一年三月二十九日、東京朝日新聞)

七十

料理に音楽

近頃シカゴ市で電気應用諸器械の展覽會があつたが、此れに關する同地の新聞の記事中に次の様な奇抜な意匠が述べてある。即ち料理番が肉なり野菜なりを竈に仕かけて煮えるのを待つて居ると丁度よい時分には電気仕掛のピアノが鳴り出す、其煮物に相應した様な曲を奏するといふのである。あまり面白過ぎた様な考案ではあるが、如何程迄電氣が萬能な勢力であるかといふ一例として御紹介するのである。但し考案だけで器械が出来たのではない。

(明治四十一年三月三十日、東京朝日新聞)

七十一

土星の輪

太陽系に屬する諸遊星の中で土星を取巻いて居る輪ほど不思議な面白いものはない。ガリレオ以來幾多の星學者、物理學者の腦を苦しませた代物である。それで其形狀なども充分に研究されてゐた譯であるが、此頃佛國の或高山の天文臺で觀測して居たら從來人の知つて居る輪の外側にもう一つボンヤリした輪のある事を發見した。此輪が是迄發見せられなかつたのは、從來の觀測は皆低地でするのみであつた爲、下層の濁つた空氣に障ぎられて見えなかつたのだらうといふ事である。

科學の通俗講義集

近頃コロンビヤ大學で最近の科學の進歩を通俗的に講義した小冊子二十二篇を出版した。なるべく専門的の術語などを使はずに極くわかり易く説いたものである。代價は一冊五十錢位で同大學の刊行になつて居る。此種の通俗講義の必要は何處でも感ぜられて居たが、今率先して此れに着手したのは同大學の美學といはねばならぬ。

(明治四十一年三月三十一日、東京朝日新聞)

七十二

瓦斯の液化

水蒸氣を冷せば水になる事は日常目撃する處だが、凡ての瓦斯體も適當の寒冷と壓力を加へれば皆液體になつてしまふ筈である。炭酸瓦斯などは通常の溫度でも壓縮すれば液化するが、空氣の如きは攝氏零度以下百四十度と云ふ極寒に會はぬといくら壓縮しても液體にならぬ。近來瓦斯を液體にする事が大變に進歩して大抵の瓦斯は皆液化される様になつたが、獨り空氣中に混ぜるヘリウムのみはどうしても液體にならなかつた。しかるに今年三月初めに至つて和蘭ライデンの大學教授オンネス氏は終に此れをも液化し得たと傳へられる。

(明治四十一年四月五日、東京朝日新聞)

露國政府と前世界の巨獸

近頃西比利亞の東北部ヤクーツク地方で、前世界の巨象マンモスの遺骸が発見せられたので、露國政府では其研究の爲に學者を同地方に派遣することとなり、同國學士院の動物學博士等數名が出張を命ぜられたさうである。約一年餘の時日を費す豫定で、其費用として一萬六千ルーブル（約一萬三千圓）を國庫より支出することとなつたさうである。露國政府が純粹な科學の方面にも冷淡でない一つの例として御紹介するのである。（明治四十一年四月八日、東京朝日新聞）

七十四

温泉中のヘリウム瓦斯

前條にヘリウムの事を述べた序にもう一つ此瓦斯に關する話をする。近頃鑛泉中に此瓦斯が含まれて居る事が知られた。佛國で調べた結果によると○・一乃至五・三プロセント位の割合で含まれて居る。此れを採取するには液化した空氣で冷却し木炭に吸収させるさうである。此瓦斯はもと太陽中に存する事は日光の分析から知られて居て其爲にヘリウム（太陽素）と名けられたが、しかし地球上の空氣中にも存するといふ事は僅に數年前發見せられたのである。最も輕いそして他元素と化合し難いものである。近年ラヂウムの研究が進むにつれ、ヘリウムはラヂウムより變化して出来るものと云ふ事が知れ、元素といふものは變化せぬ物だといふ從來の考へを打破つ

たので科學者の注目をひいて居る。
(明治四十一年四月九日、東京朝日新聞)

七十五

啞に言語を教ふる法

電話や蓄音機の發明に依つて有名なグラハム・ベル氏は又啞者に言語の發音を教ふる法に關する著者として知られて居る。近頃其著書の再版が出た。此法はもと著者の父メルザル・ベル氏の考案したものである。一種の記號で文字の代用をさせ、又其記號の形によつて其音を發するには舌や口腔を如何なる位置形狀にすべきかといふ事を明かに示したものである。此方法によつて言語を發する様になつた啞者は澤山あるさうな。(明治四十一年五月一日、東京朝日新聞)

七十六

空中の巡查

近刊の某地學雜誌に上の様な表題を掲げて鳥類の保護を論じて居る人がある。其人の説によれば、鳥類が農作物の害虫を驅除する功は非常なもので、もし鳥類濫殺の結果有益な鳥が絶滅に近づく際には地上の植物は大半滅亡するに至るであらうというて居る。

植物標本の保存

植物を保存する時に一番物足らず思ふ事は美しい緑が褪めてしまふことである。此緑色を其儘に保存する法については色々試験をした人がある中に、數年前トレール博士は次の法を發表した。

即ち醋酸銅を醋酸に溶したものに植物を浸せば葉緑素と銅との化合で不變の綠色素が出来るといふのである。近頃更に發表した處によれば、此溶液を熱して沸騰しつゝある時に用ひる方がよいさうである。

(明治四十一年五月六日、東京朝日新聞)

七十七

人を載せる紙鳶

昔鎮西八郎が大紙鳶に其子を縛して伊豆の島から空に放つたといふのは馬琴の才筆によつて面白く描かれて居るが、茲に述べるのは昨年の暮北米での話である。大きな紙鳶に中尉某を載せて地上百六十八呎の處迄上げたさうである。此紙鳶は蝶の羽根を立てた様な形の小さい紙鳶を三千四百個程組合せて風を受ける表面を多くしたものである。

回々教と新月形

回教では新月形を記章とする事恰も基督教の十字架の如くである。此れは無論三日月に象つた

ものだらうと思はれて居たが、段々調べて見るとさうでない。動物の爪或は牙で作つた護身符から起つた形だといふ事が知れた。始めは二つの爪或は牙の根元を絲や金具で縛つたものを用ひて居たが、後には一片の彫刻物で代用する様になり、後には眞中の繼目の痕も略されて新月形になつてしまつたといふ事がわかつた。

(明治四十一年五月十一日、東京朝日新聞)

七十八

寫眞測量

經緯機などを用ひて測量すれば無論精密な結果を得られるが、其かはり時間をつぶし、人を澤山に使はねばならぬ。しかるに近頃は極く輕便な誰れにも一人で出来る測量法が段々使はれる様になつた。即ち寫眞機一つで山河の配置なり建物の形狀大小なり大體の事を知る事が出来るのである。少し精密な測量をするには特別な寫眞機が出来て居て、此れを持出して數葉の寫眞を撮ればあとは机の上の仕事で立派な地圖でも何でも出来る。一日野外で馳けまはる必要はない。最近の米國雜誌によれば、此種の測量にパノラマ寫眞機を用ふれば最も簡便だといふ事である。

(明治四十一年五月十五日、東京朝日新聞)

七十九

變つた製氷法

獨逸の南部で冬期人造氷を作る法といふのを聞いて見ると、一寸變つて居る。先づ長さ二丈位の大きな槽を作り其天井と中段とに横木を並べて置く、そして天井の上に水道を引いて其口から噴き出す水を天井一面に散亂させる。すると小さい飛沫になつて落ちる水は寒い空氣に觸れ、皆氷柱の形になつて天井及び中段の横木から垂れ遂には地上に達する。此くして出來た大きな氷柱を片端から折り取つて氷藏へ收め夏迄貯藏するのである。此法でやれば一夜に九尺四方位な氷塊が出來るさうな。但し氣温が攝氏零度以下數度に降らねば駄目な事は勿論である。

(明治四十一年五月十八日、東京朝日新聞)

水の消毒

空氣中に電氣の火花を通ずる時一種の臭氣を帯びたる所謂オゾン瓦斯が出来る。此瓦斯は酸素の變形したもので非常に酸化力が強く微菌類は此れに遇へば皆死んでしまふ。此性質を利用して飲料水等の殺菌消毒をする法が近年歐洲諸國で行はれて居る。オゾンを作るには交番電流を特別な變壓器に通じ、此器内に生じた瓦斯を給水管中に吸ひ込ませる様にしてある。此法で消毒すればどんなバクテリアでも残らず死んでしまふ、そして蒸餾水などはちがつて水の固有の味が少しも變らぬといふ利益がある。尤も汲み出した時にはオゾンの臭氣がするが、此れはすぐに消失するといふ事である。(明治四十一年五月十九日、東京朝日新聞)

巴里の高塔

有名な巴里のエイフェル塔は近年屢々無線電信の發信所に用ひられたが、近頃佛國學士院のブーケ・ド・ラグリー氏は此塔を利用して遠近の海岸を航海しつゝある船舶に正確な時刻を電報し航海に最も必要な時辰儀の調整をさせたらよからうといふ事を建議した。佛國政府は此れを容れ、先づ手始めとして大西洋及び地中海を航行する自國の船について試験をする事になつたといふ。

巴里の夜の正零時に信號を發すると海上の船は一齊に時計を驗して幾何の遅速があるかを知る事が出来る。夜中を選んだのは畢竟無線電信には夜間の方が故障が少い爲だといふ。

金剛石と炭

金剛石は殆ど純粹な炭素から出來たもので、此れを空氣中で高熱すれば燃えて炭酸瓦斯に變る事は人のよく知る處である。近頃或人が金剛石を眞空管内に封入し此れに強い陰極線を當て、見た處が、金剛石は攝氏二千度近く熱せられ眞黒な骸炭に變化したさうである。

(明治四十一年五月二十日、東京朝日新聞)

八十二

學者の犠牲

英國のホールエドワードといふ學者は、X線の爲に左の手全體と右の手の指とを失つた。其犠牲の報酬として年金千二百圓程と一時金八千圓位とを貰ふ事になつたと傳へられる。

墨西哥人の飲料

メキシコや中央アメリカ邊で一般に飲料として賞味するパルクといふものがある。此れは龍舌蘭の厚い葉の汁から製するさうで、近刊の某誌によれば次の様な方法によるといふ。先づ適當の時期に大きな葉の皮を剥いて髓を露出しておく、それから一年後に此髓を切斷し根元に穴を穿つ

て置くと切口から澄み切つた汁が出て穴にたまる。此汁は丁度椰子の汁の様な味がするさうな。此れを集めて皮袋に貯へて置くと一種の醗酵を起して所謂バルクが出来上る。一種の腐敗した様な臭味があるが飲んで見ると存外好いものだといふ話である。

(明治四十一年五月二十五日、東京朝日新聞)

八十三

六千年前の肉塊

近頃埃及の醫學校で木乃伊の解剖分析に従事して居る學者がある。其研究の材料中には僅に六千年を経たものもあるが、此等の肉塊を分析して見ると驚くべき事には蛋白質脂酸の如き有機成分が歴然と分解せずに存して居る。しかし血球などは全く痕跡もなくなつて居るさうである。木乃伊を作るには始め鹽水に死體を漬けて種々の樹脂の類を塗つて固めたものらしい。此れが六千年後の今日迄存して居るのは全く埃及の空氣が非常に乾燥して居る爲である。

(明治四十一年六月二日、東京朝日新聞)

八十四

柔能く剛を制す

比較的にかい鋼鐵の圓板を急速度で廻轉させ、其縁に極く硬い鋼鐵を當てると硬い方の鐵が容易に截斷される。此の不思議な事實を研究した學者の説によれば、鐵と鐵との觸れる處は摩擦の爲に高熱を生じ鋼鐵が熔けて行く爲であるといふ。

蜂の智恵

佛國學士院の報告中にボンニエーといふ人が次の様な實驗の結果を述べて居る。一日庭に角砂糖をいくつか出して置いたらやがて一群の蜜蜂が此れにとまつて頻に骨折つて居たが堅くて喰ひ

缺く事が出来ぬと見えて一時飛去つてしまふた。少時して後今度は泉水のある處から水を含んで來て夫で砂糖を溶し其汁を吸うて巢に歸つた。

(明治四十一年六月十九日、東京朝日新聞)

八十五

天然色活動寫眞の發明

活動寫眞を見て遺憾に思ふ事は此れに天然の色彩の缺けて居る一事である。然るに近頃アルバート・スミスと云ふ人が天然色の活動寫眞を發明して此缺點を補ふに到つた。尤も以前にアイヴスといふ人が三色寫眞を應用して三色の活動寫眞を一つの障子に重ね映じた事はあつたが、何分にも三個の器械を合せ用ひるには種々の困難があつて到底廣く實用に適するに至らず其儘になつて居たのである。然るに今度スミス氏の發明したものは唯一つの幻燈器に一枚の長いフィルムを使つて天然色を現すのである。其法は先づ實物の刻々の寫眞を感光膜に寫す際、交互に赤と緑の障子を使つて實物の赤い色ばかり撮つたものと緑色のみ撮つたものを交替に連ねる。かくして

得たフィルムを普通の活動幻燈器で寫し出し同時にフィルムの後で赤と緑の膜を張つた圓板を廻轉し、赤の光で撮つた寫眞の出る時は赤の膜が来るやうに、緑の寫眞には緑の膜が出る様にすればよい。さすれば二色の寫眞が迅速に引續いて交互に現れるから眼には丁度二色の寫眞を重ねて見ると殆ど同じ結果になり、従つて略天然色に近いものが現れるのである。從來の三色寫眞に對し唯二色を以て如何なる程度迄天然色を模する事が出来るかは多少疑問であるが、兎に角相應の好結果を得たと傳へられて居る。此の寫眞並に幻燈に用ひる赤緑二色の膜の色が最も研究を要する處であるらしい。(明治四十一年六月二十八日、東京朝日新聞)

八十六

寫眞の無線電送

寫眞電送といふ事が近頃大分流行の話柄となり、先達て佛國で無線電送の試験をしたとの記事もあつたが、此頃又英國でクニューデンといふ人が非常に簡単な寫眞圖畫等の無線電送法を發見し大分評判になつて居るやうである。其法はなんでもない。寫眞の種板が十分乾かぬ内に粉のやうなものを振りかけると光に感じて居る處だけ粉が粘着し其處だけ突起する。そこで今此種板の面に接近して針の様なものを萬遍となく動かし針の尖端が板の全面を隈なく通過するやうにする。そして針と種板に發電機の兩極をつないでおけば、針が種板の突起即ち光に感じた部に觸れる毎に電流が通る。此電流で適當の電波を起せば此波は空中を傳はつて目的地に達し受信器に感じて

普通の無線電信と同様小さい針を動かす。此針の下には煤を塗つた硝子板のやうなものを置き、此板の上を針が往復運動する事丁度發信所と同じくして置けば針は煤硝子の上に現物と殆ど變らぬものを描き出すのである。發明者の考へでは、此法を印刷物に利用すれば、遠い異郷で毎朝出る新聞を同日同刻に其儘見る事も出来るだらうとの事である。

(明治四十一年七月四日、東京朝日新聞)

八十七

死産兒の鑒定法

嬰兒の死體を檢して此れが果して本當に死んで後分娩されたか或は出産後死亡したかといふ事を容易に判別する新法が近頃佛國學士院の報告に發表された。其所説に據れば、疑問の死體をX線で透して撮影すれば、もし本當の死産なれば體内の機關は一つも寫らぬが、少しでも空氣を呼吸したものであれば胃だけが現れる。又もし胃と腸とが寫れば其子は出生後一時間乃至十四時間生存して居たものである。もし數日榮養をとらず生きて居たのなれば胃腸の外に肺並に肝臟が寫る。又數日間食物で養はれたものなれば内臟諸機關はいよゝゝ明かで、なほ腸部に發生する瓦斯の爲此部が特に明に寫るとの事である。(明治四十一年七月二十日、東京朝日新聞)

八十八

科學者の不遇

科學者が世界の文明に貢獻し自國の榮譽を高めつゝあるにも拘らず一般に不遇であるのは何處も同じと見える。近頃英國の某新聞で陸海軍人の待遇を論じたのに就いて某科學雜誌記者は次の様な事を云つてゐる。一科學研究の重要な事は誰も認めて居るが何かの場合には兎角不遇になり勝ちである。此れはつまり國務大臣や宮中の人が科學に縁のない人ばかりだからであらう。先達て宮中の園遊會で音樂者、戲曲家、文學者を招待されたが科學者は呼ばれなかつた」とこぼして居る。

蚊の撲滅

北米バルチモアでは蚊の爲にいろんな病氣の流行るのを防ぐ爲に一昨年市會で二萬圓程支出して撲滅にかゝつたが、結果がよかつたので今年又一萬圓程支出したさうである。方法は矢張り水溜に石油を撒き、井戸やタンクには金網を蔽ふのである。

(明治四十一年十月二十五日、東京朝日新聞)

そ
の
他

赤

蒲團を引つかぶつて固く目を閉ぢると何も見えぬ。しばらくすると眞赤な血の様な色の何とも知れぬものが暗黒の中に現れる。猶見て居るとこれが次第に大きくなつて突然ぐる／＼と廻り出す。それは／＼名状し難い速さで廻つて居るかと思ふと急に花火の開いた様にパツと散亂して其又一つ／＼の片が廻轉しながら縦横に飛び違ふ。血の色は益々濃くなつて再び眞黒になつたと思ふと又パツと明るくなつて赤いものが廻りはじめる。こんな事を繰り返して居る内に眠の神様は御出でになる。屹度此血のやうな花火のやうなものが眠の神の先驅のやうなものであらう。

赤

熱帯地方の山川草木禽獸蟲魚は皆赤いものゝやうな氣がして仕方が無い。これは多くの地圖に熱帯を赤く塗つてあるからであらう。

先生赤い涙があるもんですかと、眞面目で聞いたのは僕の友達ぢや。

赤とは火の色なり、血の色なり、涙の色なり。

(明治三十二年五月、ホトトギス)

神

Godを逆さにするばDoeだ。(明治三十三年三月、ホトトギス)

神

ランプのいろく

僅か數十年前の夜と今の夜とを比べると、正に夜と晝程の相違である。博覽會のイルミネーションを觀て昔の行燈時代の事を想へば、今更の様に燈火の進歩に驚かれる。

瓦斯燈でも從來の魚尾形をした裸火は段々にすたれて、白熱瓦斯、即ちウエルスバツハ・マントルに壓倒されて來た。今日では場末の荒物屋芋屋でも此れを使つて居る。あの所謂マントルは布片にソリウム及びセリウムと名ける元素の化合物を浸したもので、此れを瓦斯口の上に着せ火を點ければ、植物質は燒けてソリアの灰の網が出来る。此れが瓦斯の焰に觸れると眞白な強い光を出す。近頃は又瓦斯を下向きに噴き出して、普通電燈の様に下方を照すヤコブ燈と云ふのが出來た。一寸見ると電燈かと思はせる。マントルに就いて一つ不思議な事は、此れに浸す藥品がソ

リウムばかりでも又セリウムばかりでも一向光らぬ、唯前者の中に後者の極く微量を加へると、始めてあんな強い光を出す事である。

アセチリン瓦斯も光が強いので、自轉車のラムプ、活動幻燈等に用ひられて居るが、瓦斯の悪臭が如何にもいやなので、家庭用には面白くない。此瓦斯はカーバイドと稱へる人造の石塊に水をかければ發生するから、使用は輕便である、此原料を作るには水力電氣を用ひる。

次に昔から強い光を得る爲に用ひたドラモンド燈と云ふものがある。酸素と水素或は燈用瓦斯と混じた焰を石灰の塊に吹き付けると眩しい様な光を出す。又石灰の代りにザンコンと云ふものを使ったのもあるが、此等は普通の燈用には用ひられぬ。

夜間寫眞などに金屬元素マグネシウムの粉を燃す事があるが、あれは唯短時間強い光を出すだけで、燈用にはならぬ。

次には電燈であるが、一口に電燈と云つても今日では非常に種類が多くなつた。先づ從來誰れでも知つて居る白熱燈と弧燈アークでも随分いろんなものがある。弧燈では、二本の炭の棒の尖端の間に強い電流を送ると、炭が攝氏三千五百度程に高熱して、其焰が弧狀をなして炭の棒の間に橋を渡す様にしたものであるが、此れにも色々あつて、例へば弧光の周圍をガラスで密閉し、其中に

空氣以外の瓦斯、例へば窒素、一酸化炭素杯を充したのがある。此方だと炭の棒の消費が少い。其他炭の棒やホヤや附屬器械のパテントを一々數へ立てたら限りがない。夫から又直通電流を用ひると、交番電流を用ひると、夫々區別があるが、要するに炭の棒の隙間を電氣が通る時に炭の蒸氣が出て此れが光る。電車の屋根から突出て居る棒と架空線との接觸した處で青い光が出るのも同じ譯である。近頃は炭の棒の代りに金屬を用ひるのも出來た。弧燈は何萬燭光など、云ふ強い光を出すので、探海燈、燈臺用其他凡て戸外の燈用に適して居る。

二

(明治四十年七月十五日、東京朝日新聞)

室内用として最も廣く用ひられるのは矢張り白熱燈である。ガラスの球の中の空氣を抜き、中に炭の細い線を入れ、此れに電流を通じて光らせるのである。空氣を抜いて置かぬと炭線がすぐに燃え切れてしまふ。しかし空氣を抜いて置いても段々炭線が損じガラスの内面が汚れて暗くなる。それで何か炭素に代る都合のよい物質はないかと調べた結果、色々の發明が出來た。オスミウムと云ふ金屬を用ひたオスラム燈と云ふのが出來たが餘り用ひられぬ。又近頃タンタラムと云ふ金屬の線を代用したのがぼつ／＼用ひられる、此針金を絲枠の様なものに巻きつけてある。唯

困る事は少し長く使つて居ると針金に凹凸が出来て使へなくなるので、今の儘では急に從來の炭素線を壓倒する勢ひはない。次に近頃出来たタングステン燈と云ふのは此等に比して餘程有望だと云ふ事である。タングステンと云ふはクロム屬の金屬元素で、是迄は極く硬い鋼鐵を造るに用ひられて居た。此れを針金にして白熱燈の炭素線に代用すると大變に電力の經濟になる。普通の炭素ラムフでは一燭光につき三・五ワット位の電力を要するのが此ラムフでは僅か一ワットで足りる。即ち約七割の利益になる。此點から云へば非常に得なラムフであるが、唯此針金が脆くて折れ易いのが缺點である。しかし追々廣く用ひられる見込だと云ふ事である。こんな脆い金屬だから普通の方法では針金にする事が出来ぬ。それで此針金を作る方法が色々工夫された、例へば細粉にした金屬を膠でこねて糊狀にし、此れを絲にした後、膠だけ焼いて取るとか、又此金屬の酸化物をこねて絲にした後此れを還させるとかする。コロイド・ラムフと云ふ名で賣出して居るのも矢張りタングステン燈の一種である。弧燈と白熱燈の外に、なほ素人の餘り知らぬ有用な電燈が二種ある。即ちネルンスト燈と水銀燈である。

或る金屬の酸化物例へばマグネシアの如きものは普通の温度では電氣を通さぬが熱せられると電流を通じ、其爲に灼熱して強い白光を出す。此れを利用したのが即ちネルンスト燈である。ネ

ルンストとは此れを發明した獨逸の物理學者の名を其儘取つて付けたのだ。始めに或る溫度迄熱してやらぬと電氣が通らぬから、此れを熱する爲小さいコイルが附屬してある。始めに電流が此コイルを通つて此れを熱すると其中にあるマグネシアの線が熱して導體になり光り始める。此ラムプは嘗て新橋の停車場ステーションで使つて居たと思ふ。

次には水銀燈である。此れは長いガラスの管の兩端に電極を付け、一端にある小さい壺に水銀を入れ中の空氣を抜いたものに過ぎぬ。此れも其儘では電氣は通らぬが、始めに此管を傾けて水銀を管の一端から他端へ流し、電極の間に橋をかけると電流が通じ始める。すると水銀が蒸發して管の中は此蒸氣が充ち其中を電流が通じる様になるから管を舊位置になほし水銀を一端に返しても電流は續いて通る、此時に水銀の蒸氣は強い蒼い光を出す。此ラムプの利益な點を舉げて見れば、先づ電力の經濟が出来、それから光る部分が大きいから物の影が少なくなつて室内が晝の様になる。又此光は寫眞の種板によく感じるから此れを使へば夜間でも殆んど晝間同様の寫眞が撮れる。こんな長所はあるが惜しい事には此光には赤い色を含んで居ないから、赤いものを此ラムプの光で見ると黒く見える。人の顔でも手でも青みを帯びた不快な黄色に見え、唇などはまるで死人の様になる。それで衣服でも器具でも室内のものは殆んど皆本來の色を失うてしまふから家

庭用には用ひ難い。寫眞用の外には工場の燈用などに用ひられて居る。劇場で幽霊などの場に使用したら面白いだらうと思はれる。前に新橋の停車場の天井に一つ使つて居たが今はどうだか知らぬ。水銀燈の不快な色をなほす工夫も色々研究された。例へば水銀の中に他の金屬を入れてアマルガムにすると赤い色も出す事が出来るが、さうすると又電力の利益が少くなるといった様な譯でまだ成效の域には達して居ぬ。

序に燈火の色についても近頃色々研究されて居る。一體物の色と云ふのは其れを照す光の色に依るので、例へば染物類を晝日光で見たのと夜石油ラムプで見たのと全くちがふ場合が多い。先づ今日の處では炭の棒を使つた弧燈の光が一番日の光に近いものと云ふから、呉服屋などでは此れを使つたらよからうと思ふのである。それから色の不完全な燈光を始終使つて居ると遂には一種の色盲になる恐れがあると心配して居る人もある。此れは餘りの取越苦勞かも知れぬが、兎に角燈火の色と云ふ事は實用上重要で研究すべき問題だと思ふ。

ラムプと云へば無論燈用が主になつて居るが近年は特別な醫療の目的にも用ひられるさうである。即ちルプスと云ふ皮膚病は弧燈の強い光で長く照すと段々に治癒するさうである。

(明治四十年七月十六日、東京朝日新聞)

汽船の改良

船に酔はぬ人に云はせると航海程愉快なものはない。しかし吾々船に弱い者から見るとこんな厭なものはない。船室に潜り込んだが最後、もう頭が上らぬ。海上の日の出がどんなに美しからうが、海鳥が飛ばうが、鯨がはねようがそんな事はどうでもよい、一刻も早く目的地に上陸して動かぬ地盤が踏み度いと願ふ。そしてなるべくなら船に乗りたくないと思ふが、海國の悲しさには、一寸踏み出せば是非共船でなければならぬ。止むを得ないとなればどうか揺れない船が欲しいと思ふた、誰も變りはあるまいと思ふ。

造船學者の方から見れば汽船の改良すべき點は色々あらうが、乗客の側から云へば船體の構造、機關の種類はどうでもよい、唯安全で、動揺が少くて、そして速力が大きければよいのである。造船學者も此點については如才なく色々工夫をして居る。

船の動搖には横揺れローリングと縦揺れピッチングとある事は誰も知る通りで、大抵の場合には兩方同時に起る。殊に小さな汽船の艦の方などへ乗ると、縦横に揺上げ揺下ろされる。もしどちらか一方丈でも出来れば幾分か樂であらうと思はれるが、此中で横揺れの方だけは餘程少くする方法が色々發明されて居る。

第一に、船底にビルヂキールと名くる鰭の様な物を着けると、其抵抗で餘程揺れが少くなる。巧く作れば動搖の角度が半分位にはなる、此れは實際今日でも用ひられて居る。

第二には船の中に大きな空室を作り、其中に水を満載し、船の動搖に應じて適當に水を動搖させ、其作用で横揺れを防ぐと云ふ工夫が今より二十年前、英國の二三の汽船に應用されたが、餘り面白くなかつたと見えて其後は用ひられぬ。

第三には佛國學士院へクレミュと云ふ理學者が提出した新案である。船の中に大きな重い振子を吊し、其周圍に粘い油を入れると云ふのであるが、まだ實際の試験をする處迄行かぬらしい。

第四には英國のソーニークロフトと云ふ人が、巧妙な仕掛で極く重い重量を自働的に船の左右に交互に動かして、波の爲に起る動搖を防ぐ事を考へ、實際の汽船に取付けて試験して見たら、可也によく行つたさうである。しかし其後餘り用ひられぬ。

第五に極く近頃、漢堡ハンブルヒのシユリックと云ふ有名な造船家が大きな獨樂を船中に取付け、此れを迅速に回轉すると横揺れが殆んど止まると云ふ巧な考へを出し、小形の船で實驗したら非常に好結果を得たので更に目下エルベ、ヘリゴランド間通ひの千噸位の客船に取付けるのを製造中ださうである。此發明は餘程有望で追々廣く用ひられるだらうと云ふ話、兎に角船嫌ひには有難い福音である。

縦揺れの方は今日では別に此れを防ぐ工夫がない様で、物足りないが仕方がない。唯縦揺れの爲に起る上下動は、船の中央部が比較的一番少いから、近來の良い船の一等室は大抵船の中程に置いてある。

横揺れ縦揺れの外に、もう一つ汽船特有の厭な事がある。即ち汽船が進行を起すと船體がブルブル振動する。浪が穏かで船の揺れぬ時でも此微動だけは免れぬ不愉快である。此れはつまり主として機關の上下運動の反動で船體各部の振動を起す爲であるから、機關の各部分の重量をうまく取り、反動のない様にすれば防がれる。近頃新式のタービンならば機關に上下運動をやる部分がないから、こんな厭な反動はない。又推進器スクリュープロペラーの羽で水を艦部に打付ける爲に幾分の振動を起すが、此れは船體の樞要な箇所を丈夫にすれば大抵防がれる事になる。

いくら動搖が少い船でも速力が鈍くは困る。次には少しでも快速力の船に乗り度い。先づ今日乗客船の速いので一時間二十五哩位、可也に速いと云はねばならぬ。しかし速力を大きくする爲には汽罐も澤山にせねばならず、石炭も澤山使ふ。又一方では機關部が大きくなるので積荷が自然減るから運賃の収入が減る。此の埋め合せには乗客の賃金を増す外はないから、要するに速力が増せば賃金が増すと思はねばならぬ。近年大西洋航路などでは速力の増すと共に賃金も著しく上つたが、それにも拘らず争うて快速力の船を選ぶ有様ださうである。我國の各航路でも、どうかももう少し速くて乗心地のよい船をドシ／＼造つて貰ひ度いものである。

(明治四十年八月三十日、東京朝日新聞)

無線電信の近状

数日前の本紙に記した通り横須賀海軍工廠で研究中の同調式シントニツクシスデムの無線電信が完成して焼津と横須

賀近邊との間で通信の試験をして居る、又京都大學の水野理學博士も海軍省からの囑託で伊勢地方で

試験をして居られると云ふ。それで時節柄世界に於ける輓近の無線電信の景況を少し讀者に御紹介し
度いと思ふのである。

無線電信と云ふものは一體どうして出来るものかと云ふ事は今こゝで喋々せず其の事であるが、
順序として一應簡単に云つて見れば、發信所で一つ大きな電氣の火花を飛ばすと其周圍より空間
全體に彌漫するエーテルに一種の波動を起し、此波動はエーテルを傳はつて八方に擴がる。其有
様は丁度靜かな池の面に一つの石を投げ込んだ時、其處から起つた波が次第に大きな輪となつて
擴がつて行く様なものである。池の波紋が遂に汀に達すると、其處に浮いて居る木の葉や板片が

動搖し少時して又もとの靜平に復する。電氣の波はもとより眼にも見えず耳にも聞えぬものだが、特別な受信機にはよく感じ其器械の中で電氣の動搖が起る。此れだけの事を利用して通信の目的を達するに必要な物は、第一に發信所で電波を起す裝置、第二に電波をなるべく遠方に達せしめる様にする仕掛、第三には受信所に達した電波を受取る道具、第四には受取つた電波に感じて或はベルを鳴らし或は符號を書いて電波の來た事を知らせる器械と此四つが主なものである。

先づ第一に電波を起す爲に從來多く用ひられたのは所謂スパークテレグラフィー火花式又獨逸のテレフンケンシステムと稱するもので、即ち感應コイルを用ひて強烈なる火花を起し、其放電によつて電波を生ずるのであるが、かくして起つた波は不規則で、波の始めが強く終りが弱く消えてしまふ。もしこんな風でなく始終強さの變らぬ規則正しい波を作る事が出来れば種々の便がある。それで近年になつて規則正しい波を作る工夫が色々出來た。即ちアーク燈の陰極になつて居る炭の棒を斷えず廻轉させ、陽極には金屬の棒を用ひ、此れを水素又は炭酸瓦斯で包んでなほ強い磁力をアークの光部に作用させる。そして此陰陽兩極の間を適當な電路で接續すると此電路に規則正しい波が起ると云ふのである。又近頃マルコニ氏はアーク燈などは用ひず從來のスパークテレグラフィー火花式を少し變更すれば容易に規則正しい波を生ずる事を發明したと傳へられる。

第二に前述の發生器で生じた波動を空中に傳へる物は、アンテナと稱へて高い柱に張つた針金である。従來は此アンテナより發する電波は何れの方向にも擴がつて行くので一定の目的地の方向のみに送る事は出來難かつた。反射鏡など使つても駄目であつたが、近頃マルコニが作つたアンテナは従來の物の如く垂直に立てず却て大部分を水平に張つたもので、此れを用ふれば殆んど一定の方向にのみ波を送る事が出来るさうである。又もう一つの方法はブラウン氏の發明で、此れは三本の垂直なアンテナから同時に波を送り、三つの波を互に干涉させ、其結果或る方向に最も強い波の起る様にしたものである。

第三に受信地で電波を受取るには矢張前述と同様なアンテナを用ふるのであるが、此れも前のマルコニ式の水平なのを用ふれば何れの方向から波が來るかと思ふ判斷が出来るさうである。

第四に電波に感じて受信機を活動させる部分は最も鋭敏を要するから、無線電信の創始以來種種の工夫が出來て居る。最も普通な所謂コヒアラールと稱するものは金屬の粉が電波を受けると電氣を能く通す様になる性質を利用したもので、廣く用ひられて居る。又磁石が電波を受けた瞬間に其磁力を變ずる事を利用したマルコニ式のマグネチック・デテクターと稱するものもあつて、此れは極く遠距離の通信に限つて用ひられる。此外近頃多く用ひらるゝエレクトロリチック・デ

テクターと云ふのがある。これは硝酸を盛つた容器の内に白金の板を一枚入れ又此れに接近して極く細い白金線を入れたものである。此白金板と白金線とを連絡する電路中に電池と電話の受話器とを入れて置く。すると遠くから來た電波がアンテナから此デクターに傳はると同時に白金の間の抵抗が減じ、従つて電流が強くなつて電話器で音を發する。發信所から送る波を或は長く或は短く斷續して送れば受信機は其れに相當して或は長く或は短い音を發する故、丁度普通電信に用ふると同じ符號で通信が出来るのである。なほ此れを改良して近頃は符號などは用ひず、言語を其儘に送る所謂無線電話が出来るやうになつた。伯林とナウエンとの間十六哩の距離に試みて成效したと云ふ。其仕掛は簡單なものである。即ち發信機の方では不斷に規則正しい波を送り其アンテナに電話の送話器を接続し、受信機には前述のエレクトロリチック・デクターを用ふればよいのである。遠からず大洋にある船舶と電話が出来る時が來るだらう。

なほ受信機として白熱燈を用ふる所謂グロウランプ・デクターと云ふのも出來た。普通の白熱燈の炭素線の外圍に此れと觸れぬ位の金屬筒を着せたものである。今電燈を點すると、灼熱した炭素線から陰電氣を帯びた所謂電子と稱する微細なものが飛び出して金屬筒に附着する。此時炭素線と筒との間に交番電流を通ずると、筒から線の方へ陰電氣が通ふ事が出來ぬ爲、電流は最

早交番でなく、直流に變じるのである。受信機のアテナに電波が來れば急速な交番電流が起る、此れを白熱燈デテクター及び電流計或は電話の受話器に接續すれば極く微弱な電波でも感じるから遠距離の通信には都合のよいものである。(明治四十年九月十七日、東京朝日新聞)

天然色寫眞新法

今度佛國のリユミエール會社で天然色寫眞の種板を賣出した。唯一枚の板で眞物同様の色彩が寫されると云ふのが此種板の優れた特色である。風景なり人物なり、此れで撮つて適當な藥液で現像すれば蒼い空に浮く雲も、森の緑、野の花の黄紅白紫、乃至は美人の頬の櫻色でもすぐに種板に現はれると云ふのは愉快である。

同會社で此發明に成效し愈々種板として賣出す今日迄には三年間の苦心をしたと云ふ。今此種板の製法より、如何にして原色が寫るかと云ふ事を述べる前に、先づ從來の天然色寫眞はどんなものかと云ふ事を簡單に御紹介したい。

天然の色彩を寫したいと云ふ事は寫眞と云ふものゝ開闢以來の希望であつたが、始めて一つの名案を出して喝采を博したのは佛のリップマン氏である。氏の考案は光がエーテルの波動だと云

ふ事を基礎としたもので、理論上實に巧妙なものである。そして單に考案を立てたばかりでなく、實際に色の寫つた寫眞を撮つて當時の耳目を驚かせた。其方法は、一種特別な種板の裏を水銀で蔽ひ、此れで普通寫眞の様に撮影した後現像すれば、種板を通つて水銀に當る光線と、それから反射する光とが互に干涉して種板の薄い膜の中に微細な縞が出来る、此縞の精粗は光の色によつてちがふ。かくして得た板を適當な方面に照して見れば、此縞の爲に起る光の分散によつて原色が見えると云ふのである。此れは大變にうまい法だが難儀な事には此種板を作るのが中々六かしい。そして強い光でないとよく感じぬ、普通の花や人物でも撮るには非常な長時間かゝる。其他いろ／＼六かしい事があつて普通の人の手に畢へぬ方法である。それでリップマン氏は昨年第二の方法を案出して發表した。其方法も理論上面白い法であるが、出來上つた板を其儘見るのではなく、かなり面倒な器械で覗いて見なければならぬので、到底一般には行はれさうもない。

先づ從來の天然色寫眞で稍成效し、且つ用ひられたのは、雜誌の口繪などで御馴染の三色版である。此れは多くの人の知る通り一枚の繪を得る爲に三枚の寫眞を撮る。それ／＼ちがつた色硝子の障子で天然の色を三通りに濾し分け、別々に撮つた三つの寫眞版を赤黄青の三色で重ね刷りにすると云ふ趣向であつて、繪具の調合などが巧にゆけば相應に天然に近い色が出来る。なほ此

種のものには一枚の原色版の爲に六枚以上種板を使ふのもあるさうな。

しかるに今度新發明の種板は唯の一枚で原色が寫るのが面白い。此方法の種明しをすれば、高尚な學理も何もない。唯三色に染分けた澱粉を使つて一枚の板を三枚に代用するだけの手品である。

先づ細かい粉のよく揃つた澱粉を青赤黃の三色に染め分け、此れを適當な割合で丁寧に混合する。すると三色の粉はすつかり一様に混じて最早三色は別々に見分けが付かず、一體に灰色を帯びて見える。此混合した粉を硝子板の表面に一樣に篩ひかけて後押し付けると三色の粉を不同なく板の上に密布し、顯微鏡で見れば全體がモザイクの様になつて居る。此上に假漆^{プロミス}を薄くかけ又其上に感光液をかけて乾かせば種板は出來上つてしまふ。さて此種板を普通のカメラに入れ藥の引いた方を後にして撮影する。もし種板の一點に青い例へば空の色が寫つたとすれば其色の光は青の澱粉だけしか通らぬから、従つて青い粒の裏に當る部分だけが感じて現像すれば其處の銀が還元する。此板を適當な酸で洗へば、還元した銀は洗ひ落されるから青い粒の裏だけが透明になる。しかる後全體を又還元液に浸せば、銀液の残つて居た部分即ち赤と黃の粒の處は黒くなるから、結局其點は青い粒だけが見える様になる。即ち青い空の色が寫つた事になる。赤黃の色に

ついても同様である。又他の複雑な色ならばそれに相應して三色の粒の處が或は薄く或は濃くなつて居るが、粒が細かいから肉眼には唯此三色の混じた複色が見えるのである。

今日の處では硝子板に撮れるだけで、紙に寫す事が出來ぬのは残念であるが、兎に角巧妙で有用な發明として歓迎すべきものであらう。有志の方は早速取り寄せて試みる事をお勧めし度い。

(明治四十年九月二十一日、東京朝日新聞)

ムーア燈

一個の電燈の長さ數十尺より二百尺に達すると聞いては誰しも驚かぬ人はあるまい。此の驚くべく長い管で出来た電燈は、其發明者デー・マクファアラン・ムーアの名に依つてムーア燈と名けられて居る。始めて此燈が世に出たのは既に十餘年の昔であるが、其後段々に改良を加へ、漸く實用に適する様になつたのは昨今の事である。近頃英國で著名の某大旅館に此れを點じた爲、急に世間の注意を引く事となつた。

こんなに長い電燈を何の爲に作るだらうかと尋ねて見ると、此れは物好きでも酔興でもない。つまり、なるべく大きな光源を作つて、物の陰影をなくし、晝を欺く様にしたいからである。普通の電燈、其他のあらゆる燈火は、光を出す部分が小さいから、此れに照される物體の陰影は大きくて暗い、澤山の電燈を點じ連ねても、どうしても室の隅、器具の隈には光が行き渡らぬ。そ

れでもし一室の内をぐるりと取り巻く大きな硝子管の中が一體に光る様なものが出来れば、此不便を餘程なくする事が出来るだらう。こゝに述べるムーア燈は正に此注文に應じて出来たもので、室ならば其鴨居の後に隠れた長い管が、一面に光を放つて天井を照し、室内は不夜の境となるのである。

此燈の構造を簡単に云へば、長い硝子管内の空氣を大部分抜いて稀薄にし、其兩端に挿し込んだ電極から電流を通じて管内の空氣を光らせるに過ぎぬ。空氣の代りに他の瓦斯を入れることもあるが、要するに稀薄な瓦斯中を電氣が通る際に、其瓦斯が光を放つと云ふだけのことである。然るに此の如き管に少時續けて電流を通すと、中の瓦斯が段々に稀薄の度を増し、遂に或度に達すると電流は通らなくなり、従つて光も消えてしまふ。其れ故不斷に光らせる爲には、時々必要に應じて少量の瓦斯を管内に補給する仕掛が是非共入用である。此目的で工夫された巧妙な自動的の開閉瓣を簡単に説明すれば次の様な仕掛である。即ち管内が稀薄の度を増して電流が弱くなると同時に瓣に附屬したコイルの電流が強くなつて、瓣の一部の鐵片を引き上げる。すると鐵の浮いて居た小管内の水銀面が下つて瓣の細い孔が露出し、此處から瓦斯が侵入して稀薄の度を減じ、管が光り始める。同時に前記の鐵片が落ちて水銀が上り、細孔に蓋をすると云ふ工合になつ

て居る。

此燈の光の色は管内に入れる瓦斯を巧に調合すればどんな色でも勝手に出来る。例へば空氣のみならば美しい桃紅色、窒素ならば黄色である。もし空氣を管中に入れる前に燐の中を通してやれば非常に美しい黄金色になると云ふ。又炭酸瓦斯を用ふれば太陽の光と同じ純白色となる。但し此白色の光を出す爲には同燭力の黄色の光を出すに比べて殆んど倍の費用を要する故、餘り經濟ではないが、しかしリボン商等の如き、晝夜色染の貨物を取り扱ふ家では、此白光は非常に有用なものであらう。

なほ此燈の利益な點を舉げて見れば、第一前記の如く室の隅に迄明るくなる故、倉庫の中などに此れを點すれば、貨物の出し入れに暗さを啣つ心配はなくなる。次に此燈の光は普通電燈の如く一點から出るのではなく、廣い面積から出るので、光が柔く眼を害する恐れがない。次に此燈の壽命は四千時間以上で普通白熱燈などよりは數倍長く持つと云ふ利益がある。其他電力の經濟も、他燈に優るとも劣らぬと發明者は云つて居るが、此點はなほ試験を重ねた後でなくては判然せぬものと見ねばならぬ。

最後に少々此電燈の不都合な點を述べて見れば、かういふ長い硝子管の一箇所でも一寸罅裂が

入れば全體が駄目になる。いざ急に取り換へると云つても、こんな長大なものは即座には取り付けられぬ。故障が起つたが最後、不夜城は闇になる騒ぎである。又此燈に用ふる電流は高壓を要するから、交番電流を用ひ特別の變壓器を使ふ故、多少此點でも價が高くなると云ふ事である。

(明治四十年十月一日、東京朝日新聞)

寫眞電送の新法

電信機が出来てからは、一本の針金に託して書を千里の外に寄せる事が出来る。電話機が發明されて以來は、一雙の銅線に依つて思ひを百里の境に通はす事も出来る。此頃は又寫眞電送機と云ふものが成效に近づいて寫眞畫圖の如きものを一瞬間に遠距離に送る事さへ思ひのまゝにならうといふ事である。

數年前より獨逸のコロン氏が研究を重ねた末今年に至つて略成效した。所謂コロン式寫眞電送機の事は既に我邦の諸新聞雜誌に掲載せられた事があるので事新しく述べる必要もないが、簡単に云つて見れば先づ次の様な仕掛である。今送らうと思ふ寫眞をゼラチンの膜ツイルムに複寫して此れを圓筒形に巻き、筒の中心に軸をつけて廻轉するやうにする。丁度昔の蓄音機の蠟管のやうに、廻りながら一方に進行させる。筒の中にはセレンニウムの紐を螺旋形に卷いたものがあつて、此れか

ら出た針金が電池と目的地の受信機とに接続して居る。圓筒の外線には小さいアーク燈があつて強い一條の光線を送り寫眞の膜を通じて筒中のセレンウムを照す。そこでもし圓筒を徐々に廻せば、光線は膜の諸點の濃淡に應じて或は強く或は弱くセレンウムの感光器を照すやうになる。然るにセレンウムの奇妙な性質として、其電氣抵抗は此れを照す光の強弱に應じて或は減じ或は増すので、目的地に通ずる電流も亦此れに應じて増減するのである。受信機の方では此電流を受けて小さい電燈に通じ、其明滅する光線の一線をば發信機のと同じ様な圓筒に巻きつけて廻轉する寫眞の膜に投ぜしむる。さすれば發信機の原板の濃淡の度に應じて受信機の膜の光に感ずる度を異にして居るから、此れを現像して焼き付ければ直に原板の寫しが出來上ると云ふ譯である。

此發明は一時世界を驚かして諸國の新聞を賑したが、極く近頃此機械の向ふを張つて佛國に現はれたカルボンネル式と云ふのがあつて、此れはまだ全く成效の域には達せぬが、兎に角耳新しく其仕掛も巧妙と思はれるから其概略を御紹介し度いと思ふ。

カルボンネル式では、セレンウムの如き取扱ひの六かしいものは少しも用ひず、有りふれた道具立で出來る處が一寸面白く思はれる。即ち送らうと思ふものが寫眞ならば、此れを薄い金屬板に焼付け此れを前のコルン式同様に圓筒に巻く。そして尖つた針の先を此圓筒に觸れしめ此針よ

り金屬板を通じて電流を送り此電流を目的地に送る。受信機の方では此れを電話の受話器の如きものに接続する、受話器の薄い鐵の圓板の眞中に固着した針が一本あつて此れが原板の寫しを畫くペンの役目をするのである。寫しを取るには蠟又は鉛の筒或は複寫紙を卷いたものを廻轉軸にはめ、其表面に前述のペンが乗つかつて居る。今發信機の圓筒を廻轉すると同時に受信機のを廻せば、原板の燒きの濃淡に應じて電流が變り受信機のペンが上下して即座に寫しが出來上ると云ふのである。

此機械はまだ尙研究中であるさうだが成效すれば便利なものである。コルン式に優る點は電送に要する時間が短い事で、例へばコルン式では縦十八糎横十三糎の寫眞を送るに十二分を要するが、此式では縦十八糎横九糎のを送るに八十秒で足るといふことである。

(明治四十年十月七日、東京朝日新聞)

宇宙の二大星流

我邦のやうな濕氣の多い土地では、空が本當によく晴れ切つて天の河原の砂も拾へさうな夜は年中で僅かしかない。先づ十二月から正月へかけて二ヶ月位なものであらう。天文學者は此機を利用して觀測に耽り、詩人宗教家は此間に星月夜の美觀を唱ひ造化の偉大を頌へる事が出来る。それで時節柄天體の運動に關する最新の大發見を一寸こゝで讀者に御紹介しておき度い。

小學校や中學校で教へる天文學では、大小無數の恆星も其一なる太陽も動かぬものとなつて居る。吾等が棲む地球は其姉妹なる諸遊星と獨樂の様に廻りながら太陽の周圍を斷えず週遊して居るのであると講釋する。なる程これで大體は正しい。春夏秋冬晝夜の別は勿論の事、複雑な諸星の行動も遺憾なく理解する事が出来る。しかし太陽も滿天の恆星も全く動かぬと云ふのは、實は、嘘ではない迄も人を見て法を説く小乗の方便である。動かぬ處か大に動いて居る。いやどんなに

速い鐵砲玉でも追付かれぬ位な速度で空間を飛んで居る。そんなに動いて居るものを動かぬなどと教へるのは不埒千萬だと御咎めになる方があれば、それには次の様な辯解をしなければならぬ。先づ大きな汽船に乗つて遠洋へ出たとする。四方見廻す限り陸地の影も見えぬ、唯水平線上に幾筋かの横雲が靜に横はつて居ると想像する。此時船中の食堂で卓を圍んで皿の肉をつゝいて居る人には船が進んで居ようが居まいが何の痛痒も感ぜぬ、船が動けば皿の肉も其れを食つて居る自分自身も矢張一緒に動いて行くからだ。其時「オイ君の食つて居るビフテキは一時間三十哩で走つて居るぜ」と教へるのは少々馬鹿氣て居るではないか。小學校や中學校で太陽系を説くのは「度船中で船内の事のみを教へて居る様なものである。夫から又船が一直線に進んで居る時遙な水平線上の雲などを見て居れば雲も動かす船も動かす、いつまでも同じ處で波を切つて居る様な氣がする。此れは雲が遠いからである。それと同じ様に凡ての恆星は非常に遠いので太陽系が此れに對して移動して居る事が短い年月の間には認められぬのである。しかし事實は何處までも事實であるから皿のビフテキは矢張飛んで居る、食つて居る人は此れを追つ驅けながら平氣で居る。ビフテキばかりか船も飛んで居る。海も陸地も地球と一緒に凄じい速度で太陽のまはりを飛んで居る。太陽は又地球其他の遊星を牽ゐて天の一方リーラ星座に向つて突進して居る。此事を始めて

氣付いたのは英國のハーシエルと云ふ星學者であつた。一見動かぬと思はれる恆星をよく調べて見ると實は少しづゝ動いて居る。少しづゝと云ふのは遠い地球から見て云ふ事で實は驚く可き速度で動いて居る、がどの星もみなリーラ星宿から外へ向いて散開しつゝある様に見える。此れを畢竟するに太陽系が此星座に向つて進んで居る爲、丁度船が港に近づく時眼前の景色が目指す埠頭を中心として展開すると同じだと説き、爾來誰れも異議を挿むものがなかつた。ハーシエルの調べた結果によれば太陽は半時間に一萬哩位の速度で飛んで居る、一日たてば四十八萬哩だけ目的地に近寄つては居るが其行先は餘りに遠い虚空の果で、百年や二百年短日月では一向近寄つたやうにも見えぬのである。

ハーシエルの發見も今は昔となつた。近頃和蘭グロニンゲンのカプタイン博士等は、從來多年の觀測の結果を綜合して精細な研究を遂げた末に、天體に散布せる諸恆星は自ら二派の流れに分れて居る事を發見した、即ち天體各部の星の運動が目指す方向を反對に延長して見ると略定つた二つの星座に集注する。一群の星は前述のリーラ星座より發して四方に展開しつゝあるが如く、他の一群は北天カメロパルダリス星座の邊より馳せ出るやうである。つまり大小の群星には二つの黨派があつてそれ／＼の根據地より出で、互に入り亂れつゝも目ざす處に馳せ行くが如き有様

である。然らば吾等諸遊星の組頭とも云ふべき太陽はどちらの黨派に屬して居るだらうかと云ふ疑問が起る。悲しい事には吾々太陽の陪臣微々たる人間の目には堂々たる太陽の歩武がどちらに向いて居ると云ふ事がはつきり分らぬが、唯周圍に動いて居る諸星の中でリーラ派のは速く動く様に見え、カメロパルダリス派のは割合に吾等と歩調の差が少く見えるから、先づ吾等は後の派に屬するものと考へねばならぬ。

ハーシエルはリーラ座より發する如き諸星の運動のみを見て此れは太陽が此星座の方に動いて居る爲だと解釋したが、カプティン一派の考へでは天體には二つの大きな星の流れがあつて二つの方向に交叉して居ると云ふのである。此説が一般に採用されるかどうかと云ふ事はなほ他日を待たねばならぬが、兎に角天體の運動に關して光明を與ふる一大發見と云はねばなるまい。

かう云ふ説を聞いて星夜の空を仰いで見る。そしてあの小さな美しい星が我が地球の何百萬倍も大きな火の玉で、それが何萬となき群になつて無邊の宇宙の果から果に測り難い使命を帯びて急いで行くのだと考へると、一種妙な心持になるのである。

(明治四十年十二月十四日、東京朝日新聞)

雪の話

雪の降るのを飛絮の如しとか鷲毛の如しとか形容するのは面白いが科學的ではない。

雪の形

試みに降る雪の一片を帽子なり袖なりに受けて細かに驗査して見れば綿や毛の様なものではない規則正しい六稜形の結晶を成して居る事がわかる。肉眼では此れ以上の事は分りかねるが、一度顯微鏡下に照して此小さい雪片を見れば誰しも其美しさに驚かぬ人はあるまい。いづれも六稜或は稀に三角形の氷の薄片であるが、其規則正しい輪郭は千變萬化で如何なる美術家でも此れだけの變つた形を作る事は出来さうにもない。輪郭の美しいばかりではない、此氷片中に縦横に細い溝が規則正しく通つて様々の紋理を見せて居る。もし物好きな人があつて此模様を散らした着

物でも作れば屹度面白い物が出来るだらうと思はれる。此結晶の形に就いては昔から随分多數の人が研究したものであるが、近頃アメリカの人で二十年の月日を此研究に委ね數百種の結晶の寫眞を集めた者がある。そして其の雪の降る時の天候や雪雲の高さ又は風向などによつて結晶の形に如何なる相違があるかと云ふやうな事を比較研究し、斯學の上に少からぬ貢獻をしたと稱せられて居る。

雪はどうして出来るか

雪はどうして出来るものかと云ふ事は誰も知り度く思ふ事である。此れはつまり比較的暖かい地上近くの空氣が溫氣を含んだまゝで氣流につれて上昇し、高層の氣壓の低い處へ行くに従つて膨脹して冷えて來る、或處迄行くと雲と凝り雨になつてしまふ事もあるが、極く寒い時には此れが直に凍つて小さい雪片となり此れが次第々に大きく生長する。雪片の極く大きいのは時として直徑一寸程になる事がある。かういふ薄片が澤山に集合したのが所謂鷲毛となつて舞ひ下りて來るのである。こんなに雪片がくつつき合つて居るのはつまり寒氣が左程ひどくなくて雪片が温まつて居るからなので、極くく寒い攝氏零度以下二十餘度にもなると最早雪片に濕り氣がなく

従つてみんなバラ／＼に粉の様になつてしまふ。それからなほ一層寒い時又輕氣球などで極く高い空中に昇ると時として針のやうな細長い雪がキラ／＼と降るを見る事があるさうな。

空中で雪の始めて出来る處の高さは土地によつて非常の差があつて、例へば南米のアンデス山あたりでは一萬八千尺程の處にあるが極北に近くなれば千尺位の處もある。

雪 雲

天氣のよい日空際遙に眞白な雲が刷毛ではいた様に或は細かい鱗の様に棚引いて居る事がある、あの雲は普通の低い雲とはちがつて皆雪片から出来て居ると云ふ。又寒中などに太陽のまはりには量が出来て其輪の横に光つた處が出来恰も日が二つも三つも現はれた様に見える事がある、あれも矢張り空中の雪片が太陽の光を曲げ或は反射する爲に起る現象である。

雪と水との量の差異

降り積つた雪を一時に解かして水にしてしまつたらどれだけの水になるかと云ふ事は實際上要用な事であるから此事を研究した人は澤山ある。先づ新しく降つた雪が一尺積んで居れば此れを

解かして水にすればザット一寸乃至八分位の深さになる。しかし高山などに積んで數ヶ月も解けずに居るのだと段々に質が密になつて一尺の雪が五寸位の水に當る様になる。なほ一層永く降り積つて所謂氷河などになればもう殆んど氷塊と變りがなくなるのである。

白い雪、赤い雪、緑の雪

雪と云へば白い物と相場がきまつて居る。雪が氷の様に透明でないのはつまり雪片の中に空隙が澤山ある爲で、丁度ガラスの粉が眞白な様なわけである。處が極北に近い終年雪の絶えぬ處では時として赤い雪や緑の雪が見られる。此れは雪の中に生きて居る微細な藻類の爲に色が着いて居るのださうな。

雪は豊年の貢

雪は豊年の貢と云つて作物の爲になると稱せられて居る。冷い物が地面に降つて作物の害にならぬのは一寸考へると不思議だがそれはかう云ふ譯らしい。冬の晴れた夜には地面は盛に温熱を放散して冷却し、雪などに比べては遙に低い温度に下つて土は凍つて作物の芽も凍死する事があ

るが、雪で蓋をすると此過度の冷却を遮られ却て凍死を免れるのである。

火星の雪

序に此れは少し吾々人間に縁遠い話だが、火星の南北兩極に當つて白い處が見える。此の白い部分が時期によつて或は大きく或は小さく消長するので、此れは多分我が地球と同様に兩極は雪で蔽はれて居るのだらうと云ふ事になつて居る。其の大きさの消長するのは夏冬で雪が解けたり積つたりする爲らしい。

(明治四十一年四月十日、東京朝日新聞)

相撲と力學

學力と撲相

力學と云ふのは物體に作用する力の釣り合ひや力の作用によつて起る物體の運動を數學的に論ずる六かしい學問である。天地萬有が活きて動いて變化して居る間は此力學の應用はあらゆる學術技藝に一日も缺く事は出來ぬ。相撲は人間の體力の活技で、一方から見れば靈妙な複雑な器械の戦ひである、何れにしても運用する力は所謂機械力で、力の作用する目的物は質量を有する物體だから矢張り相撲も力學の廣い繩張の中へ入れても好からうと思ふ。人體諸機關の活動を支配する腦神經の作用は別として、人間の五體殊に手足の如きものを力學的に見れば唯複雑な槓杆の組み合せだと云ふことも出来る。槓杆の效用は人の知る通り、昔の力學者が「適當な支點を與へてくれ、ば地球もころがして見せる」と威張つたのは槓杆の效能を極端に云つたものである、だから適當な槓杆と支點を與へれば蛇の力で大象も動く、美人の纖手で横綱も釣上げられる。併し

四本柱の中で使用を許されて居るのは人間が生來持參の槓杆ばかりであるから槓杆に制限があつて破天荒の藝は出來ぬが、有りだけの力を出來るだけ有效に使つて強敵を倒さうといふ場合にはつまり槓杆の原理が役に立つて來る。されば敵手の身體の何處を捕へて何處に力を加へるが有效かといふ四十八手の裏表には數學者のひねり出した力學上の原理が籠つて居る、力士は知らず知らず此原理を應用して居るのだ。更に四十八手を分析したら槓杆の原理のみならずあらゆる力學上の原理の應用が見つかるに相違ない、例へば體量の少い力士が大きい敵手にぶつかる場合には速度の大小でどれだけの効果があるかといふ事或は敵の運動量を利用して強敵を倒す事など物好きな學者の研究によつて明かになりさうな事である。西洋には斯う云ふ事にも熱心な學者が多く、玉突、テニス、砲丸投等の技術を力學的に研究した例は乏しくない。相撲が特有の國技である以上はどうか我國の學者の研究によつて四十八手の力學を明かにしたいものだ。

(明治四十一年五月二十八日、東京朝日新聞)

蚊帳の研究

自分は蚊帳が嫌ひである。しかし蚊に責められるのはそれ以上に嫌ひだから仕方なしに每晚此のいやな蚊帳へもぐり込んで我慢して居る、そしてもう少し暑苦しくない心持のよい蚊帳が出来ぬだらうかと思ふ。一夜寝ながら色々考へて見た。

第一に蚊帳の内と外とで温度がどれだけ違ふだらうかと思つて夜中に寒暖計を持つて出たり入つたりして見たが残念ながら大した差はなかつた。しかし人體に感ずる暑さは必ずしも寒暖計の示度許りでは分らぬ。空氣の流通の善悪が大に關係する。氣温は高くても風があれば涼しい。處が蚊帳が此風を邪魔するのは確である。風のある宵に蚊帳の内と外とで煙草をふかして見ても知れる。それも其筈である。風のエネルギーは第一に蚊帳を煽るに費され網の目を抜ける時に摩擦で消される。

蚊帳が幾分でも空氣の疎通を妨げるとすれば二三人も狭い蚊帳に寝て居れば炭酸瓦斯の分量も外よりは多くなるかも知れぬ。しかしこんな試験は素人では出来ぬ。

一體蚊を防ぐのが目的ならばもう少し目の粗い布を使つたらよさうなものである。試みに宅の蚊帳の目を數へて見たら一寸四方の中に平均九百ばかりの目がある。いくら小人島の蚊でもこんな細かい目を潜つて侵入する奴はあるまい。木綿の幌蚊帳の方を數へたら此れは四百位であつたが此れでも細か過ぎると思ふ。成程布の目には粗密がある、長く使つて居れば處々に目の大きい處が出来て其處から蚊がはいるかも知れぬが、それにしても今日一般の蚊帳の目は細か過ぎて居る。

蚊帳の色は一般に萌黄と相場が極つて居る。何故萌黄に限つたのだらう。見て涼しいといふ點ならもう少し涼しい色はいくらでもある。透して外の物が能く見える爲ならもう少し黒い色がよからう。蚊帳の色も何とかし度いものである。

蚊帳を釣ると上が垂れて鬱陶しい。此れも何とかしたい。眞中で釣手をつけて天井へ釣るか夫とも外に工夫はないだらうか。

蚊帳を組立てゝ居る纖維の表面はよせ集めると中々廣い。此表面にはあらゆる黴菌が附着して

居ようと思ふ。中には有害な菌も居よう。殊に時候が夏丈けに氣味が悪い。もし有害菌が澤山附着して居れば何か適當な殺菌劑でも塗布した方が安全である。此れも衛生學者の研究を願ひ度い。雷鳴の時に蚊帳を釣つてもぐり込むのは誰れが考へた事かしらぬが、唯の迷信とちがつて存外理窟に合つて居る。電氣の導體ですつかり包んだ中へは外からの電氣作用が及ばぬといふのは定則で、或學者は此れを證する爲に自身で金網の中へはいり外から恐ろしい強い電氣の火花をボンボン飛ばしたが中に居た先生には何の事もなかつたといふ事である。しかるに麻布殊に濕氣を帯びたのは可也よい電導體で蚊帳は其網である、落雷は即ち強い電氣の火花だから論理上蚊帳は落雷の時の防衛になる事になりさうである、しかしどの位の程度迄有效かといふ事や、麻、木綿、絹等の比較などは専門の學者の研究を待たねば分らぬ。此れも序に御願ひし度いものである。吾々が今日の蚊帳に満足せぬ迄も苦情を云はずに每晚釣つて寝て居るのは、吾等の親も其親も此れを釣つて寝たといふだけの理由で、蚊帳といへばこんなものとあきらめて居るだけの事であらう。決して理想的の蚊帳ではない。玩具の繪具を檢査し、猫とペストの關係を研究する世の中である。蚊帳の問題といつても唯閑人の寢言と思はれては残念である。

(明治四十一年八月十八日、東京朝日新聞)

天河と星の數

天の河が無數の星の集合したものだといふ事は今日では誰れも知つて居るが、何故にあの様な帶狀をなして密集して居るかといふ事は一寸分らぬ疑問である。此疑問はやがて天體の構造如何といふ事になるので、昔から幾多の天文學者の想像力を逞しうする種になつて居た。或る人は天體の星は扁平な薄い長方形の中に散布して居て、其中程に我が太陽系が居るものと想像した。斯う云ふ扁平な板の様な天體の中央に居て八方を眺めたと假定すると、板の面に沿うた方向には澤山の星が重なつて帶のやうに見える筈で此れが即ち天の河である。しかし板の面に斜な方向にはいくらの厚みもないから、従つて見える星の數も少いといつて説明した。此れは面白い考へではあるが確にその通りだといふ證據もない、唯一つの想像説に過ぎないのである。想像だけでは物足りない、確な事實を捕へたいといふのが學者の願である。しかし事實を得るのは寢て居て考へ

るだけでは出来ぬ仕事である。近頃白耳義の天文臺年報にストローバンといふ人が出した「銀河に對する星の分布」と題する論文の抜書を見ると、驚くべき學者の根氣の結果が現はれて居る。問題はつまり銀河に對して天球を數千の區劃に分ち各區中の星層の數を數へるといふのである。此れが爲に用ひた天體圖や寫眞に含まれて居た星の數は百萬を少し越えて居る。それでも全體の天球の十分一位を數へたに過ぎぬので、すつかり數へ上げるにはまだどの位かゝるか分らぬ。しかし此れだけの研究によつて天の河を距れるに従つて星の密集の度が減ずる模樣が餘程よく分つて來たのである。宇宙に關する吾等の知識を増すだけの目的でこんな面倒な仕事を擔はずに續けて居る學者の熱心を多とすべきものではあるまいか。(明治四十一年八月二十四日、東京朝日新聞)

卵の形

卵形といへば一方が少し尖つた長圓い形にきまつた様なものであるが稀には圓形の卵もある、
龜、梟などが其例である。又鶺鴒やかいつぶりの卵などは殆んど兩端の丸みが同じで橢圓形をして
居る。しかし一般には殆んど所謂卵形で一方が尖つて居る。特に著しいのは千鳥や海鴨などの
ある。

こんな風に卵が色々の形をして居るのは何故だらうと物好きな學者は研究したものである。先
づ自然淘汰の結果として説明するものが多い。例へば海雀の卵は多く絶壁の岩の上に産まれるの
で圓錐形に尖つたのゝ外は岩から轉げ落ちてしまふと考へられて居る。又片方の尖つて居る方が
親鳥の腹の下へ澤山詰め込むのに都合がよいからだといふ説もある。

處が近頃此事について斬新な力學的の方面から説明を試みた人がある。一體卵が産み出さるゝ

前にどんな道筋を経て來るかといふに、始め卵黄だけが輸卵管へ出て來ると、其處で白味が來て取り卷く、此れに膜が出來て其上に殻が分泌され管から押し出される内に固まつてしまふ。此の如く卵が出來上る迄には管の内側から始終に壓迫を受けて居る。管壁の摩擦に打勝つて卵を押し出す爲に卵の後方の環状筋を斷えず收縮して卵殻を壓しつける。それだから輸卵管の割に卵が大き過ぎる程壓迫が烈しいので卵の後方が小さく尖つて來る。とかういふ考へで力學的の數式を以て卵の形を現はし、種々の場合を詳論して居る。

こんな議論が實用上どういふ價值があるかは分りにくい、唯生物界の現象を説明するに力學を應用する様になつた率先者の一人としてこゝに御紹介する其學者の名はダルレー・ウエントウオース・トムソンといふ。此論文は去る四月倫敦の動物學會で述べたものである。

(明治四十一年八月二十六日、東京朝日新聞)

猫 六 題

此頃猫の話が流行るからこゝにも少しばかり集めて見る。

猫と三味

三味の音は何處で出るといへば無論三筋の絃から起るが、絃自身から直接に空氣に傳はる音は割合に弱いものである。大部分の音は絃につれて振動する胴に張つた皮から空氣に傳はる。單に絃を張つた皮のみならず裏の皮からも傳はる。それだから三味を弾く時には裏の皮を身體にくつつけては駄目な譯であらう。要するに三味線の音の大部は胴に張つた猫の皮から出て居るのである。

猫のピアノ

昔物好きな人が猫ピアノといふものを作つた事がある。箱の中にいくつも仕切をして其中に一つ猫を入れて置く。箱の前の鍵盤のやうなものゝ一つを指で押すと横杆の仕掛で一正の猫の尻尾をぐいと押す。すると猫がにやあと鳴く。數正の猫がそれゝ高低の異つた鳴聲を出すやうにしてあるので、うまく鍵盤をたゝいてやれば猫の音楽が出来るといふのである。嘘の様な話だがかういふ話が残つて居る。

猫の宙返り

猫を倒につるして高い處から落せば空中でくりと身をかはしてうまく四つ足で立つ。此れは何でもない様な事だが、どうして猫が廻轉するかといふ事は昔から物好きな學者の間で眞面目な問題となつて居る。猫の落ちる處を活動寫眞にとつて研究した人もある。先達て獨逸の或る科學雜誌に猫の宙返りの眞似をする雛形が載せてあつた。厚紙か何かの筒の横腹から四つ足を出したものが猫の胴になり其一端に薄つぺらな短い尻尾が付いて居る。此猫の腹の眞中にある穴から絲

が出て居る。此絲で雛形を倒につるす。其時尻尾は下に垂れて居るが絲を切つて落すと同時にバネ仕掛で尻尾がくると百八十度廻轉する、其はずみで胴體も宙返りをして四つ足で立つといふのである。尻尾の短い殆どないやうな猫はどうするだらう。

猫と電氣

二つの物を互に摩擦する時一方に陽電氣が起れば相手の方には陰電氣が起る。しかし同じ物でも擦り合せる相手に依つて或は陽になる事も又陰になる事もある。例へばガラスなどは絹で摩擦すれば陽電氣を帯びるがフランネルで擦れば陰電氣を生ずる。處が猫の毛皮は大抵の物と摩擦すれば陽性になるにきまつて居る。ネルとでもガラスとでも又絹とでも何が相手になつても陽電氣を生ずる。それで昔の電氣學者が種々の物體を陽陰の順に列舉した時に猫の皮を陽の方の首位大關の位置に上げた。其後靜電氣の實驗に猫の皮は付き物となつたのである。

猫の保護色

猫の中に眼瞼の上の處だけ色がついて、眠つて居る時でも一寸眼を明いて居る様に見えるもの

がある。或人は此れを一種の保護色の例であると論じて居る。

猫の智慧

或人の飼猫は主人の居室で椅子の上に登つて呼鈴のボタンを押しボーイを呼出す癖があつた。又或猫は料理番が臺所で居眠りをして火事を起しかけたのを主人に急報した。それから夜しめ出しをくつた時入口の戸をコツ／＼叩く猫もある。又子を生むといつても其子を取り上げられるので色々隠し場所を變へた末に、とう／＼主人の書齋の書棚の奥に隠した猫もある。

(明治四十一年九月五日、東京朝日新聞)

萬年筆

電話で説教

近頃北米テキサス州のフォートウォースといふ町で電話を使つて説教した牧師がある。自分の受持の寺院で大勢の聴衆に對して説教すると、其聲は同時に電話で市中の各所へ配布された。其配布先は飲食店が五六軒、商館が十二三軒、私宅が五百軒ばかりと役所が二十箇所程であつた。

(明治四十一年八月二十八日、東京朝日新聞)

クロロホルムの作用

近頃英國で犬にクロロホルムを種々な方法で與へて其作用を試験した人がある。此藥劑を飲ま

せ又皮下に注射すると肝臓の機能を害して中毒の症状を起すが、其蒸氣を呼吸させると体内の蛋白質の分解を促し却て肝臓の機能を興奮させる。其譯は肺臓へ吸入されたのは速かに吸收され速かに排出されるが其他の方法で與へたものは長く肝臓に停滞する爲であるとの事である。

(明治四十一年八月三十日、東京朝日新聞)

發電所は難破船

メキシコの南隣グアテマラの西海岸の一小市で近頃電燈を點する様になつたが、其中央發電所は同市の海岸近くに坐洲した獨逸の汽船である。此船は砂の中へ深く埋れて引却しの見込はないが、幸に其船中に備付の發電機と一つの汽罐とが無事であつたから其儘此れを利用し、海岸迄線を引いて市中を照して居るさうな。(明治四十一年九月六日、東京朝日新聞)

軽い雙眼鏡

今度倫敦のネグレッツチ・アンド・ザムブラで賣出した新形の雙眼鏡「ミニム」と云ふのは従來の雙眼鏡中で最も軽いものである、其倍率は八倍で重量七十五匁位、柔かい皮袋に入れて隱袋に

收める様に出來て居る。(明治四十一年九月六日、東京朝日新聞)

狐と鱗片

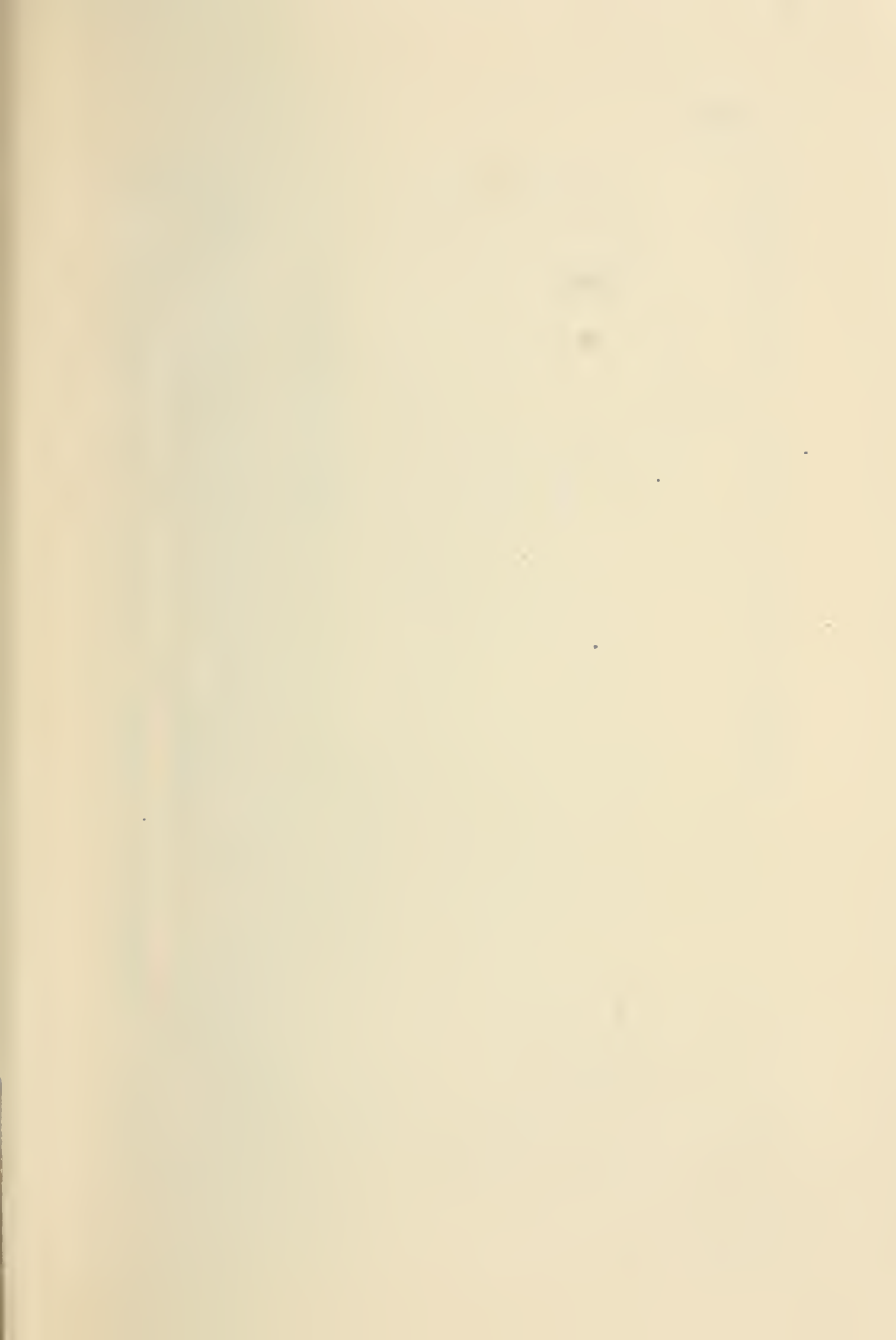
四足獸で鱗のあるものは珍らしい。せんざんかふ、蟻食ひの類に過ぎぬ。尤も鼠の尻尾も一種の鱗片で蔽はれて居るし其他身體の一部に多少の鱗片あるものはあるが、狐の先祖が鱗片を着けて居たといふ説は新しい。此説を出したのはウイennaの人である。若い狐の毛皮を詳しく調べて見ると其の毛の生え方が一種特別で數本宛束になつて一定の間隙を置いて生じて居る。其皮膚は丁度せんざんかふの鱗片を剝した跡に酷似して居るといふ。

(明治四十一年九月七日、東京朝日新聞)

空中飛行の將來

佛蘭西から英國迄海を超えて飛行する事の出來たものには一千ポンドの賞金を與へると申し出した人がある。一昨年の暮にサント・デュモンが始めて成效した時に飛んだ距離は僅に二十五米突であつたが、この頃ファーマンやドラグランジュの飛行した距離は二萬米突に近く、即ち僅か

二年の間に飛行距離は八百倍になつた譯である。此割で進歩すれば海峡を横斷する位は遠からず出来るだらうと思はれる。(明治四十一年九月十六日、東京朝日新聞)



後記

本卷には種々の短い文章を集めて収録した。

「短章その一」は總て雑誌「澁柿」に發表されたもので、「三毛の墓」「最上川象潟以後」「震生湖より」「二女の顔」の四篇を除く他は同誌の卷頭第一頁に掲載されたものである。卷頭に掲載されたものは、初めは「無題」といふ題であつたが、後には「曙町より」となつた。「短章その一」のうち「無題」の(一)から(八十六)まで、「曙町より」の(一)から(六)まで及び(八)から(十二)まで、それから「三毛の墓」「最上川象潟以後」「震生湖より」「二女の顔」の都合百一篇は昭和八年六月寺田寅彦の名を以て發行された著書「柿の種」に採録されてゐる。「曙町より」の(十三)から(二十七)まで及び「星野温泉より」の十六篇は昭和十一年三月吉村冬彦の名を以て發行された「橡の實」に收められてゐる。此等の短文は「柿の種」に於ては原の題を省略し

小さなカットを置いて印刷してある。「橡の實」の短文も同じ形式である。然し、本全集に於ては初め發表されたときの題を用ひ、同じ題名のものには(一)(二)の如き番號を付けた。但し、雑誌には一度に掲載されたものを一柿の種へ收めるとき二篇または三篇としたものは、「柿の種」に據つてそれ〴〵獨立した一篇のやうに取扱つた。「曙町より(七)」は「柿の種」には採録されてゐないのであるが、本卷に於ては其の年代に従ふ場所へ収録した。此等の文章が最初發表されたときの署名はそれ〴〵下の通りである。「無題(一)(二)(三)」「三毛の墓」は藪柑子、女の顔「は寺田藪柑子、「最上川象潟以後」は寅彦、「震生湖より」は寅日子、「無題(四)」から(十二)までは木螺先生、「曙町より(七)」は木螺閑人、「無題(三十五)」及び(三十六)は寺田木螺山人、其他は總て木螺山人である。本文の校訂は「柿の種」及び「橡の實」に據り、且つ兩著の原稿及び「澁柿」を参照した。

「短章その二」は雑誌には掲載されない短文で「橡の實」に於て初めて發表されたものである。著者は「柿の種」を纏めて後此の種の短文を所謂書きおろしで著書とする意向を持ち、折に觸れて書き溜めて行つた様である。従つて「短章その二」の初めの部分すなはち「無題(八十七)」から(百十一)までは、昭和八年夏頃から昭和十年夏までの間に書かれたものと考へられる。「無

題一（百十二）には昭和十年六月十二日の日附があり、一學界警察一は昭和十年六月と書かれてゐるから、此等の間にあるものも同年同月中に書かれたものと思はれる。此等の原稿の順序は著者が整理しておいた通りである。一死刑囚一及び一ノルマンディー一は昭和十年七月三日及び同年七月十三日の日附のあること本文の末尾に記載の如くである。

一無題一（百十四）以下は昭和十年秋著者が病を得てから書かれたものである。一無題一（百二十一）までは著書自ら認めたものであるが、一無題一（百二十一）以下は著者が口授して一柿の種一の發行者なる小山書店主人をして筆記させ、これに著者が加筆したものである。此等の原稿にはそれ／＼筆寫の日附が書かれてゐること本文末尾に記載の通りである。

此等の短文は數篇を除く他は題が付いてないのであるが、本全集に於ては便宜上一無題一とすることとした。一不審紙一、一死刑囚一の二篇は一椽の實一に於ては題を付けずに印刷されてゐるが、本全集に於ては著者自筆の原稿に據つて之を補つた。校訂は一椽の實一に據り、且つ一椽の實一の原稿を参照した。

一斷片一は總て未發表の草稿や雜記帳のなかの短文を収録した。

一一二及び一二 夢語一束一は「おぼえ帳」と題する和綴の雜記帳に毛筆を以て書かれてゐる

もので明治三十年頃のものと考へられる。

「三 其の前夜二四 秋二五」は「忍草」と題し和紙十數葉を綴じたものに毛筆を以て書かれて居り、矢張り明治三十年頃と考へられる。「五」には明かに明治三十年六月廿二日の日附が書いてある。

「六 病に就て」は明治三十二年に「ホトトギス」に發表された「祭」(本全集第一卷所收)等の草稿のあるノートブックに書かれてゐるもので、明治三十二年頃のものと考へられる。

「七」「八 白百合」「九」「十 葉櫻」「十一」「十二」「十三 草取歌」「十四 反映」「十五」は扉に「詩歌艸稿」と題し「鴨つき」(本全集第一卷所收)等の書かれてゐる和綴罫紙本に書かれてゐる。「七」は明治三十五年須崎に病氣療養中に書かれたことは明かであるが、他のものも同年療養生活中に書かれたものと思はれる。

「十六」は「根岸庵を訪ふ記」(本全集第一卷所收)等の書かれてゐる和綴罫紙本に書かれてゐるもので、大正三年、同四年及び其以後のものであるが最後の年月は明かでない。

「十七」は「知と疑」(本全集第一卷所收)等の書かれてゐるものの終りの部分にあり、大正四年又は五年頃書かれたものと考へられる。

「十八」は初めの方のものに大正八年の日附があるが、總て同年に書かれたものではないかと

思はれる。

「十九」は大正十五年前後に書かれたものと考へられる。

「歳時記新註」は明治四十一年「東京朝日新聞」に掲載されたものである。「稻妻」「鳩吹」「霧の海、霧の笹、霧の杏」「火桶、火鉢」は閑人の名を以て發表されて居る。其他には記名がないが著者所藏の新聞切抜及び日記等に依り著者のものなることを推定した。

「話の種」は明治四十年から四十一年へかけて「東京朝日新聞」に掲載されたものである。此等の文章はTR、TR生、HK等の名を以て發表されて居り、記名のないものも著者所藏の切抜帳等に依つて著者のものなることを推定した。

「赤」は牛頓の名を以て明治三十二年五月「ホトトギス」第二卷第八號に發表された。

「神」は牛頓の名を以て明治三十三年三月「ホトトギス」第三卷第五號に發表された。

ラムフのいろ／＼以下は總て明治四十年及び四十一年の「東京朝日新聞」に發表されたものである。此のうち「ラムフのいろ／＼」は禿の頭、「汽船の改良」はTR生、「無線電信の近狀」

はTR、「天然色寫眞新法」「ムーア燈」はJK、「宇宙の二大星流」は日生、「相撲と力學」はT
T生、「蚊帳の研究」「天河と星の數」「卵の形」「猫六題」は閑人の名を以て發表されてゐる。最
後の「萬年筆」は「東京朝日新聞」の「萬年筆まんねんふで」といふ欄に掲載されたもので、其のうちの初め
の二篇にはJKの名があるが、其他には記名がない。記名を缺くものは著者所藏の切拔帳等に據
つて推定したこと前と同様である。

此等の校訂は新聞を原據とし、明白な誤は之を正した。

編 輯 者

昭和十一年十一月二十二日印刷
昭和十一年十一月二十七日發行

寺田寅彦全集 文學篇 第六卷

著者

寺田寅彦

發行者

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
岩波茂雄

印刷者

東京市神田區美土代町十六番地
島連太郎

印刷所

東京市神田區美土代町十六番地
三秀舎

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

發行所
岩波書店

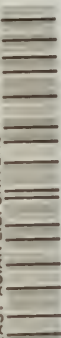
電話(33) 一八七・一八八番
九段(33) 一八九・一八〇番
振替口座東京七四四一六番

(寺島製本)



古谷夏子
Natsuko Y. Furuya

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03185 7014